戦後の日韓外来語の通時的対照研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黄,秀智 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000365

明治大学大学院国際日本学研究科

２０２３年度

博士学位請求論文

戦後の日韓外来語の通時的対照研究

A Diachronic Contrastive Study of Postwar Japanese and Korean Loanwords

学位請求者　国際日本学専攻

黄　秀智

目　次

1章　先行研究のまとめと研究課題の設定 **7**
1.1　本研究の問題意識 7
1.2　先行研究 7
1.2.1　韓国語 8
1.2.2　日本語 9
1.2.3　日韓対照研究 11
1.3　現状の整理 11
1.4　本研究の目的と課題 13
2章　日韓新聞コーパスの作成と外来語の語彙調査の手順 **14**
2.1　日韓のコーパスの現状 14
2.2　新聞コーパス作成における先行研究の概要 14
2.3　本研究で作成する戦後の新聞データ 16
2.4　2000年以降の日本新聞コーパスの作成 16
2.5　韓国新聞コーパスの作成 18
2.5.1　テキスト処理 19
2.5.2　外来語の調査単位設定 22
2.6　語彙分析方法 23
2.6.1　頻度集計 23
2.6.2　意味分野 24
2.6.3　文脈分析 25
3章　現代の日韓外来語の特徴 **27**
3.1　本章の目的 27
3.2　外来語の出現率の比較 27
3.3　高頻度外来語の意味分野の調査 29
3.4　抽象的な意味分野の高頻度外来語 30
3.5　ランクの違いによる類型化 34
3.6　類型別に見る日韓外来語の特徴 36

3.6.1 「日本語-高頻度・韓国語-低頻度」（以下、JH-KL）類型 37
3.6.2 「日本語-低頻度・韓国語-高頻度」（以下、JL-KH）類型 39
3.6.3 「日本語-出現・韓国語-無し」（以下、J○-KN） 類型 41
3.6.4 「日本語-無し・韓国語-出現」（以下、JN-K○）類型 43
3.7 まとめ..... 45
4章 日韓外来語の量的推移 46
4.1 日韓外来語の量的推移をとらえる観点 46
4.2 外来語の出現率の通時的な比較 46
4.2.1 韓国語における通時的な量的推移 46
4.2.2 韓国語における通時的量的推移の背景説明 47
4.2.3 先行研究による日本語の外来語の量的推移 48
4.2.4 日本語における通時的量的推移 51
4.3 日韓外来語の量的推移比較 52
4.4 日韓の外来語受容の歴史的背景とその違い..... 53
4.5 まとめ..... 54
5章 増加傾向から見た日韓外来語の特徴 55
5.1 本章の目的 55
5.2 増加傾向係数の算出 55
5.3 外来語の増加傾向とその意味分野 57
5.4 増加傾向から見た日韓外来語の比較分析 59
5.4.1 日本：増加－韓国：変化無し 60
5.4.2 韓国：増加－日本：減少(やや減少)と変化無し..... 62
5.5 まとめ..... 64
6章 類義語と品詞の観点から見た日韓外来語の特徴 65
6.1 本章の目的 65
6.2 類義語との関係 65
6.2.1 韓国語で低頻度の外来語の場合 65
6.2.2 ケース 66

6.2.2.1　日本語 66
6.2.2.2　韓国語 67
6.2.3　スペース 71
6.2.3.1　日本語 72
6.2.3.2　韓国語 75
6.2.3.3　「スペース」の日韓分析 77
6.2.4　韓国語で出現無しの外来語の場合 78
6.3　品詞の特徴 82
6.3.1　「アピール」と「アピールする」 84
6.3.2　「スタート」と「スタートする」 86
6.3.3　「イメージ」と「イメージする」 87
6.3.3.1　日本語 87
6.3.3.2　韓国語 89
6.4　まとめ 92
7章　終章 **93**
7.1　各章のまとめ 93
7.2　結論 94
7.3　今後の課題と展望 95
謝辞 **97**
参考文献 **98**
語彙表 **103**
[語彙表1]現代日韓外来語―上位200語リスト 103
[語彙表2]現代日韓外来語―類型別語彙リスト 106
[語彙表3]韓国語の増加傾向係数順の外来語リスト 113

表　目　次

表1　金(2011)による各年文字数や外来語の延べ語数・異なり語数 15
表2　対象外の記事類 17
表3　作成した2000年以降の日本の新聞データの各年の文字数 17
表4　2000年以降の各年の文字数や外来語の延べ語数・異なり語数 18
表5　分析対象の韓国新聞『東亜日報』のページ数 18
表6　『東亜日報』の各年の全体文字数 20
表7　日本の新聞データによる各年の文字数と外来語の延べ語数・異なり語数 27
表8　韓国の新聞データによる各年の文字数と外来語の延べ語数・異なり語数 28
表9　現代日本語の高頻度外来語-抽象的な意味分野（名詞） 31
表10　現代韓国語の高頻度外来語-抽象的な意味分野（名詞） 31
表11　通年度数15回以上の外来語のランクと頻度区間 35
表12　日本語を基準とした韓国語の外来語のランクの比率 35
表13　韓国語を基準とした日本語の外来語のランクの比率 36
表14　日本語-高頻度・韓国語-低頻度の語彙リスト 37
表15　日本語-低頻度・韓国語-高頻度の語彙リスト 39
表16　「J○-KN」類型の通年度数上位100語(意味分野別-名詞) 41
表17　「JN-K○」類型の通年度数上位100語の語彙リスト 43
表18　韓国新聞データによる各年のデータと出現率 46
表19　金(2011)のよる日本語の各年のデータとそれを基に計算した出現率 48
表20　韓国語の「프로그램(プログラム)」の各年の出現率 56
表21　増加傾向の区分による日韓の外来語語数 57
表22　「日本：増加－韓国：変化無し」語の出現率 60
表23　「韓国：増加－日本：減少(やや減少)」語の出現率 62
表24　「韓国:増加－日本：変化無し」語の出現率 63
表25　各語における韓国語の出現度数と出現率 66
表26　各語における日本語の出現度数と出現率 66
表27　東亜日報における「케이스(ケース)」の前項目共起情報 68
表28　韓国語における「케이스(ケース)」とその類義語の出現度数と出現率 69
表29　金(2011)と現代日本新聞データからみる出現度数と出現率 72

表30　SHCの新聞と雑誌のデータからみる「スペース」とその類義語の出現度数とPMW 72
表31　毎日新聞における 「スペース」の前項目の共起語情報 74
表32　毎日新聞における「空間」の前項目の共起語情報..... 74
表33　韓国語の「스페이스（スペース）」の1945年から2015年までの推移..... 75
表34　韓国語における「스페이스(スペース)」と「공간(空間)」の出現度数と出現率 76
表35　東亜日報における「공간(空間)」の前項目のコロケーション情報..... 77
表36　日本語-外来語・韓国語-類義語 78
表37　金(2011)と現代日本新聞データからみる出現度数..... 79
表38　SHCの新聞と雑誌のデータからみる各語の出現度数とPMW 79
表39　SHCの新聞と雑誌のデータからみる各語の出現度数とPMW 80
表40　韓国新聞データからみる「화장실(化粧室)や변소(便所)」の出現度数と出現率 81
表41　金(2011)と現代日本新聞データからみる「サッカー」の出現度数と出現率..... 81
表42　韓国新聞データからみる「축구(蹴球)」の出現度数と出現率..... 82
表43　金(2011)と現代日本新聞データからみる各語の出現度数と出現率 83
表44　韓国新聞データからみる各語の出現度数と出現率..... 83
表45　新聞データからみる日韓における「アピール」と「アピールする」の出現度数..... 84
表46　新聞データからみる日韓における「スタート」と「スタートする」の出現度数..... 86
表47　現代日本新聞データにおける「イメージ」「イメージする」の出現度数 88
表48　現代日本新聞データにおける「イメージ+する」の語句例 89
表49　韓国新聞データにおける「이미지(イメージ)」の出現度数 90

図　目　次

図 1　先行研究と作成した新聞データの説明および時代区分 16
図 2　関数を用いて英語表記のみを取り出した結果 17
図 3　「分かち書き」処理前 19
図 4　「分かち書き」処理後 19
図 5　1955 年の韓国新聞の表記 20
図 6　2005 年の韓国新聞の表記 20
図 7　韓国語「kiwi」を用いた形態素解析の結果 21
図 8　日本語に合わせるための韓国語の外来語処理手順 21
図 9　日本語と韓国語の意味分野の確認とその手順の例 24
図 10　現代の日韓外来語の出現率(三カ年合計, 1 万字当たりの出現率) 28
図 11　現代日韓外来語の上位 200 語の意味分野 29
図 12　「JH-KL」の意味分野別語数(名詞) 38
図 13　「JL-KH」の意味分野別語数(名詞) 40
図 14　韓国の新聞データによる 1 万字当たりの外来語の出現率の推移 47
図 15　金（2011）のデータによる 1 万字当たりの外来語の出現率の推移 49
図 16　日本新聞データによる 2000 年以降の 1 万字当たりの外来語の出現率の推移 50
図 17　日本の新聞データによる 1 万字当たりの外来語の出現率の推移 51
図 18　日韓の 1 万字当たりの外来語の出現率の推移比較 52
図 19　増加傾向係数の算出方法(国立国語研究所, 1987) 55
図 20　金(2011)による増加傾向係数と区分 56
図 21　日本語(金, 2011)と韓国語の 20 世紀後半の増加傾向の語数 57
図 22　金(2011)による「外来語の増減と意味分野」(p. 17) 58
図 23　韓国語の外来語の増減と意味分野 59
図 24　金(2011)のデータによる「ケース」とその類銀語の推移(p. 108) 67
図 25　「케이스(ケース)」とその類義語の出現率の推移 70

1. 先行研究のまとめと研究課題の設定

1.1本研究の問題意識

近年、日本と韓国では、技術進歩、経済発展、国際的な交流の増加に伴い、外来語が急速に増加している。日常生活においてはもちろんのこと、テクノロジー、ファッション、食文化といった多岐にわたる領域で外来語の影響がみられる。日本と韓国は地理的にも文化的にも近い関係にあり、西洋から外国語を受け入れ、自国語として使用するという多くの歴史的共通点を持っている。しかし、これらの類似性にもかかわらず、日本語と韓国語の間で外来語の使用率には差があることが言われており、その使用に関しても違いが観察される。例として、日本では、「デパートメントストア」「コンビニエンスストア」「トイレ」といった英語由来の外来語が日常用語として定着しているのに対し、韓国では同等の概念に対して漢語や固有語を用いることが多い（例：百貨店、便宜店、化粧室）。また、日本語は外来語が一般的な言語使用において抽象的な概念を持つ語彙として浸透しているのに対し、韓国語においては、このような傾向がそれほど強くない可能性がある。

このような現象は、単純な言語接触といった外来語に対する両国の受容態度の違いの結果だけではなく、言語内的な進化や言語体系における外来語の統合過程の違いによるものかもしれない。受容態度は、確かに外来語の増加に影響を与える一因であるが、それは一部の説明に過ぎない。外来語の使用の差や使用有無の差などの多様な差異は、その他多くの要素、例えば、如何なる外来語が量的にどのように変化してきたのか、両国においてどのような外来語を主に使用しており、文章中でどのような役割を担っているのかといった多くの要素にも影響される。しかし、日本語と韓国語の外来語においてどのような差異が存在し、なぜ生じているのかについてはまだ十分に解明されていない。

そこで、本研究では、日本語と韓国語における外来語の使用の相違を量的および質的な側面から検証し、それらが言語体系内でどのように使用され、どのような相違が見られるのか、また、それらの相違がなぜ生じるのかについて考察することを目指す。

1.2　先行研究

本節では、日本と韓国で報告されている、外来語に着目した先行研究を概観する。吉沢・石川(1979)によると「外来語は外国語から日本語の中に入ってきた単語である。いわゆる漢語も中国から取り入れたものであるから、本来外来語といってもよいはずであるが、慣習として含めない。日本で外来語というのは、主としてヨーロッパの諸言語から日本語の中に入ってきた言葉を指していうのが普通である」と述べている。韓国語において外来語は、中国との接触により韓国語に入り込んだ漢語を排除すると、近代から増えた西洋からの語を意味するのが一般である(Jung 2004, Jeong 2013）。

そこで、本研究において「外来語」とは、ヨーロッパの諸言語から日本語や韓国語の中に入ってきた語であり、日本語においては、カタカナで表記される語彙を、韓国語においては、ハングルで表記された語であることを示す。

1.2.1 韓国語

ここでは、韓国語の外来語の研究がどのようになされているのかを見ていきたい。

まず、韓国語の語彙調査からみてみると、語彙使用頻度に関する大規模の語彙調査は 1956 年を終わりにほぼ行われておらず、1990 年代から韓国語頻度調査に対する研究成果報告されてきた。(Kim 2016, Seo 2017)。国立国語研究院(現：国立国語院,2000)では、20 世紀前半の 27 種作品集の中の詩を利用して固有語と漢字語（漢語）、外来語の語彙リストを作成しており、Cho(2002) は、韓国語学習用の語彙選定のための事前作業として 1999 年･2001 年のコーパスや 2001 年の口語コーパスを用いて韓国語学習用の語彙を選定した。この二つの研究を含め、韓国語の語彙研究は、主に、頻度・使用実態･品詞などを明らかにすることが主な目的である。

近年には、コーパス構築や自然言語処理への関心が高まりつつ、コーパス構築やそのデータを用いた韓国語の量的変化や背景を明らかにした研究が多く報告されている(Kim HyeYoung・Kang BeomMo 2013, Choi JaeWoong・Lee DoGil 2014, Kim Ilhwan 2014)。しかし、その中で、外来語の量的変化に注目した研究はほとんど見当たらない。

一方、外来語の意味や言語特徴についての研究は、多く報告されている。まず、外来語の言語特徴を把握した研究を紹介する(Noh 2013, Song 2022)。Noh(2013)では、意味の面で、外国語が韓国語に輸入され外来語になる過程で見られる意味転移が生じる様相を、意味拡大･意味縮小・意味下落・意味上昇・比喩による意味転移に分けて分析した。その結果、借用語で一般にあわられる意味縮小の傾向が、韓国語の外来語で最も普遍的類型として現れ、意味拡張はまれに特殊的なものであると指摘している。次に、Song(2022)は、韓国語の外来語教育の観点で、韓国の国立国語院が構築した『日常会話コーパス 2020』を用いて、最近の韓国語の口語外来語の使用意味と言語特徴について既存語との関係の分析を通して考察した。個別語の検討を通して、外来語毎に変化の様相が違うことや意味が変化する大きな理由として、既存語(既に存在する他の表現)との争いを指摘した。

外来語の品詞に注目して「外来語+HADA（する）」を分析した研究には、国語辞典の表題語を用いて「英語+HADA（する）」を既存語との類似関係の分析を通して、その定着様相を明らかにした Son HyeOk・Lee SuMi(2011)や日韓対照研究の観点で『현대 국어 사용 빈도 조사(現代国語使用頻度調査)』を使用し、韓国語で使用されている外来語形容詞を分析して日本語での使用様相を考察した裵(2015)、日韓の国語辞典を利用し、外来語動詞の比較分析を通して日韓の共通点と相違点を明らかにした Lee(2023)

などがある。その中、裵晋影(2015)では、韓国で用いられる外来語形容詞は非常に少ないことや韓国語で用いられる外来語形容詞の7割は、日本語でも使われることを指摘した。また、Lee(2023)では、日韓の「外来語+HADA（する）」の言語特徴は類似しているが、品詞の判別の違いや日本語では自他の区別が比較的明確である一方、韓国語の場合は区別が曖昧であることから韓国語は一つの外来語が自他両方で使用される可能性を述べた。

1.2.2　日本語

では、日本語の外来語の研究には、どのような研究がなされているのかを見ていきたい。日本語における外来語の研究は、韓国語に比して、比較的多くなされていると言える。

まず、日本語の語彙調査は、国立国語研究所で 1948 年から引き続き行われてきた。その中でも、現代日本語の用語用字の使用実態を明らかにするため行われた「現代雑誌九十種の用語用字」(1962)と「電子計算機による新聞の語彙調査」(1970)がある。この二つの研究は、大規模の研究であり、一般雑誌と新聞という、現代の言語生活で欠かせない資料を用いて、データ作成の方法や意味分野・語種・使用率などの語彙情報を詳細にリスト化した、非常に優れた研究成果が得られている。

日本語の外来語の通時的な量的・質的な変化に着目した代表的な研究として橋本(2010)と金(2011)が挙げられる。まず、橋本(2010)は、新聞社説に出現する外来語の量的推移を分析した研究である。 橋本(2010)では、『朝日新聞』の 1911 から 2005 年、および『読売新聞』の 1932 から 2002 年を独自にコーパス化した。橋本(2010)は外来語の出現率の推移を『朝日新聞』のコーパスに基づいて分析した後、それが特定の新聞による使用傾向でないことを確認するために、『読売新聞』のコーパスを用いて検証した。その結果、1950 年代後半から、外来語の使用率は大きく増加し、1970 年代後半以降は停滞するという傾向があること、すなわち、日本の外来語の通時的な増加や普及の過程は、「S 字カーブ」で説明できることを明らかにした。

次に、金(2011)は、20 世紀後半の新聞語彙での外来語の基本語化の過程について分析した。金(2011)は、『毎日新聞』の 1950 年から 2000 年までを 10 年刻みで収集し、各年 200 万字程度、全体で 1,000 万字を超える大規模なコーパスを構築した。その後、外来語の「増加傾向係数」を算出し、その中から抽象的な意味を持つ外来語を選定し、それぞれの類義語の出現率や推移を確認することで、外来語がどのようにして基本語化していったのか、その過程を検討した。

上記の二つの研究は、新聞を分析対象としている研究であり、長期間にわたる日本語の外来語の推移を明らかにした点で注目すべきであろう。新聞以外の媒体を分析対象とした研究には、国語辞典(鄧, 2013)や国会会議録(茂木, 2008)、総合雑誌(高崎, 2019)などを用いた研究が報告されている。その中で、鄧(2013)では、大正期を大きく初期・中期・末期の三つに分け、各時期の新語辞典全 10 種に収録さ

れた外来語を抽出し、計量的分析を通して、大正期の外来語の特徴について述べた。その結果、大正初期の外来語は主に明治以前から存在するもので、新たに導入されたものは約 2 割であった。また、大正初期から末期まで、社会思想用語、経済関係の語、視聴覚文化の進歩による語といった特色があり、語形の長い外来語の場合は、新語辞典に収録されていたものの、結局、日本語に定着せずに消えてしまったなどの特徴を述べた。同じく、大正期の外来語を分析対象にした研究には高崎(2019)、星野(2019)がある。

一方、外来語の意味や言語特徴の研究は数多く報告されている。まず、近現代における外来語の個別語の変遷過程について考察した研究には、石(2018, 2019, 2020)がある。その中で、石(2020)では、20 世紀後半の日本語の外来語において抽象的な外来語が急増していることを説明して、文学作品と新聞のデータを用いて急増が起きるその増加傾向を分析した。その結果、原語から抽象的な外来語の再借用が起こっており、日本の外来語史において、1960 年と 1970 年代が外来語の再借用時期である可能性を示唆した。

次に、茂木(2008)は、国会会議録の検索システムを利用して外来語の「マニフェスト」「アメニティ(一)」の 2 語がいつからどのように使われているかに焦点を当て、事例研究を進めた。また、金(2019)では、金(2011)のデータからその分量を増やし、20 世紀後半の新聞の中で基本語化したと推測できる「ルール」の叙述型の拡張過程について考察した。その結果、意味的・位相的な側面で使用分野や意味の拡張が見られ、類義語「規則」の意味との違いがなくなり、その意味領域を奪い、拡張していくことを説明している。続いて、陳（2014）は、1879 年から 2000 年までの『朝日新聞』全分野欄の用例に基づいて「ケア」は、高齢者や患者、学生、選手を対象に内面的なサポートに用いられる一方、制度や学術の文脈でよく使われる「介護」は主に高齢者や患者の生活サポートに関連しているとの意味がどのようなプロセスを経てきたかについて明確にした。その結果、外来語である「ケア」の場合、社会的背景により使用量や意味が拡大していくことを述べ、狭い意味から階段的拡張してきたことを指摘した。上述の金(2011, 2019)と陳(2014)のほかに、既存語との関係から外来語の意味特徴や変化の過程を説明した研究には、宮田・田中(2006)、佐藤(2013)などがある。

外来語の品詞に注目して「外来語+する」を分析した研究には、山田(2012)、茂木(2015)、北澤・王(2021)が挙げられる。山田(2012)は、「ゲットする」と「タッチする」の辞書での意味記述から意味用法を調査し、日本語における使用法や機能、そして一部の動詞が広く受け入れられる理由を考察した。その結果、「タッチする」の新用法は従来の動詞文型と異なり自動詞的にも使用されるが、新しさは目立たない。一方、「ゲットする」は「手に入れる」という意味と重なるが、より軽快で遊び心のある表現として使われることが明らかにされた。茂木(2015)は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を使用

して「マークする」の意味用法を用例分析から確認し、類義表現との比較を行った。特に、「マークする」と「記録する」が共起するヲ格名詞の分析から、両動詞の間に意味的な差があることを明らかにした。北澤・王(2021)は、外来語サ変動詞の自動詞文と他動詞文を中心に、実例に基づいて使用実態を調査分析した。その結果、外来語サ変動詞では自動詞、他動詞にかかわらず「スル」の使用が顕著であり、「サセル」「サレル」は少なく使用されている。自動詞用法が優勢な場合でも「スル」が好まれ、他動詞用法においては「サレル」よりも「スル」の自動詞用法がしばしば使われる。ガ格やヲ格を取る場合の動詞形の選択には明確な傾向が見られる。

1.2.3　日韓対照研究

最後に、日韓対照の観点での外来語研究には、以下のものが報告されている。

Chang(2016)では、日本語の『現代日本語書き言葉均衡コーパス語彙表,ver.1.0』と韓国語の『현대 국어 사용 빈도 조사(現代国語使用頻度調査)』の語彙表を利用して外来語の使用率を算出している。この研究は、漢語と外来語に注目して語彙レベルを測定し日韓比較を行った。その結果、韓国語は日本語に比べて外来語の使用が少ない傾向があることを指摘した。また、岸本ほか(2022)では、2013 年から 2021 年まで 9 年間の経済新聞社説を用いて、社説の中での外来語の出現率が日本語の方が 2.5 倍弱高いことを明らかにし、岸本(2023)では、岸本ほか(2022)からデータを増やし、同様の研究方法に沿って外来語を抽出した。その後、『分類語彙表』を用いて意味分野の分類を行い、日韓比較を行った。その結果、2013 年から 2022 年までの日韓新聞社説での外来語は、日本語は抽象的関係、韓国語は人間活動の分布が多いといる結果を明らかにした。続いて、林(2021)では、日本語と韓国語における外来語の受容と使用に関する違いを明らかにした。日韓の辞典と新聞記事を分析し、品詞性、量的分布、動詞化といった側面から両言語の共時的な比較分析を行った。その結果、日本語は外来語を動詞化する傾向にあるのに対し、韓国語では名詞化する傾向が強いことや外来語の使用における違いは時間の経過と共に固有語や漢語に置き換わる傾向にあることを確認した。特に新型コロナウイルスに関連する外来語の受容において、日本語と韓国語では異なるアプローチがとられていることが確認された。

1.3　現状の整理

以上、日本語と韓国語の外来語に関する先行研究を、語彙調査、量的変化、意味及び言語特徴、品詞、そして日韓対照の観点から整理した。

まず、大規模な語彙調査について見ると、日本語研究は長期にわたる詳細な語彙の実態把握に重きを置いている。対照的に、韓国語研究は近年になって量的変化やコーパスの構築に注意を向け始めているが、外来語に関する詳細な調査は日本のそれに及ばない。日本語の外来語研究は新聞や辞書といった様々なメディアを通じて行われ、外来語の量的変化や基本語化の過程を探究する研究が存在する。これ

により、外来語の使用傾向や時代による変遷が明らかにされている。しかし、韓国語の外来語研究は量的変化を詳細に追う時系列分析において不足が見られる。

意味や言語特徴の研究に関しては、日本語では個々の語の事例研究を通じて、外来語の意味変化や意味拡張、既存語との関係などが詳細に分析され、使用範囲が広がる傾向と類義語との境界が薄れる傾向が明らかにされている。一方で、韓国語研究は個別の外来語の詳細な事例研究よりも全体的な使用傾向に焦点を置き、外来語が意味を特定化する過程や既存語との競合が意味変化の重要な要因であることを指摘している。

品詞の研究では、韓国語研究が外来語の品詞定着や言語間の類似性に注目しており、特に形容詞としての外来語は少なく、多くが日本語と共通していることが示されている。韓国語では品詞や自他動詞の区別があいまいになる可能性が指摘されている。これに対し、日本語の研究では外来語動詞の意味・用法、類義語との比較、自他動詞の使用傾向に焦点を当てており、「する」の使用が自他動詞を問わず顕著であることが確認されている。

日本語における外来語の研究は、多様なメディアを利用して行われており、公的なメディアを基にした長期的な量的推移の分析や外来語と既存語の意味関係の研究が存在する。一方、韓国語の外来語研究は、資料のデジタル化の遅れと社会的な事情による研究の空白の影響を受け、語彙調査の拡充が 1990 年代以降に行われている。この結果、韓国語の研究は日本語のそれに比べてまだ充分ではないとされている。現代の日韓外来語の対照研究がいくつか行われ、言語間の相違や特徴は明らかにされているものの、時間的な変遷を追う通時的な研究はデータの不備により不足している状況であると考えられる。日韓の外来語の差異とその原因を明らかにするためには、韓国語の外来語の量的推移を明確にし、日韓比較が可能なデータベースを構築する必要がある。また、韓国語の外来語に対する詳細な事例研究を行い、その意味や言語特徴を探ることで、その結果を日本語と比較分析することで、両言語間の差異とその発生理由を検証することができる。これまでの整理を踏まえ、着眼点をまとめる。

- 韓国語の外来語の量的推移を把握し、日韓言語の比較研究を行うため、新聞を資料として韓国語の通時的なデータを収集して作成する。
- 作成したデータをもとに、韓国語における外来語の戦後から現在に至るまでの推移を把握する。また、2000 年以降の日本語における外来語の出現率を把握して、韓国語と比較分析する。
- 外来語の意味分野、類義語との関係、品詞の特性の特徴から、日韓間での外来語の相違を通時的な変遷の観点から詳細に分析する。

1.4　本研究の目的と課題

本研究の目的は、日本語と韓国語の新聞コーパスに基づく計量的な分析を行うことで、両言語間の外来語の量的変遷とその差異を解明することと、新聞で見られる外来語の意味用法の比較分析を行い、日韓外来語の言語特徴を考察することである。この目的を達成するために、以下の課題を設定し、研究を進める 。

第一に、データベースの作成を行う。韓国語の場合は戦後直後からの外来語の変遷を確認するため、1945 年から 2015 年にかけての韓国新聞データを収集・整理する。一方、日本語の場合は、先行研究における 1950 年から 2000 年までのデータに基づき、引き続き言語特徴を把握する目的で、2000 年から 2020 年までの日本新聞データを収集する。データベースの作成方法については、第 2 章で詳述する。

第二に、量的分析を実施する。収集したデータセットを基に、外来語の出現率を計算し、20 世紀後半と現代に区分して、その推移と特徴を分析する。現代に関しては、データベースを用いて日韓の外来語出現率を比較し、差異を明らかにする。この分析については、第 3 章で論じる。20 世紀後半に関しては、金（2011）の研究結果と比較し、時間を通じた推移を明らかにするが、この内容は第 4 章で論じる。

第三に、相違点を特定する。現代の分析では、外来語の意味分野ごとのランク付けによる分類を行い、日韓の頻度の違いに基づいた類型化を行った。この分析は第 3 章で扱う。20 世紀後半の分析では、「増加傾向係数」を用いて外来語の使用傾向の差異を数値的に比較し、結果を先行研究の成果と対照する。この分析は第 5 章で論じる。

第四に、類義語との関係や品詞に関するデータを詳細に分析し、日韓の外来語に見られる相違の特徴を明らかにする。これには、類義語の比較や言語使用における品詞の動向の分析が含まれる。この内容は第 6 章で論じる。

2章　日韓新聞コーパス作成と外来語の語彙調査の手順

2.1 日韓のコーパスの現状

近年、日本と韓国は、コーパス構築や言語資源開発において顕著な進展を見せている。これらの国々は、それぞれの言語研究を推進し、文化の保存と発展を目的としてこれらの技術を導入している。ただし、この二つの国がとるアプローチには異なる特性がある。

山崎(2018)によると、日本語のコーパス構築において、「京都大学テキストコーパス」(1997) は初の試みである。国立国語研究所で行われた書き言葉や話し言葉の実態調査は、その手法がコーパス言語学に近いため、日本では学術研究機関や大学が主導して言語資源の開発が進められていると考えられる。これらの機関は、多様な日本語テキストを収集し、その成果を言語学者や AI 開発者と共有している。また、日本においては、日本語の使用に対する理解を深め、文化的独自性を保持するプロジェクトも実施されている。その結果、日本語のコーパスはその豊富さと多様性、そしてアクセスの容易さから、多くの研究者に利用されているとされる。

韓国語のコーパス構築は、1980 年代から 1990 年代初頭のコンピュータの普及を契機に始まったが、大規模なコーパスの開発は 2000 年代から本格的に始まった。韓国は政府が主導する形で言語資源の開発を進めており、その結果、多様なテキストデータベースが構築されている。中でも「世宗コーパス」は 1998 年から 2007 年の 10 年間で作成された大型のコーパスであり、多くの研究者に利用されている(So, 2019)。しかし、このコーパスの質や量にはいくつかの問題点が指摘されている(Kim ほか, 2013)。韓国の国立国語院は、2018 年から国語ビッグデータ構築事業を進行しており、2020 年からは「모두의 말뭉치（みんなのコーパス）」を公開しているが、そのアクセス性や使用の容易さには課題がある。

韓国語のコーパスには、質や量に関する問題、データの重複、均衡性の不足、アクセス性の低さ、そして、すぐに活用できる形になっていないという課題が存在している。これらの問題点を鑑み、韓国語の外来語の通時的な分析を適切に行うためには、独自にデータを構築する必要があると言える。さらに、そのようなデータの構築に関しては、韓国語の先行研究で具体的な報告がないため、日本語の外来語のコーパス研究を参考にし、独自の新聞コーパスを作成する方向での取り組みが望ましいと考えられる。

2.2　新聞コーパス作成における先行研究の概要

本節では、韓国新聞コーパスの構築に際し、日本語の外来語の通時的な変遷を研究した金(2011)の方法を中心に考察する。この研究方法は、韓国新聞コーパス構築の参考として有益な示唆を持つため、先行研究の詳細を検討することとする。以下の部分は、新聞を資料とする韓国語の通時的なデータ収集・作成の課題を達成する目的で、金(2011)の内容を整理し、コーパス構築や外来語抽出の要点を示すものである。

金(2011)では、20 世紀後半における抽象的な外来語の基本語化を明らかにするため『毎日新聞』を用いて 1950 年から 2000 年までほぼ 10 年刻みで毎月 2 日（5 日、25 日）分、各年 24 日分の記事を利用した。ほぼ一日 2 ページである 1950 年やや少ない 1960 年を除けば、各年 200 万字程度で全体で 1000 万字を超える大規模なコーパスを独自に構築した。新聞記事を備える際、以下のような記事類は全て除外した。

広告、テレビ・ラジオ欄、都内版・地方版（シティニュースと都民ニュースを含む）、俳句・川柳、証券・株、人事、決算、訃告、競馬、囲碁、将棋、相撲の取り組み表、写真・地図・表・イラスト・漫画およびその説明、「きょうの運動」、「10 年前」

外来語の抽出のため、形態素解析器として「MeCab（ver.0.98）」を、解析辞書として「UniDic1.3.8」を採用した。『UniDic』は、国立国語研究所によって設計された短単位を基盤とする解析辞書であり、一貫した規則に基づき、書字形レベルで助詞や助動詞を除外した述べ語数と異なり語数を明確に示すことができる。

外来語の頻度の集計は、形態素解析器によるデータの解析後、①漢字表記、②アルファベット表記、③数字および記号を排除し、カタカナ表記のみを抽出した。その後、『分類語彙表』を使用して同語異語判別を行い、語彙頻度表を作成し、通年度数（各年の出現度数の合計）30 以上のものを選定して分析を行った。抽出されたデータの分析に当たり、データ量の違いから粗頻度では増減の正確な動向を直接把握することが困難であるため、100 万字当たりの外来語出現率（延べ語数/全体文字数$\times 10^6$を計算した。さらに、増加傾向係数を導出し、各語の増減の動向を数値化して比較した。

以下は、上記の方法に沿って算出された各年の全体文字数と外来語の延べ語数および異なり語数の概要である。

表 1　金(2011)による各年文字数や外来語の延べ語数・異なり語数

年代	1950 年	1960 年	11970 年	1980 年	1991 年	2000 年
全体文字数	530,678	1,161,251	2,153,286	2,131,901	1,823,274	2,332,788
延べ語数	3,930	15,738	27,425	27,543	21,897	39,378
異なり語数	996	2,043	2,782	2,699	2,545	3,286

2.3　本研究で作成する戦後の新聞データ

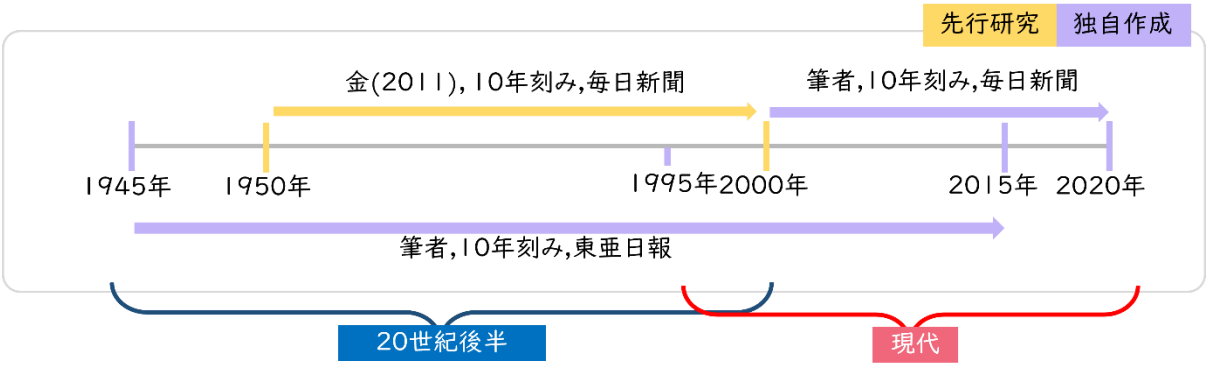


図 1　先行研究と作成した新聞データの説明および時代区分

先行研究である金（2011）の方法に基づき、韓国新聞コーパスを作成した。韓国の戦後直後からの外来語の動向を確認するために、1945 年 12 月以降を調査対象とした。特に、韓国は 1950 年から 1953 年まで韓国戦争の時期であったため、この期間の記事の言語特性は戦争の影響を受けたと考えられる。先行研究が 1950 年からの記事を取り上げていたが、戦後の言語の動向をより正確に捉えるため、1945 年からの記事を調査対象とした。

対象とした韓国新聞は『東亜日報』である。『東亜日報』は 1920 年 4 月 1 日に創刊され、1940 年 8 月に一時的に廃刊となったが、1945 年 12 月に復刊する。それ以後、現在に至るまで継続的に発行され、韓国の主要な日刊紙の一つとして位置づけられている。本研究では、『東亜日報』の 1945 年 12 月から 2015 年 12 月までのデータを 10 年間隔で収集・作成した。一方、日本語のデータに関しては、金（2011）のデータは 2000 年までのものであった。2000 年以降の動向を把握するために、2000 年、2010 年、2020 年のデータを追加で収集・作成し、韓国語データの 1995 年、2005 年、2015 年と比較できるようにした。

金(2011)の研究方法を基に同様の日本新聞データを作成しようと努めたが、完全に一致するわけではない。そのため、分析の際には時期を分けて考察する必要があると判断した。まず、韓国語の 1945 年から 1995 年までの 6 つの年次を対象として, 先行研究の 1950 年から 2000 年までの六つの年次と比較分析を行うが、この期間を「20 世紀後半」と設定した。また、一般に「現代」は直近の数十年間を指すため、日本語においては 2000 年から 2020 年まで、韓国語においては 1995 年から 2015 年までの各 20 年間を「現代」として扱うこととし、分析を進める。

2.4　2000 年以降の日本新聞コーパスの作成

本節では、金(2011)に倣い、2000 年以降の日本新聞データを作成した。分析の対象となる年は、2000 年から 10 年刻みで 2010 年、2020 年までである。『CD-毎日新聞データ集』の「CD-毎日新聞 tag/データ

構成」の説明ファイルを確認し、毎月 2 日（5 日、25 日）の見出し文(データ集の T1)と記事全文(データ集の T2)の記事を抽出した。その後、テキスト検索で把握できる範囲内で以下の記事類は対象外とした。

表 2　対象外の記事類

金（2011）	広告、テレビ・ラジオ欄、都内版・地方版（シティニュースと都民ニュースを含む）、俳句・川柳、証券・株、人事、決算、訃告、競馬、囲碁、将棋、相撲の取り組み表、写真・地図・表・イラスト・漫画およびその説明、「きょうの運動」、「10 年前」
本稿	広告、テレビ・ラジオ欄、俳句・川柳、証券・株、人事、決算、訃告、競馬、囲碁、将棋、 写真・地図・表・イラスト・漫画およびその説明

上記の記事類を除外して作成した 2000 年以降の日本新聞データの全体文字数は以下のようである。

表 3　作成した 2000 年以降の日本新聞データの各年の文字数

年代	2000 年	2010 年	2020 年
全体文字数	3,829,929	2,941,407	2,463,459

テキストデータを作成してから形態素解析を行い外来語を抽出した。形態素解析には「Web 茶まめ」を用いた。「Web 茶まめ」は、金(2011)で使用している解析辞書の「UniDic」と形態素解析器の「MeCab」を採用している。また、web ブラウザ上で利用することができ、解析結果を Excel ファイルで読み込むことができる点で、すぐその結果を活用して分析することができる利点があるため、「Web 茶まめ」を用いて形態素解析を行った。用いた辞書のバージョンは「Unidic3.1.1」である。

解析後、韓国語との対応可能な資料を作るため、語彙素レベルで記載されている英語表記を取り出す。英語抽出は Excel を用いて行うが、その関数を以下に示す。

```
=TEXTJOIN("",,IFERROR(MID([語彙素セルの行番号],ISNUMBER((SEARCH(MID(D2,ROW(INDIRECT("1:"&
LEN([語彙素セルの行番号]))),1),"abcdefghijklmnopqrstuvwxyzABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ")))*RO
W(INDIRECT("1:"&LEN([語彙素セルの行番号]))),1),""))
```

語彙素	英語
アーカイブ-archive	archive
アーカイブ-archive	archive
アーキテクチャー-architecture	architecture
アーケード-arcade	arcade

図 2　関数を用いて英語表記のみを取り出した結果

この関数を用いることで、図 2 の語彙素から英語のみを取り出すことが可能になる。その後、書字形レベルで、①漢字表記、②アルファベット表記、③数字および記号は除外し、カタカナ表記のみを抽出した上で『分類語彙表』を使用して同音異義語の識別を行った。また、「コンピューター」と「コンピュータ」、「バイオリン」と「ヴァイオリン」などの表記の揺れに関しては、同語として判別し、「プロ」と「プロフェッショナル」、「アマ」と「アマチュア」のような略語の場合は、別語として処理する。このように集計した結果をまとめると以下のようである。

表 4　2000 年以降の各年の文字数や外来語の延べ語数・異なり語数

年代	2000 年	2010 年	2020 年
全体文字数	3, 829, 929	2, 941, 407	2, 463, 459
延べ語数	61, 088	46, 641	43, 282
異なり語数	4, 727	4, 024	3, 550

2.5　韓国新聞コーパスの作成

本節では、韓国新聞コーパスの構築方法について述べていきたい。前節までの日本語データと比較できるように、韓国新聞の『東亜日報』を利用して韓国新聞コーパスを作成した。本研究の分析対象は、1945 年 12 月から 10 年刻みに 2015 年 12 月までの合計 8 つの年次であり、各年における 12 月に発行されたデータ全体である。戦後直後の韓国語の外来語がどのように変化していったのかを把握する目的で、1945年12月をはじめとする。各年の新聞のページ数と日数については、以下に示す。1995年、2005年、2015 年は、日によってページ数が異なるため平均で示した。

表 5　分析対象の韓国新聞『東亜日報』のページ数

	1945 年	1955 年	1965 年	1975 年		1985 年		1995 年	2005 年	2015 年
ページ数	ほぼ 2	4	4	4	8	8	12	平均 30	平均 25	平均 30
日数	28	31	31	18	8	1	25	27	26	27

1955 年と 1965 年を除けば、日曜日は発行されないか休刊日があるため、ほとんど 26 日～28 日であることが確認できる。韓国新聞におけるページ数は、時代とともに変動している。1945 年の戦後直後ではわずか 2 ページに過ぎず、1955 年と 1965 年にはこれが 4 ページに増加するものの、それでも全体的な文字数は 100 万字にも満たない。しかし、1975 年と 1985 年の間にページ数は 8 ページ、さらに 12 ページ

と増加し、文字数も各年で約 130 万字に達した。1995 年以降は新聞のページ数が平均して 25 ページを超えるようになり、この時期から 2015 年までの文字数は年間約 250 万字に上る。

2.5.1 テキスト処理

次は、新聞データのテキスト処理について論じていきたい。まず，『東亜日報』のホームページで新聞紙面の PDF ファイルをダウンロードし、OCR 処理ができている PDF からテキストをそのままコピーしてテキスト化する。テキスト化する際には、正規表現による検索や置換、grep 検索が可能であり、複数ファイルの検索が可能である点で秀丸エディタを用いることとした。

テキスト化されたデータを整理した後、全体文字数を確認する。韓国語の研究の場合、全体語節数を数えて分析を行う。ここでの「全体語節数」とは、韓国語における単語や文法的な意味を持つ最小単位の総数を指し、これには単独の単語だけでなく、文節を形成する要素も含まれる。しかし、①『東亜日報』の紙面をテキスト化した際に分かち書きの間違いが多い点、②大規模のテキストの分かち書きを一斉に正確に修正することが難しい点、③日本語との比較対照研究である点から、本研究では、図 4 のように分かち書きを全て削除して「全体文字数」を数えた。

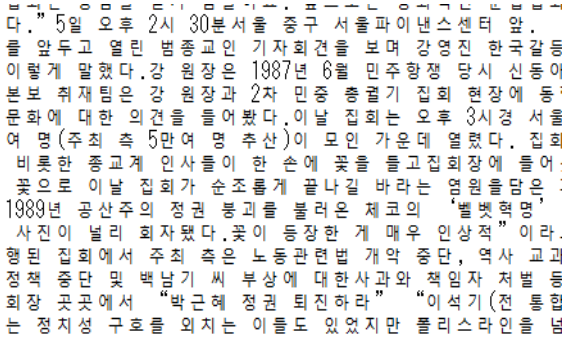


図 3「分かち書き」処理前

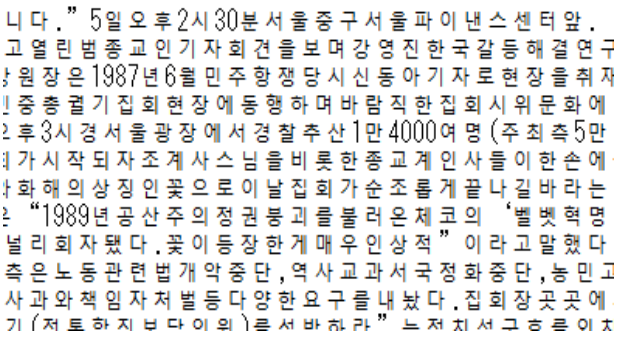


図 4「分かち書き」処理後

その結果、韓国新聞『東亜日報』のテキスト化の流れを経て整理されたデータから各年における全体文字数を表6にて示した。

表6　『東亜日報』の各年の全体文字数

年代	全体文字数
1945年	309, 622
1955年	838, 885
1965年	756, 526
1975年	1, 324, 824
1985年	1, 313, 442
1995年	2, 689, 943
2005年	2, 285, 273
2015年	2, 627, 260

その後、外来語を抽出する。1945 年から 1985 年までの韓国新聞の表記は、以下のように、漢字ハングル混じり文であるため、現在の韓国語の形態素解析器では、正確な形態素解析は困難である。

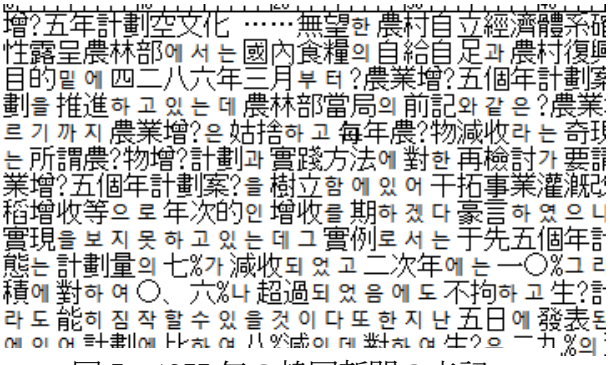


図5　1955年の韓国新聞の表記

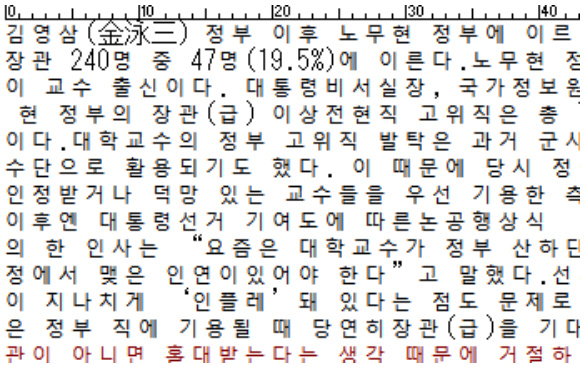


図6　2005年の韓国新聞の表記

また、1985 年までの外来語表記法が現在の表記法とは違うため、外来語の表記が統一されておらず、一つの語に多数の表記が出現する問題があるため、テキスト検索から外来語を抽出することが不可能である。そのため、1945年から1985年までの外来語抽出は目視によって行う。1986年に韓国の文教部（現在、教育部）から「外来語表記法」が告示されたことにより表記のゆれが少なくなり現在の表記と同様であり、1995年からは新聞での漢字表記が多く減るため、1995年以降の外来語は韓国語の形態素解析器である「Kiwi ： Korean Intelligent Word Identifier」を用いる。

「Kiwi」は、韓国のセゾンコーパスの品詞タグを用いており、解析スピードと汎用性に注目した解析器である。文語のテキストの解析正確度は94%程度であるため、多少低い数値ではあるが、既存の韓国語形態素解析器とは違い、Windows 上でも起動できる GUI プログラムを提供している点、大規模のテキストの一括解析が可能である点で、「Kiwi」を採用して分析を行った。形態素解析を行った後、正確度をより高めるため、再度目視で確認して外来語を抽出し整理した。

```
          because/SL      ’ /SS    보 다 /MAG        </SS     아 니 요 /IC        .../SF
왜 냐 하 면 /MAG    > ‘/SS  Yes깰 /NNG        but/SL  ’ /SS   설 득 /NNG         을 /JKO
</SS     맞 /VV    다 /EF    .../SF  그 렇 지 만 /MAJ    > “/SS  한 국 /NNP          ,/SP
美/SH    와 /JKB  대 화 /NNG         방 식 /NNG        바 꾸 /VV 어 야 /EC ” /SS   미 국 /NNP
          뉴 욕 대 /NNP       행 정 /NNG        대 학 원 /NNG       에 /JKB  재 학 /NNG
중 /NNB  이 /VCP  ㄴ /ETM  재 미 /NNG        교 포 /NNG        임 /NNP  영 진 /NNP
(/SS     林泳辰/SH        ·/SP    미 국 /NNP        명 /NNG  제 이 슨 /NNP       림 /NNP
·/SP     37/SN    ·/SP    사 진 /NNG        )/SS    씨 /NNG  는 /JX    ‘/SS   칼 럼 /NNG
          대 왕 /NNG        (/SS    大王/SH )’ /SS  으 로 /JKB        통 하 /VV ㄴ 다 /EF
./SF     최 근 /MAG        몇 /MM   달 /NNG  사 이 /NNG        에 /JKB  뉴 욕 타 임 스 /NNP
,/SP     보 스 턴 /NNP       글 로 브 /NNG       등 /NNB  미 국 /NNP        유 력 지 /NNG
의 /JKG  오 피 니 언 /NNG    페 이 지 /NNG       에 /JKB  기 명 /NNG        칼 럼 /NNG
```

図７　韓国語「Kiwi」を用いた形態素解析の結果

図 7 は、解析したテキストファイルの一部である。[韓国語/品詞]の形で解析されており、このテキストファイルを Excel に読み込み外来語を抽出を行う。NNP や NNG など、[N]から始まるタグは名詞を示す品詞タグである。基本的には Excel のフィルター機能を利用して名詞を示す[N]から始まるタグのみを抽出するが、抽出の正確度を高めるために、全体の解析ファイルを目視で再確認した後に外来語を抽出した。

韓国語解析結果 ➡	日本語訳 ➡	Web茶まめ処理後
베스트셀러	ベストセラー	ベスト/セラー
매스미디어	マスメディア	マス/メディア
스크랩북	スクラップブック	スクラップブック
애프터서비스	アフターサービス	アフター/サービス

図８　日本語に合わせるための韓国語の外来語処理手順

その後、単位の処理を行った。図 8 を参照すると、韓国語で「Kiwi」を解析すると「베스트셀러(ベストセラー)」「매스미디어(マスメディア)」「스크랩북(スクラップブック)」「애프터서비스(アフターサービス)」などが長単位で解析され、一語として処理されていることが確認できる。一方、これらの語は日本語の「web 茶まめ」での解析において、「ベスト」「セラー」や「マス」「メディア」といった短単位で解析される。日韓の比較を行うために、韓国語の形態素解析を行った後、外来語を日本語に翻訳し、「web 茶まめ」を使用して再度解析を行い、外来語の処理を実施した。

同音異義語の判別について、韓国語の場合、1985 年までの外来語表記法が現在の表記法とは違うため、外来語の表記が統一されていない。この点については、現在の外来語表記法に沿って、複数の表記

を一つにまとめて処理した。[빌딩・삘딩(ビルディング)] [난센스・넌쎈스(ナンセンス)]などの表記のゆれは同語として判別し、「프로(プロ)」「프로페셔널(プロフェッショナル)」と「아마(アマ)」「아마추어(アマチュア)」などの略語の場合は、別語として処理する。

2.5.2 外来語の調査単位設定

本研究では、「短単位」を基準として外来語を抽出する。語彙研究において、どのような単位を採用するかは重要な問題である。これまで、国立国語研究所では、研究目的に応じて「長い単位」と「短い単位」を設定して語彙調査を続けてきた。靏岡（1980）では、「短い単位（M 単位）」は，基本語彙，専門分野の文章を構成する語彙構造、語構成などの調査を行うための単位であり、和語・外来語については現代雑誌九十種の調査でいう最小単位（現代語で意味を担う最小の言語単位）を用いるということを基本方針とすると述べている。また、『現代日本語書き言葉均衡コーパス形態論情報規定集』（2011）による「短単位」は、言語の形態的側面に着目して規定した言語単位である。

吉田ほか（2006）では、流行歌の歌詞を用いて外来語の量的変遷や品詞、意味分野などについて考察しており、「短い単位」よりも語認定におけるばらつきが少ない点と外来混種語を扱うことが可能である点で「長い単位」を採用して研究を進めた。一方、新聞の社説を用いて外来語の通時的研究を行った橋本(2010)では、「短い単位」を採用しており、新聞コーパスを構築して外来語の基本語化について明らかにした金（2011）でも、「短単位」を採用した形態素解析器の解析辞書である「Unidic」を用いて外来語の研究を行った。

以上、複数の理由から短単位を語彙分析の基本単位として採用することとする。柏野ほか（2000）によれば、短単位による単位区切りは規則性が高く、表記のゆれが少ないため、語彙構造や語構成の調査を効率的に行うことができる。また、短単位を用いることで、既存の研究との直接比較が可能となり、日本語と韓国語の新語や複合語の生成方法、すなわち造語力を把握できる。特に、どのような語が結合して複合語を形成するのか、その語の使用方法がどのように変化していくのかを観察することで、外来語に関する日韓間の差異とその背景を解明することが可能である。

本研究では、日韓の外来語の結合形式を把握し、外来語とその類義語がどのような語彙と組み合わせて使用されるのかを確認して類義語との関係を考察する。さらに、「外来語+する」という形式に注目し、品詞使用において日韓の外来語の言語特徴を把握することを目指しているため、短単位の採用が適している。

2.6　語彙分析方法

この節では、データから抽出した外来語の分析方法について説明する。

2.6.1　頻度集計

①出現率計算

データセットにおける各年度の全体文字数と抽出された外来語の出現数には規模の差異が観察される。その結果、研究の時系列的な傾向の把握及び日本語と韓国語の比較分析を行うためには、単純な数量の比較ではなく、正規化された出現率の算出が不可欠である。これにより、異なるデータセット間での言語使用のパターンを定量的に評価することが可能となる。

各年における全体外来語の比率の推移を把握するためには、1 万字当たりの外来語の出現率(延べ語数/総文字数$\times 10^4$)を求める。4 章では、この 1 万字当たりの出現率を用いて通時的な観点での日韓外来語の推移を分析する。また、個別の語の出現率を把握し各語における変動の動向を確認するためには、100 万字当たりの外来語の出現率(延べ語数/総文字数$\times 10^6$)を求める。

②高頻度語の測定

3 章の第一の分析方法は、通年度数を基に上位 200 語を現代の高頻度語として定義し、各言語における意味分野の確認と分析を行うことである。ここでの通年度数は、年度ごとの各単語の出現回数を集計した総和を指す。分析対象となる外来語の使用頻度の基準としては、各年 5 回以上の使用頻度を示す語を選定する。3 章での現代を構成する三つの年次を対象にし、その合計で 15 回以上使用される語を抽出することにする。抽出した外来語は、Excel を活用し、通年度数が高い順に並べ、上位から 200 語までを高頻度語として定義して分析を進める。

③ランク分けと類型化

第 3 章の第二の分析方法は、現代の日本語と韓国語における外来語の相違を特徴付けるため、通年度数を基準に外来語のランク付けおよび類型化を行うものである。このプロセスでは、語彙を出現頻度順に並べ、[a, b, c, d, e]の五段階のランクに分類し、その基準に従って類型化を施す。具体的には、[a, b]を高頻度、[d, e]を低頻度と定め、日本語と韓国語の外来語を[高－高]、[高－低]、[低－高]、[低－低]、[有り－無し]、[無し－有り]の六つの類型に分けて分析を行う。詳細なランクや類型化については、3.5 節で論じる。

④増加傾向計数

第 5 章では、日韓外来語の増減の動向を把握するため、増加傾向係数を算出して比較する方法をとる。5 章は、日本語は 1950 年から 2000 年まで、韓国語は 1945 年から 1995 年までの 20 世紀後半が分析対象である。そのため、ここでは、各年 5 回以上であり、合計で 30 回以上使用された語彙を取り上げ、分

析を進める。各語における 100 万字当たりの外来語の出現率(延べ語数/総文字数×10^6)を求め、国立国語研究所(1987)の増加傾向係数の算出方法に沿って、各外来語における増加傾向係数を測定し、日韓比較を行う。その後、日本語と韓国語の外来語を[増ー増]、[増ー減]、[減ー増]、[減ー減]、[有りー無し]、[無しー有り]の六つの分類に分け、増減による日韓外来語の相違を把握する。詳細な内容については、5.2 節で論じる。

2.6.2　意味分野

外来語を抽出した後、同音異義語の判別を行う際や 3 章と 5 章においてどのような意味分野の外来語が使用されているのか、日韓の間でどのような差異があるのかを把握するため、国立国語研究所(2004)の『分類語彙表増補改訂版データベース』(ver. 1.0)を用いて、先行研究の手順に沿って、意味分野の分類を行った。『分類語彙表』は語を意味によって分類・整理したシソーラス（類義語集）であり、1964 年に出版された初版から収録語数を増やしたのが『分類語彙表増補改訂版データベース-』である。(国立国語研究所, 2004)。同音異義語の判断は、分類番号の小数部第二位まで同じであれば同語、それ以外は別語として判別した(金、2011)。なお、日韓で使用される外来語の性格を比較するため、外来語の意味分野を大きく[具体物]か[抽象的]かに区別するが、その際、「1.1 抽象的関係」「1.3 人間活動」は[抽象的]、「1.2 人間主体」「1.4 生産物・用具」「1.5 自然物・自然現象」を[具体物]と定義する。『分類語彙表』の見出しにない語の場合は、筆者の判断で分類番号を配置した。

日本語	韓国語	分類語彙番号	処理法
レフェリー	x	1.245	審判［～員］
リモート	리모트	1.1911	遠隔
モチベーション	모티베이션	1.1112	動機付け
モデル	모델	1.11	手本
モデル	모델	1.24	人/モデル
ポイント	포인트	1.17	定点
ポイント	포인트	1.19	点数
ネットワーク	네트워크	1.17	線/網
ネットワーク	네트워크	1.31	通信

図 9　日本語と韓国語の意味分野の確認

例えば、図 9 から「レフェリー」は、『分類語彙表』の見出しにない語であるため、分類番号が不明である。そのため、「レフェリー」の辞書を意味を確認して「審判員」の分類番号である「1.245」を「レフェリー」の分類番号として分類した。「リモート」や「モチベーション」も同じ方法として各自「遠隔」「動機付け」で処理した。

「モデル」「ポイント」「ネットワーク」は、新聞の用例から各意味を確認して分類番号を配置した。例として、「法網」「連絡網」「組織網」といった意味として使用される「ネットワーク」は「1.17」に、通信やインターネットなどの「ネットワーク」は「1.31」で処理した。

2.6.3　文脈分析

外来語の意味分野を確認してから、どのような文脈で使用されるのかを確認するために、作成したデータを用いて用例を確認する。現代における用例は、作成した日本新聞データ『毎日新聞』や韓国新聞データ『東亜日報』から検索して、抽出する。

20 世紀後半の用例の場合は、韓国語は作成したデータを用いるが、日本語の場合は,『昭和平成書き言葉コーパス』(以下、SHC)を利用する。本研究で、20 世紀後半の分析をする際には、先行研究である金(2011)のデータを利用して韓国語と比較するが、量的データや外来語リストのみを示しているため、用例の確認ができない。そのため、本研究の 20 世紀後半に該当する時期を対象としている国立国語研究所の『SHC』を利用することとした。以下に国立国語研究所から提示している概要を要約して示す。

> 『昭和・平成書き言葉コーパス』（SHC）は、昭和・平成期の日本語を通時的に調査するためのコーパスである。このコーパスは、上代から近代の日本語変化を研究する『日本語歴史コーパス』と、2001-2005 年を中心とした『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の間の期間をカバーし、その後のデータも部分的に取り扱っている。…(中略)雑誌、書籍、新聞の 3 つのレジスターを取り扱い、1933 年から 2013 年までの 11 か年のデータを収録している。

上述のように、SHC は、書籍、新聞、雑誌の三つのレジスターが収録されている。 本研究のデータとして新聞を使用することから、公的な媒体である新聞に加えて雑誌からの用例も抽出して利用することとした。この理由は、分析対象である外来語の新聞での用例数が少ない場合があり、その結果として使用実態を十分に確認することが困難であるためである。したがって、分析可能な使用例を得るために雑誌からの用例も含め分析を進める。SHC で使用されている雑誌は「文藝春秋」「中央公論」であり、これらは日本における代表的な総合雑誌である。総合雑誌は報道のほかにも、エッセイ、コラム、インタビュー、特集記事など多様なジャンルを含み、より幅広い読者に対応するために、解説的でありながらも読みやすさやエンターテインメント性を重視した文体で書かれているものであるが、外来語が使用された用例のみを抽出して当時の意味用法を把握することを目的としているため、利用することとした。なお、用例を示す際に、SHC からのものには【サンプル ID】を、毎日新聞と東亜日報からのものには【紙面_年月日】を示すこととされている。

本研究では「短単位」を基本単位とし、「分類語彙表」を用いた意味分野の分類に基づいて分析を進めている。高頻度語彙の分析、類型化、増加傾向係数の算出においては、「分類語彙表」に属する体の類、分類番号１で始まる名詞に焦点を当てる。

用例分析では、外来語を含む用例の全文から、短単位の名詞と他の語彙がどのように結びつき複合語を形成するのかを把握するため、外来語の前後に位置する語を取り上げ、外来語の特徴を確認する。また、「する」を伴う動詞の使用が日韓間でどのような特徴を持つかの確認にあたり、日本語では「外来語+する」、韓国語では「外来語+HADA（하다）」のように、「する(HADA)」が直後に位置する用例のみを動詞とみなし、両言語における外来語の品詞使用の特徴を考察する。

3 章　現代の日韓外来語の特徴

3.1　本章の目的

本章では、現代日本語と韓国語における外来語の言語特徴に焦点を当てる。使用率やその意味分野を中心に分析し、両言語でどのような単語が用いられているのか、また、それらにどのような違いがあるのかを詳細に分析する。こうしたアプローチを通じて、現代日本語と韓国語の外来語使用の相違点を把握し、その特徴を明らかにすることを本章の目的とする。

本論文の目的は、通時的な観点から日本語と韓国語の外来語を研究することである。本章では、現代の日韓外来語の特徴に焦点を当てるが、その理由は以下の通りである。まず、現代の言語特徴を詳細に知ることで、背景や変化のパターンの特定が容易となり、歴史的な変遷の追跡の基盤を築くことが可能となる。さらに、現代の外来語の言語特徴の分析は、歴史的背景や変遷を考慮した外来語の全体的な研究にとって、必要不可欠なステップである。従って、本章では現代の日韓外来語の考察を行い、日韓の相違や特徴を明らかにする。

3.2　外来語の出現率の比較

2 章でも触れたように、本研究の分析対象は新聞である。新聞は現実の出来事や社会的問題を時系列で反映し、現代の言語使用の実態を網羅する。毎日の発行によって、語彙の変遷や社会的関心や話題を把握することが容易である。また、改まった文体を用いることで、標準的な語彙の研究が可能であり、多岐にわたるトピックを扱うことにより、多様な語彙の調査も行える。この特性を活かし、日韓外来語の分析データを新聞から作成した。

本章の分析対象であるデータは、日本語は、『毎日新聞』の 2000 年、2010 年、2020 年の 3 カ年であり、韓国語は、『東亜日報』の 1995 年、2005 年、2015 年の 3 カ年である。その年次別と３カ年合計の文字数や外来語の延べ語数・異なり語数、出現率を示すと以下のようである。出現率は「1 万字当たりの外来語の出現率（延べ語数/全体文字数$\times 10^4$）」を求めて比較することにする。

表７　日本新聞データによる各年の文字数と外来語の延べ語数・異なり語数

年代	2000 年	2010 年	2020 年	合計
新聞の全体文字数	3, 829, 929	2, 941, 407	2, 463, 459	9, 234, 759
外来語の延べ語数	62, 521	48, 080	45, 011	155, 612
外来語の異なり語数	4, 727	4, 024	3, 550	6, 612
1 万字あたりの出現率	163. 24	163. 46	182. 71	168. 51

表８　韓国新聞データによる各年の文字数と外来語の延べ語数・異なり語数

年代	1995 年	2005 年	2015 年	合計
新聞の全体文字数	2,689,943	2,285,273	2,627,260	7,602,476
外来語の延べ語数	28,521	26,400	34,578	95,672
外来語の異なり語数	1,352	1,117	1,601	2,451
１万字あたりの出現率	106.03	115.52	131.61	125.84

現代の日韓の外来語の量的差異を確認する。まず、３カ年合計の出現率を示すと以下のようである。

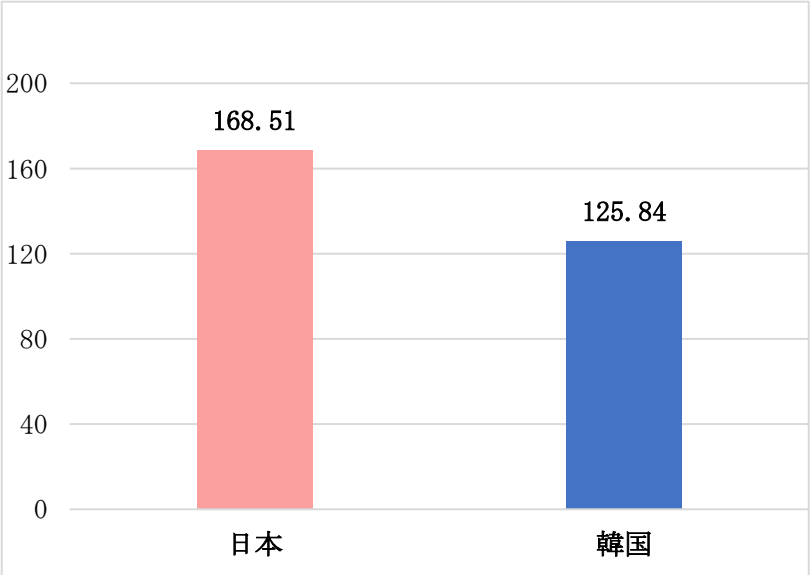


図 10　現代の日韓外来語の出現率(三カ年合計,1 万字当たりの出現率)

既存の研究では、現代語彙表を用いた日韓外来語の比率において日本語が約 2.3 倍多いとの報告がある(Chang,2016)。Chang(2016)の分析対象は、日本語は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』のコアデータで、最大 30 年間（1976～2005）に刊行された資料からなるもので、韓国語は、『현대 국어 사용 빈도 조사(現代国語使用頻度調査)』の語彙表で、1990 年代に刊行された資料からなるものである。この語彙表らの語種構成の中で外来語の比率をみると、日本語は 15.5，韓国語は 6.7 で、約 2.3 倍程度の差がある。

一方、図 10 に示される現代の新聞を基にした分析によれば、日本語の 1 万字当たりの外来語の出現率は 168.51、韓国語は 125.84 で、日本語は韓国語の約 1.3 倍となっている。新聞という媒体は、社会の動向、文化、流行をリアルタイムで反映する特性を持つため、現代の外来語の言語特徴を詳細に把握す

ることができる。この点から考えると、2000 年以降の韓国社会では、以前よりも外来語の使用が増えていることが示唆される。

3.3　高頻度外来語の意味分野の調査

前節では、現代の日韓外来語の全体の量的特徴を把握した。本節では、日本語と韓国語の高頻度の外来語を確認し、意味分野の観点からその特徴を探る。この分析により、両言語における主要な外来語と、それらがどの意味分野に集中しているのかを特定できる。また、日韓間の外来語の使用における相違点も明確にすることができる。

3.1 節の全体の変化様相を確認する際には、出現する全ての語彙を対象としたが、個別の外来語については、ある程度使用されている外来語を比較分析するために通年度数（各年出現度数合計）15 以上(平均して各年 5 回以上)の語彙を対象とする。通年度数 15 以上を対象とする理由は、一時的なトレンドや偶発的な出現による語彙を排除し、日常的、または一貫して使用されている外来語の実態を真摯に把握するためである。

高頻度外来語は、通年度数順に並べ、高い順で上位 200 語を指す。日常的に頻繁に使用される外来語の特徴や傾向を効率的かつ網羅的に理解するため、上位 200 語の意味分野を調査した。ここでは、上位 200 語の中『分類語彙表』の体の類(分類番号が 1 で始まる)である名詞のみを集計した。

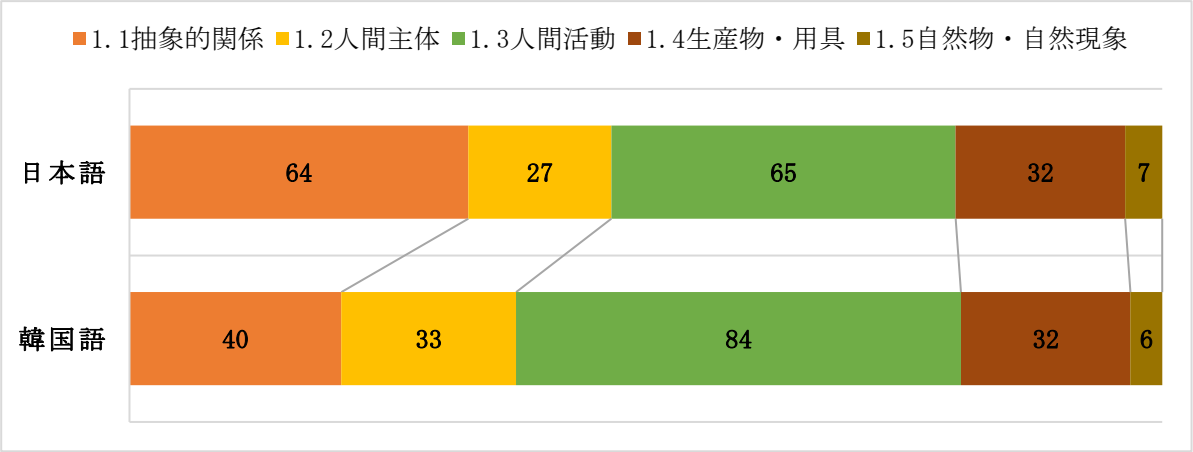


図 11　現代日韓外来語の上位 200 語の意味分野

まず、意味分野の中で、抽象的な意味分類とされる「1.1 抽象的関係」や「1.3 人間活動-精神及び行為」に注目していきたい。抽象的な外来語は、具体的なアイテムや事物を示す外来語と異なる特性を有しており、概念や考え方を表現する。具体的な外来語は、物や事象を示す表層的な要素として直接的な意味を持つのに対して、抽象的な外来語は言語の深層的な特徴を示すものである。言語や文化によって

言葉の解釈や受け取り方が表面的な意味以上に異なることから、日本語と韓国語の間の相違を明確に捉える際に有効である点で、抽象的な外来語に焦点を当てる。

既存の研究によれば、現代の日本語においては抽象的な外来語の使用が増加しているとされる(金 2011, 石 2019・2022)。一方、韓国語においては、抽象的な外来語についてはまだ報告されていないが、図 11 みると、現代の韓国語においても「1.1 抽象的関係」や「1.3 人間活動」の抽象的な意味分野の使用が多いことが確認できた。特に、日本語の場合は、「1.1抽象的関係」と「1.3人間活動」がほぼ同じ比率として使用されている一方、韓国語の場合は、「1.1抽象的関係」より「1.3人間活動」の意味分野が 2 倍程度多く使用されていることが分かる。

「1.1 抽象的関係」と「1.3 人間活動-精神及び行為」は、国立国語研究所(2004)の『分類語彙表』によって定義されている意味分野である。「1.1 抽象的関係」は、人間や自然のあり方の枠組みであり、『事柄』『存在』『類』『様相』『力』『作用』『時間』『空間』『形』『量』の 10 の中項目に分類されている。また、「1.3 人間活動-精神及び行為」は、人間の日常的な生活や精神的な側面、行動や活動に関連する概念や事項を包括しており、『心』『言語』『芸術』『生活』『行為』『交わり』『待遇』『経済』『事業』の 9 の中項目に分類されている。この内容からみると、「1.1 抽象的関係」は、人間や自然に関する基本的な関係や概念を扱うため、「1.3 人間活動」の意味分野に比して、より広範で基盤的な意味分野で、一般的あるいは普遍的な意味分野であると言える。

図 11 から、現代の日本語と韓国語の両方で抽象的な意味分野の外来語の使用が最も多いことが確認できる。しかし、日本語では「1.1 抽象的関係」のような、より広範で基盤的な意味分野に関連する語が多く見られるのに対して、韓国語では人間の日常的な生活や精神的な側面を扱う「1.3 人間活動-精神及び行為」の意味分野に関連する語が多い。このことから、日本語と韓国語の抽象的な外来語の使用には何らかの相違が存在すると推測できる。

3.4 抽象的な意味分野の高頻度外来語

3.3 では、日本語と韓国語における外来語の言語特徴を明らかにするため、上位 200 語のリストを作成した。このリストは『分類語彙表』の各部門の中項目を基準にし、通年度数が高い順に並べてある。本節では、中項目は小数点第 2 位まで記載し、見出しの語句も併記することで、各外来語がどの意味分類に該当するのかを明示する。

ここでは、抽象的な意味分野である「1.1抽象的関係」や「1.3 人間活動-精神及び行為」のみを示し、具体物まで含む上位 200 語の語彙リストは、附録に示す([語彙表 1] pp. 105-111)。

表 9　現代日本語の高頻度外来語-抽象的な意味分野（名詞）

部門	中項目		日本語
1.1	1.10	事柄	ケース, データ, ファイル
	1.11	類	トップ, レベル, モデル, ランキング, タイプ, スタイル, パー
	1.12	存在	デビュー, スペース
	1.13	様相	インターネット, ネット, システム, リスク, ベスト, トラブル, バランス
	1.14	力	パワー
	1.15	作用	スタート, オープン, フリー, アップ, タイム, コース, ヒット, オフ, リード, プラス, ジャンプ, パス, マイナス
	1.16	時間	シーズン, チャンス
	1.17	空間	センター, ポイント, ライン, サイト, ページ, ホーム, ゴール, ボックス, ネットワーク
	1.18	形	ミニ
	1.19	量	メートル, キロ, グループ, ドル, センチ, シリーズ, セット, デジタル, トン, ゼロ, ユーロ, スピード, ポイント, グラム, ワン, ペース, ミリ, ラウンド
1.3	1.30	心	テーマ, イメージ, イスラム, プロジェクト, ルール, トレーニング, チェック, ストレス, プラン
	1.31	言語	メディア, ニュース, メール, サミット, マーク, コメント, メッセージ, タイトル, ブランド, プログラム, キャンペーン, リスト, アンケート
	1.32	芸術	ドラマ, デザイン, アート, ジャズ
	1.33	生活	サッカー, スポーツ, ゴルフ, プレー, ゲーム, ボール, ツアー, レース, ラグビー, マラソン, スキー, エース, テニス, ストレート, スケート, バスケットボール, シングルス, ボクシング
	1.34	行為	ミス
	1.35	交わり	カップ, イベント, テロ, デモ, インタビュー, コンサート, シード, シンポジウム, コンクール, トーナメント
	1.36	待遇	ケア, アピール, リコール
	1.37	経済	コスト, プレゼント
	1.38	事業	サービス, ソフト, ビジネス, ライブ, アプリ

表 10　現代韓国語の高頻度外来語-抽象的な意味分野（名詞）

部門	中項目		韓国語（日本語訳）
1.1	1.10	事柄	데이터(データ)
	1.11	類	모델(モデル), 스타일(スタイル), 랭킹(ランキング), 장르(ジャンル), 톱(トップ), 인프라(インフラ)
	1.12	存在	데뷔(デビュー)

	1.13	様相	인터넷(インターネット), 시스템(システム), 베스트(ベスト), 콘텐츠(コンテンツ), 캐릭터(キャラクター)
	1.15	作用	리바운드(リバウンド), 오픈(オープン), 코스(コース), 오프(オフ), 히트(ヒット)
	1.16	時間	시즌(シーズン), 크리스마스(クリスマス), 골든(ゴールデン)
	1.17	空間	골(ゴール), 라인(ライン), 홈(ホーム), 사이트(サイト), 코너(コーナー), 웹(ウェブ), 포털(ポータル)
	1.18	形	미니(ミニ)
	1.19	量	달러(ドル), 포인트(ポイント), 채널(チャンネル), 세트(セット), 디지털(デジタル), 시리즈(シリーズ), 라운드(ラウンド), 쿼터(クォーター), 원(ワン), 피크(ピーク)
1.3	1.30	心	이미지(イメージ), 이슬람(イスラム), 로(ロー), 프로젝트(プロジェクト), 이슈(イシュー), 바이오(バイオ), 아이디어(アイデア), 세미나(セミナー), 스트레스(ストレス), 사이버(サイバー), 테마(テーマ), 가톨릭(カトリック), 비전(ビジョン), 옵션(オプション), 디스플레이(ディスプレー)
	1.31	言語	뉴스(ニュース), 프로그램(プログラム), 브랜드(ブランド), 페이지(ページ), 미디어(メディア), 메시지(メッセージ), 코드(コード), 칼럼(コラム), 캠페인(キャンペーン), 네트워크(ネットワーク), 메일(メール), 텔레콤(テレコム), 멀티미디어(マルチメディア), 모바일(モバイル), 타이틀(タイトル), 개그(ギャグ), 콜(コール), 셀러(セラー), 브리핑(ブリーフィング), 그래픽(グラフィック), 워드(ワード)
	1.32	芸術	드라마(ドラマ), 디자인(デザイン), 뮤지컬(ミュージカル), 클래식(クラシック), 오페라(オペラ), 팝(ポップ), 다큐멘터리(ドキュメンタリー), 아트(アート), 시나리오(シナリオ), 코미디(コメディー), 애니메이션(アニメーション)
	1.33	生活	스포츠(スポーツ), 골프(ゴルフ), 스키(スキー), 패션(ファッション), 게임(ゲーム), 슛(シュート), 볼(ボール), 캠프(キャンプ), 투어(ツアー), 플레이(プレー), 발레(バレエ), 마라톤(マラソン), 샷(ショット), 하키(ホッケー), 테니스(テニス), 댄스(ダンス), 아르바이트(アルバイト), 어시스트(アシスト)
	1.34	行為	리더십(リーダーシップ)
	1.35	交わり	컵(カップ), 테러(テロ), 인터뷰(インタビュー), 포럼(フォーラム), 콘서트(コンサート), 이벤트(イベント), 쿠데타(クーデター), 컨설팅(コンサルティング)
	1.37	経済	펀드(ファンド), 쇼핑(ショッピング), 페이(ペイ)
	1.38	事業	서비스(サービス), 마케팅(マーケティング), 쇼(ショー), 소프트웨어(ソフトウェア), 비즈니스(ビジネス), 테크(テック)

表9と表10から、3.3節で特徴が見られた[抽象的な意味分野]である「1.1抽象的な関係」と「1.3人間活動-精神及び行為」に属する外来語を考察する。

まず、「1.1 抽象的関係」の意味分野に属する語について検討する。日韓とも多くの語彙が共通として高頻度で使用されていることが分かる。しかし、韓国語と比較して、日本語で高頻度として使用され

ている語の中には、「ケース」「スペース」「カット」「リストラ」「リスク」「トラブル」「ムード」「スタート」「オープン」「リード」「チャンス」などの語が目立つ。これらの語は、「ケース」「スペース」「リストラ」「リスク」「トラブル」「ムード」「チャンス」のように日常的な状況で用いられる語や「カット」「スタート」「リード」など具体的なアクションを示すものが含まれている。

韓国語の場合は、日本語と比較して、「콘텐츠(コンテンツ)」「리바운드(リバウンド)」「웹(ウェブ)」「포털(ポータル)」のように、IT やスポーツといった特定の分野や状況で具体性を持って使われる語が多く含まれている。ここでの「具体性」とは、外来語が具体的なイメージや状況を想起させる使用法を持っていることを指す。日韓とも抽象的な意味分野の語が多く使用されているものの、日本語では、より幅広い分野で使われる傾向がある一方で、韓国語では外来語がより限定的な文脈で使われ、それにより具体的なイメージが強調されていると考えらる。

同じく、「1.3 人間活動-精神及び行為」の意味分野において、韓国語と比較して、日本語で高頻度として使用されている語には、「チェック」「ミス(mistake)」「サポート」「サミット」「マーク」「コメント」「アピール」「プレゼント」などがある。これらは人間の行為に関連する語であり、例えば「チェックする」「コメントする」「アピールする」といった動詞性を持つ用法で用いられることが多い。「サミット」や「プレゼント」の場合は、韓国語において外来語として使用しない可能性が高い語である。

韓国語の場合は、「디스플레이(ディスプレー)」「개그(ギャグ)」「브리핑(ブリーフィング)」「컨설팅(コンサルティング)」「펀드(ファンド)」「 테크(テック)」など、「1.1」と同様、特定の分野で使われ、それにより具体的なイメージが強調される語が目立つという特徴が確認できる。

一方、韓国語の「1.1 抽象的関係」のカテゴリに出現する語の中、日本語で確認できない語の一つとして「이슈（イシュー）」を挙げたい。「イシュー」は、日本語の方が「1.1」の意味分野の外来語の比率が高いため、韓国語より使用されると推測できる語であるが、韓国語の方がより出現率が高く、珍しく日本語で出現しない語である。韓国語の例文をみると、以下のようである。日本語訳は筆者が行う。

(1) 시공돼야 할 운명에 놓이면서 부실원인을 둘러싼 책임소재가 이슈[issue]로 떠올랐다（建設される運命に置かれ、不良原因をめぐる責任の所在が問題になっている）【社会_951212】

(2) 총기 난사 사건 등 큰 사회적 이슈[issue]가 생길 때마다 논쟁의 중심에 섰다（銃乱射事件など大きな社会的問題が起こるたびに議論の中心に立つ）【社会_051224】

(3) 누가 국가 정상들과 그런 이슈[issue]로 싸우겠느냐고 힘주어 말했다（誰が国家首脳とそのような問題で争うだろうか」と力強く語った）【政治_151224】

韓国語の用例に対し、日本語で「イシュー」が使用される用例は 1 例のみである。「ある程度明確なポリティカルイシュー（政治課題）」の例が挙げられるが、「政治課題」という訳語が必要とされている。このことから、日本語における「イシュー」が独立した意味を持つ語として確立していない可能性が推察される。新聞用例での訳語である[課題]と韓国語の用例の訳から[問題]、また韓国語の例文で[社会的な出来事]を意味する例が多く見られることから前方共起語として[社会的]を取り上げ、日本語の新聞用例を確認して以下に示す。

(4) 一国の路線に強い影響力を持つ政治家が、これだけ社会的な問題になった自らの政治とカネについて…【内政_101105】

(5) また汚職防止や環境対策などの課題に取り組むことも強調した【国際_200205】

(6) ベトナム戦争や領土問題など社会的題材も扱うが、あくまでそれは「背景」という【総合_200225】

「イシュー」は、韓国語では特に[社会的・政治的な話題]の意味として使用されるが、用例(4)から(6)のように、日本語では「社会的な問題」「課題」「社会的題材」などの語を使用する傾向があり、日韓間で違いが見られる。確かに、韓国語でも「문제（問題）」や「과제（課題）」といった類義語が多く使用されるが、「イシュー」の使用は 1995 年から 2015 年にかけて、8.55 から 24.50、35.40(100 万字当たりの出現率)へと、その出現率が増加していく傾向が確認できる。この語だけでは一般的な傾向を断言することは難しいが、上述の内容を含め考えて見ると、韓国語では特定の分野で使用される語が多く、日本語はより幅広い場面をカバーできる日常的な語を多く使用する傾向があると考えられる。

3.5 ランクの違いによる類型化

本節では、現代の日韓外来語の相違を把握し、その特徴を明らかにするために、現代の新聞データを利用して外来語の頻度比較を行う。手順としては、通年度数順に[a, b, c, d, e]のランクを付け、ランクによる類型化を行う。類型は「日本語–高頻度・韓国語–高頻度」「日本語–高頻度・韓国語–低頻度」「日本語–低頻度・韓国語–高頻度」「日本語–低頻度・韓国語–低頻度」「日本語に出現なし」「韓国語に出現なし」の六っつの類型に設定して分析を進めることとする。「出現なし」の場合は、①対象言語に出現しない(通年度数 0)、②通年度数が 15 回未満であるため対象外としたものである。

まず、ランク付けを行う。全体の 1439 語をランク付けするため、全体を 5 段階に等分した。1439 語/5 段階に計算し、各ランクにおおよそ 287 語が含まれるように分けた。このようにランクを付ける際には、語彙を出現度数の高い順に並べ、上位の語から度数を累積し、その累積使用率によって 5 段階に分ける方法もあるが（田中、2012）、本稿では、単純に全体を 5 等分するする方法を採用した。

次に、通年度数を基準に具体的なランク分けを調整した。その結果、対象となる外来語は、日本語では1439語、韓国語では797語で、各ランクに相当する通年度数と頻度区間、語数を示すと以下のようである。

表11　通年度数15回以上の外来語のランクと頻度区間

ランク	日・ 頻度区間（語数）	韓・頻度区間（語数）
a	3037～100（293語）	3532～111（159語）
b	99～50（297語）	110～51（159語）
c	49～29（324語）	50～31（163語）
d	28～20（273語）	30～20（172語）
e	19～15（252語）	19～15（144語）

上記のようにランク分けを行った上で、エクセルのピボットテーブルの機能を用いてクロス集計を行い、通年度数 15 回以上の日本語を基準とした韓国語の外来語のランクの語数と比率を示したのと韓国語を基準とした日本語の外来語のランクの語数と比率を示した、以下の表12や表13である。

表12　日本語を基準とした韓国語の外来語のランクの比率

日本＼韓国		K-a	K-b	K-c	K-d	K-e	K-なし	合計
J-a	%	7.44%	3.06%	2.22%	1.39%	1.04%	5.21%	20.36%
	語数	107	44	32	19	15	76	293
J-b	%	1.74%	2.92%	2.71%	1.67%	0.69%	10.91%	20.64%
	語数	25	42	39	24	10	157	297
J-c	%	0.76%	1.95%	2.02%	2.08%	1.53%	14.18%	22.52%
	語数	11	28	29	30	22	204	324
J-d	%	0.28%	1.04%	0.63%	1.18%	1.04%	14.80%	18.97%
	語数	4	15	9	17	15	213	273
J-e	%	0.21%	0.69%	0.76%	0.83%	1.25%	13.76%	17.51%
	語数	3	10	11	12	18	198	252
合計	%	10.42%	9.66%	8.34%	7.16%	5.56%	58.86%	100%
	語数	150	139	120	102	80	848	1439

表 13　韓国語を基準とした日本語の外来語のランクの比率

韓国＼日本		J-a	J-b	J-c	J-d	J-e	J-なし	合計
K-a	%	14.05%	3.14%	1.25%	0.25%	0.38%	0.88%	19.95%
	語数	112	25	10	2	3	7	159
K-b	%	5.52%	5.14%	3.64%	2.01%	1.00%	2.63%	19.95%
	語数	44	41	29	16	8	21	159
K-c	%	4.27%	4.89%	3.51%	1.13%	1.38%	5.27%	20.45%
	語数	34	39	28	9	11	42	163
K-d	%	2.38%	3.14%	3.39%	2.13%	1.51%	9.03%	21.58%
	語数	19	25	27	17	12	72	172
K-e	%	1.63%	1.51%	2.63%	1.76%	2.38%	8.16%	18.07%
	語数	13	12	21	14	19	65	144
合計	%	27.85%	17.82%	14.43%	7.28%	6.65%	25.97%	100%
	語数	222	142	115	58	53	207	797

2.6 節でも説明したが、[a, b]を高頻度、[d, e]を低頻度と定め、「日本語-高頻度(ab)・韓国語-高頻度(ab)」「日本語-高頻度(ab)・韓国語-低頻度(de)」「日本語-低頻度(de)・韓国語-高頻度(ab)」「日本語-低頻度(de)・韓国語-低頻度(de)」「日本に出現なし」「韓国出現なし」の六つつに類型化を行う。この内容については、次節で説明する。

3.6　類型別に見る日韓外来語の特徴

本節では、3.5 節で識別した類型に基づいて、現代日韓外来語の特徴を検討する。本報告では、各類型における全体的な実態についての報告したが、特に日韓間の差異が顕著に現れる以下の三類型に焦点を当てることとする。

① ［日本語-高頻度(ab)・韓国語-低頻度(de)］

② ［日本語-低頻度(de)・韓国語-高頻度(ab)］

③ ［一方にのみ出現］

これらの類型は、日韓両言語間の外来語使用頻度における相違点を鮮明に示している。その他の類型の語彙表は附録に示す(［語彙表 2］ pp. 105-111)。

3.6.1 「日本語-高頻度・韓国語-低頻度」（以下、JH-KL）類型

ここでは、日本語を基準として、日本語では高頻度でありながら韓国語では低頻度である 68 語の特徴を見ていく。以下は、『分類語彙表』の各部門の中項目を基準にし、通年度数が高い順に並べてある。中項目は小数点第 2 位まで記載し、見出しの語句も併記することで、各外来語がどの意味分類に該当するのかを明示した。3.4 章と同様、ここでは、抽象的な意味分野である「1.1 抽象的関係」や「1.3 人間活動-精神及び行為」に注目して分析を進める。

表 14　日本語-高頻度・韓国語-低頻度の語彙リスト

部門	中項目		JH-KL 類型－日本語(韓国語訳)
1.1	1.10	事柄	カバー(커버)
	1.12	存在	カット(커트)
	1.15	作用	スタート(스타트), アップ(업), リード(리드), プラス(플러스), ダウン(다운), タッチ(터치), パック(팩)
	1.16	時間	ライフ(라이프), シート(시트), スケジュール(일정)
	1.17	空間	ネットワーク(네트워크), スペース(스페이스), サイド(사이드), ページ(페이지), ゾーン(존)
	1.18	形	ピース(피스)
	1.19	量	マイクロ(마이크로), コンビ(콤비), クラスター(클러스터), ロング(롱), コレクション(컬렉션), レコード(레코드)
1.2	1.21	家族	ファミリー(패밀리)
	1.23	人物	ベテラン(베테랑), アマ(아마)
	1.24	成員	プロデューサー(프로듀서), アーティスト(아티스트), ヘッド(헤드), デスク(데스크), スポンサー(스폰서)
	1.26	社会	キャンプ(캠프)
	1.27	機関	パラリンピック(패럴림픽)
1.3	1.30	心	プラン(플랜), エコ(에코), ドラフト(드래프트), アレルギー(알레르기)
	1.31	言語	コメント(코멘트), ポルノ(포르노)
	1.32	芸術	シネマ(시네마), オリジナル(오리지널), パフォーマンス(퍼포먼스)
	1.33	生活	フィギュア(피겨)
	1.34	行為	ミス(미스), コム(컴)
	1.35	交わり	シード(시드), トーナメント(토너먼트), コンテスト(콘테스트)
	1.36	待遇	グランプリ(그랑프리)
	1.38	事業	ソフト(소프트), ライブ(라이브)
	1.41	資材	ボタン(버튼)

	1.43	食料	アイス(아이스), ソース(소스)
	1.44	住居	シンク(싱크)
	1.45	道具	ペン(펜),バッグ(백)
	1.46	機械	ナビ(내비게이션),モーター(모터)
	1.47	土地利用	ダム(댐),ロード(로드)
1.5	1.50	自然	ライト(라이트)
	1.56	身体	ホルモン(호르몬)
	1.57	生命	インフルエンザ(인플루엔자)

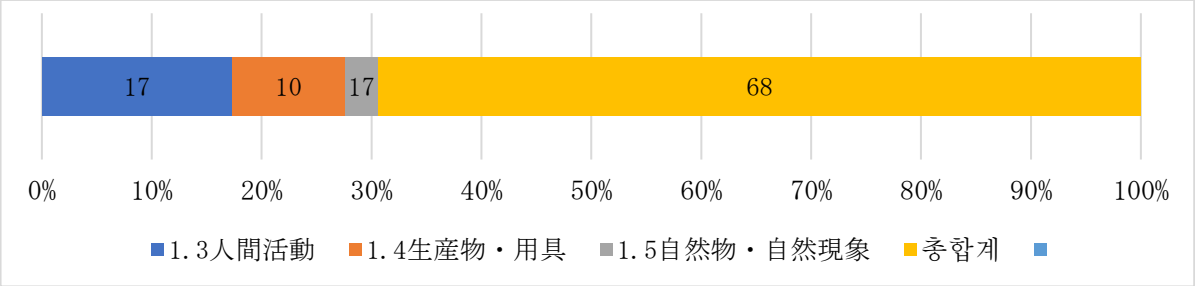


図 12　「JH-KL」の意味分野別語数(名詞)

「JH-KL」類型の意味分野を調査すると、一般に抽象的な意味分野の使用が多いことが確認できる。特に、「1.1 抽象的関係」の意味分野の使用が多い。この類型において、「ドラフト」「グランプリ」「トーナメント」「フィギュア」「コレクション」「レコード」「アーティスト」といった文化、メディア、スポーツに関連する語は、韓国新聞においてその話題の言及が少なかったため、低頻度として計測されたと考えられる。この中で、特徴として 3.6 節の高頻度語彙でも確認した「スタート」「スペース」「リード」「カット」「コメント」「ミス」や「カバー」「タッチ」などの語が目立つ。

まず、「カット」の場合、日本語の用例を見ると、「市民サービスカットや新たな市債発行が含まれていたため【解説_100825】」「企業による解雇や超過勤務カットを真っ先に受けたからだ【内政_200305】」「日本は賃金を大幅カットしてデフレ経済が深刻化したと指摘【経済_200305】」「東日本大震災からの復興財源確保などで２割カットした例を参考にした【内政_200425】」など、名詞用法の「カット」と「カット+する」の動詞用法が両方確認できる。一方、韓国語においては、「커트라인(カットライン)」という特定の複合語の形でのみ出現し、日本語のような多様な活用の形は見られない。

「スタート」は、日本語の用例から「多難を思わせるスタートとなった【国際_000105】」「1996 年度にスタートさせた【社会_000105】」「情報ワイド番組をスタートさせる【総合_000125】」「ハイライト公演でスタートした【芸能_000205】」などの使用が確認できる。しかし、韓国語の場合は、「스타트(スタート)+hada(する)」の用例は、1 例だけで、そのほかは「스타트기록(スタート記録)」

「스타트 집중훈련(スタート集中訓練)」「스타트업(スタート業)」の複合語の形でのみ出現している。「スタート」に関しては、6章で詳細に扱うこととする。

また、「リード」の場合は、上記2語の動詞用法という特徴のほかに、類義語との関係を考えられる語である。日本語では「我が国のコンベンション産業をリードしていきます【特集_000225】」「日本をリードすべき人たちなのである【内政_200105】」のように「リードする」の用例が多く確認できる。一方、韓国語では「세계 로봇산업을 이끌었지만（世界のロボット産業をリードしてきたが）【IT/化学_151211】」「한국 경제를 이끌어 가는 수출기업들이（韓国経済をリードする輸出企業が）【総合_051213】」のように、固有語の「이끌다(i-kkŭl-da)」を使用する傾向があるため、外来語である「リード」は極めて少ない頻度で出現するなどの特徴がある。

「スペース」も「リード」のように類義語との関係が考えられる語である。日本語での「スペース」は、「コワーキングスペースを開設した。現実のスペースはコロナの感染防止のために３月、働く場所がない人だけに利用を制限【経済_200605】」「普通車なら苦労させられる駐車スペースでも、頭から一発で止められる【総合_000225】」などでよく使用される語である。しかし、韓国語では、日本語における「スペース」の使用例と同様の、場所や空間を広く示す一般的な用法は確認できない。韓国語では「사이버스페이스(サイバースペース)」や「오픈스페이스(オープンスペース)」といった特定の分野に限定されることが多く、日本語のように多様な状況での空間や場所の意味で使われることは稀である。この語については、6章で詳細に分析する。

このように、JH-KL 類型では、抽象的な意味分野である「1.1」と「1.3」の出現が多いものの、「1.1 抽象的関係」の意味分野の使用が特に多い割合を占めていることが分かる。また、日本語の場合は、複数の品詞用法を使用して多様な分野で活用している点、韓国語の場合は、外来語の使用よりは類義語を使用する可能性がある点といった相違が確認できる。

3.6.2 「日本語-低頻度・韓国語-高頻度」（以下、JL-KH）類型

表15 日本語-低頻度・韓国語-高頻度の語彙リスト

部門	中項目		JL-KH 類型－日本語(韓国語訳)
1.1	1.10	事柄	アシスト(어시스트), サンプル(샘플)
	1.15	作用	ダイエット(다이어트)
	1.17	空間	ポータル(포털)
1.2	1.24	成員	ブローカー(브로커)
	1.26	社会	マート(마트), クラブ(클럽), リンク(링크), モール(몰), キャピタル(캐피탈)
1.3	1.30	心	ディスプレー(디스플레이)

	1.31	言語	ネットワーク(네트워크),モバイル(모바일),グラフィック(그래픽),ギャグ(개그)
	1.32	芸術	コメディー(코미디)
	1.33	生活	ドライブ(드라이브),エンターテインメント(엔터테인먼트),ミサ(미사)
	1.35	交わり	ガード(가드)
	1.38	事業	テック(테크),プラント(플랜트)
1.4	1.41	資材	ベルト(벨트),ツリー(트리),インテリア(인테리어)
	1.45	道具	ディスク(디스크)
	1.46	機械	チップ(칩),ロム(롬),メモリー(메모리),
	1.47	土地利用	トラック(트랙),ウェイ(웨이)

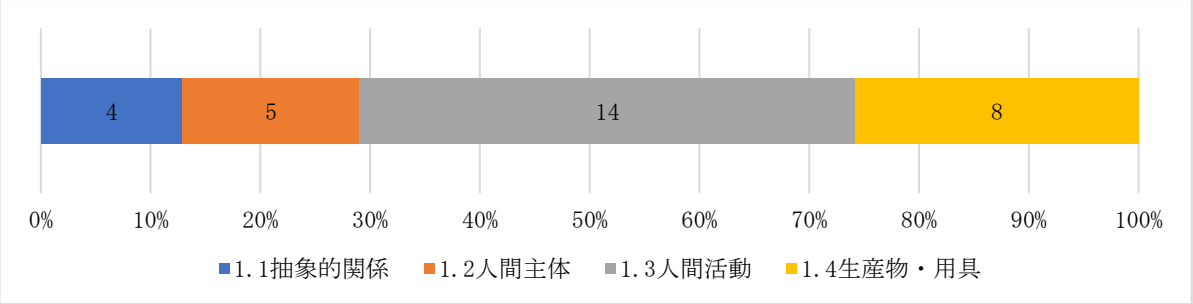


図 13　「JL-KH」の意味分野別語数(名詞)

「JL-KH」類型の意味分野を調査すると、前節で確認した JH-KL 類型とは多少異なることが分かる。まず、本節の「JL-KH」類型は抽象的な意味分野の中「1.3」が最も多く出現していることが確認できる。その次に「1.4」「1.2」の具体物の意味分野が多く、「1.1」の意味分野が最も少ない。

この類型には、特定の分野で使用される語が多く含まれている。3.4 節の高頻度外来語の分析でも、韓国語においては特定のテーマで使用される語が多く見られた。これは、一般的に抽象的な意味分野の外来語を多用する日本語と異なる特徴であるが、この特徴は「JL-KH」類型でも確認される。具体的には、情報技術や IT の分野での「포탈(ポータル)」「모바일(モバイル)」「디스플레이(ディスプレー)」「칩(チップ)」「그래픽(グラフィック)」「메모리(メモリー)」「네트워크(ネットワーク)」「플랜트(プラント)」や、スポーツ関連での「어시스트(アシスト)」「가드(ガード)」、そしてライフスタイルに関連する「엔터테이먼트(エンターテインメント)」「개그(ギャグ)」「코메디(コメディ)」「미사(ミサ)」「다이어트(ダイエット)」「인테리어(インテリア)」「마트(マート)」「몰(モール)」といった語が見られる。

前節の「JH-KL」類型では、日本語において特定の分野で使用される語を含め、多様な場面で活用される外来語が多く確認された。一方、「JL-KH」類型では、韓国語において多様な場面で活用できる語が非常に少なく、情報技術・IT・スポーツなどの限定的なテーマでの使用が特徴的である。まとめると、

日本語は一般的に多様な場面で使用される抽象的な意味分野の外来語の使用が多いのに対し、韓国語では特定の分野に特化した外来語の使用が目立つ。

3.6.3 「日本語-出現・韓国語-無し」（以下、J〇-KN） 類型

ここでは、日本語では出現するが韓国語では出現しない語の 848 語の中、通年度数順上位 100 語の特徴を見ていく。上位 100 語は 848 語の中で最も頻繁に使用される語彙を代表し、代表性の高いデータとなる。また、頻度が高い語彙は言語使用の傾向をより明確に示すことが多く、これらの語彙の特徴を分析することで特徴を捉えることができる。

表 16 「J〇-KN」類型の通年度数上位 100 語(意味分野別)

部門	中項目		J 有り-K 無し類型－日本語(韓国語訳)
1.1	1.10	事柄	ケース(케이스)
	1.11	類	レベル(레벨), タイプ(타입), パー(파), ランク(랭크)
	1.13	様相	ネット(넷), トラブル(트러블), バランス(밸런스), リストラ(x), ムード(무드), メリット(메리트)
	1.15	作用	リレー(릴레이), ルート(루트), アクセス(액세스), バック(백)
	1.16	時間	セット(세트), チャンス(찬스), シーン(씬), ポスト(포스트)
	1.17	空間	エリア(에리어), マウンド(마운드), クロス(크로스)
	1.19	量	メートル(미터), キロ(킬로), センチ(센티미터), トン(톤), グラム(그램), ペース(페이스), ミリ(밀리), リットル(리터), スーパー(슈퍼), ナンバー(넘버), パート(파트), シェア(쉐어)
1.2	1.20	人間	ユース(유스)
	1.22	仲間	ゲスト(게스트)
	1.23	人物	ボランティア(x), サポーター(서포터), サラリーマン(샐러리맨), メダリスト(메달리스트)
	1.24	成員	ジャーナリスト(저널리스트), スパイ(스파이), ユーザー(유저)
	1.26	社会	スタジアム(스타디움), バー(바), コンビニ(x)
	1.27	機関	クラブ(클럽), グループ(그룹)
1.3	1.30	心	デモ(데모), ニーズ(니즈), プレッシャー(x)
	1.31	言語	サミット(서밋), アンケート(앙케트), マニフェスト(매니페스트), マスコミ(매스컴)
	1.33	生活	サッカー(축구), ラグビー(럭비), ストレート(스트레이트), バスケットボール(x), シングルス(x), ゴロ(x), バレーボール(x), バーディー(버디), ボギー(보기)
	1.36	交わり	アピール(어필), サポート(서포트), アドバイス(어드바이스)
	1.37	経済	コスト(코스트), プレゼント(선물), バブル(버블), ローン(론)

	1.38	事業	アプリ(어플리케이션),クローズ(클로즈),リサイクル(리사이클),ハイテク(하이테크)
1.4	1.41	資材	ガラス(x),ガソリン(가솔린)
	1.43	食料	ハム(햄),パン(빵),ビール(x)
	1.44	住居	ドーム(돔),マンション(맨션),トイレ(x),ドア(도어),ステージ(스테이지),ワゴン(x) ,アメリカン(아메리칸)
	1.45	道具	バット(배트)
	1.46	機械	パソコン(x),ファクス(팩스),バイク(오토바이),スマホ(스마트폰)
	1.47	土地利用	コース(코스)
1.5	1.50	自然	コロナ(코로나),ホワイト(화이트)
	1.55	動物	ペット(애완동물)
	1.57	生命	クローン(클론)

表 16 は「J○-KN」類型に属する 846 語のうち、通年度数が高い順に上位 100 語を列挙したものである。この類型の特徴をみると、まず、1.19 項目の数量詞の表記の日韓相違である。簡単に見ていくと「メートル」「キロ」「センチ」「グラム」「ミリ」「リットル」などの数量詞は、韓国語では見られなかった。テキストデータを確認した結果、韓国語の新聞においては「m」「k」「cm」「ton」「g」「mm」といった英語表記を優先していることが分かる。これらの数量詞は、韓国の 20 世紀後半の新聞では「미터(メートル)」「킬로(キロ)」「센티(センチ)」など、ハングルの表記が優先されていたものの、現代に入ってから表記法の変化により英語表記になったと考えられる。また、スポーツ用語の「サッカー」「バスケットボール」「バレーボール」について、韓国語の場合、類義語である、「축구(蹴球)」「농구(籠球)」「배구(排球)」を使用するため、「J○-KN」類型に属している語も確認した。

3.4 節で確認された結果を踏まえ、日本語においては「ケース」「トラブル」「ムード」「アピール」「アクセス」「チャンス」といった、より多様な分野で用いられている語彙が「J○-KN」類型でも確認される。これらの語は、韓国語では類義語を用いる傾向があるため、外来語としてはあまり優先されない可能性がある。その中、「アピール」は、多様な品詞として使用されるという特徴を持つと考えられる。

例えば、「アピール」の場合は、名詞用法と動詞用法といった特徴が見られる。韓国語において「어필하다(アピールする)」で使用されているものの、新聞での通年度数が 15 未満であるため、「J0-KN」類型に属する語である。韓国語の用例では、「뮤지컬 시장에서 관객에게 어필할 수 있는 흔한 흥행공식도(ミュージカル市場で観客にアピールできる一般的な興行公式も)【文化_151229】」「미국과 국제사회에 어필하려는 의도다(アメリカや国際社会にアピールする意図がある)【政治

_151228】」などが確認できる。一方、日本語の用例では、「成立すれば「ウイルスと闘う」（首相）姿勢のアピールにもなる【内政_200305】」「法律や制度よりもアピール力の強いイメージが先行したという【読者_200425】」など、「アピールする」の動詞用法と共に、名詞用法としても多く使用されているため、日本語においての「アピール」は、名詞と動詞用法を両方採用していると言える。この語については、6章で詳細に分析する。

また、「アクセス」は、日本語の用例で「アルバイトなどを除く市職員がアクセス可能【総合_100105】」があるが、これを韓国語に訳すと「아르바이트 등을 제외한 시 직원만 출입/접근 가능（アルバイトなどを除く市職員が出入/接近可能）」になり、「新宿まで１５分と都心へのアクセスが非常に良く【特集_100805】」は「신주쿠까지 15 분이면 도착할 수 있는 도심 접근성이 매우 좋고（新宿まで15分と都心への接近性が非常に良く）」になる。韓国語では、[출입(出入)・접근(接近)]などといった類義語の使用が自然であると言える。

最後の特徴として、韓国語では外来語よりも既存の漢語を使用する傾向がある。類義語との関係にある語の判別は、韓国語の国語辞典から見出し語を確認して行った。抽象的な意味分野である「1.1」や「1.3」からみると、スポーツ用語を含め、「コンビニ」「ニーズ」「リストラ」「プレッシャー」「メリット」「サポート」「アドバイス」「プレゼント」などの語が、この特徴に該当する。一部の語彙では、外来語を完全に使用せず漢語のみを使用するケースもあるが、外来語が導入されているものの、その影響力が比較的小さいため漢語が主に使用されるケースも考えられる。これらの分析は6章で詳しく論じる。

3.6.4「日本語-無し・韓国語-出現」（以下、JN-K○）類型

ここでは、日本語では出現しないが、韓国語では出現する語の中、通年度数順上位100語の特徴を見ていく。

表17　「JN-K○」類型の通年度数上位100語の語彙リスト

部門	中項目		J無し-K有り類型－日本語(韓国語訳)
	1.11	類	シナジー(시너지), プライム(프라임)
	1.13	様相	パラダイム(패러다임)
	1.15	作用	イノベーション(이노베이션), スケーティング(스케이팅), ハッキング(해킹), アップグレード(업그레이드)
	1.16	時間	ビエンナーレ(비엔날레)
	1.19	量	クォーター(쿼터), インチ(인치), ナノ(나노), ハンディキャップ(핸디캡), マイレージ(마일리지)

1.2	1.21	家族	マム(맘)
	1.23	人物	ゴルファー(골퍼), マニア(마니아)
	1.24	成員	インターン(인턴), キュレーター(큐레이터), フォワード(포워드), バイヤー(바이어), シューター(슈터)
	1.26	社会	スーパーマーケット(슈퍼마켓), コンド(콘도)
	1.27	機関	コンソーシアム(컨소시엄), フォース(포스)
1.3	1.30	心	イシュー(이슈), オプション(옵션), エンジニアリング(엔지니어링), キャスティング(캐스팅), ポピュリズム(포퓰리즘), ウェル(웰), ビン(빙)
	1.31	言語	マルチメディア(멀티미디어), ブリーフィング(브리핑), モニターリング(모니터링), チャット(채팅), タスク(태스크), ロマンス(로맨스)
	1.32	芸術	アニメーション(애니메이션), キャロル(캐럴), ヒップ(힙), ホップ(합), コミック(코믹), メロ(멜로), キャプチャー(캡처)
	1.33	生活	キャンプ(캠프), トレッキング(트레킹), シューティング(슈팅), ブロック(블록), ウェアラブル(웨어러블), ブリッジ(브리지)
	1.35	交わり	カップ(컵), コンサルティング(컨설팅), コンベンション(컨벤션), デート(데이트), ユニバーシアード(유니버시아드), エキスポ(엑스포)
	1.37	経済	インセンティブ(인센티브), リベート(리베이트), コスピ(코스피), ロン(론), マージン(마진)
	1.38	事業	ソフトウェア(소프트웨어), アプリケーション(애플리케이션), リモデリング(리모델링), ストリーミング(스트리밍) , ハードウエア(하드웨어)
	1.41	資材	セメント(시멘트), グリップ(그립), ホイール(휠)
	1.42	衣料	グローブ(글러브), ブーツ(부츠)
	1.44	住居	ビュッフェ(뷔페), バルコニー(발코니), チェア(체어), オフィステル(오피스텔), ヴィラ(빌라)
	1.45	道具	ヴァイオリン(바이올린), コンドーム(콘돔), ポートフォリオ(포트폴리오), カップ(컵), ペイント(페인트), トロフィー(트로피)
	1.46	機械	ラム(램), スポットライト(스포트라이트), ボイラー(보일러), クレーン(크레인)
	1.47	土地利用	プラットホーム(플랫폼), バリー(밸리), ピラミッド(피라미드)
1.5	1.50	自然	アイス(아이스)
	1.51	物質	スモッグ(스모그), アルミ(알루미늄)
	1.52	天地	オーシャン(오션)
	1.54	直物	バクテリア(박테리아)
	1.57	生命	ヘルス(헬스)

表 17 は、「JN-K○」の 216 語のうち、通年度数が高い順に上位 100 語として列挙したものである。多くの語は『分類語彙表』には未登録で、内容から「J○-KN」で見られた特徴とは異なり、この類型は特に、韓国語の特徴、すなわち[特定の分野に関する語]が主体であることが伺える。

例として、ビジネスに関連する「アウトソーシング」「イノベーション」「インセンティブ」「インターン」「エンジニアリング」「ブリーフィング」「モニターリング」、芸術や文化の分野での「アニメーション」「ヴァイオリン」「ヴィラ」「キャスティング」「キャプチャー」「ポピュリズム」「ビエンナーレ」「ロマンス」、スポーツに関連する「ウィン」「ウェアラブル」「ウエート」「スケーティング」「シューター」「シューティング」「リバウンド」「ゴルファー」などが挙げられる。これらの外来語は、「JL-KH」で確認された通り、産業界や企業文化、芸術やスポーツ分野など、社会や文化に深く関連している。外来語がより限定的な特定の分野で使用されることにより、それぞれの語彙が持つ具体的なイメージが強調されていると考えられる。

また、もう一つの特徴としては「ヴィラ」と「オフィステル」、「アパート」のように、日韓で建物や住居に関わる表現が異なる点である。例えば、日本の「アパート」は 2~3 階建ての賃貸住宅を意味するのに対し、韓国語の「아파트（アパート）」は高層の集合住宅やマンションに近い概念を指す。「ヴィラ」は、日本語では、リゾートの豪華な別荘を意味するが、韓国語では小規模なアパートや住宅を指すことが多い。「オフィステル」は、韓国語特有の語で、オフィスと住居の機能を持つ建物を指す。このように、同じ外来語であっても、日韓での解釈や認識が異なる語も多く存在することが確認できる。

3.7　まとめ

第 3 章では、現代の日韓外来語の出現率を新聞を通じて分析し、その頻度の違いを明らかにした。さらに、意味分野を整理し、通年度数が高い 200 語の意味分野の特徴に基づきランク付けと類型化を行い、日韓外来語の相違点を明確に捉えた。以下にその結果を示す。

一点目として、新聞における日本語の外来語は、韓国語の外来語の 1.3 倍あり、日本語における外来語の使用が高いことが判明した。

二点目に、意味分野について分析したところ、日本語と韓国語において抽象的な意味分野の外来語が最も多く使用されているが、日本語ではより多様な分野で使用される外来語が多く、一方で韓国語ではより限定された分野での使用が目立つことが明らかになった。また、類型化により日韓間で外来語の使用頻度に相違が見られる類型の分析を行った。その結果、日本語においては動詞性を持つ外来語が多く見られ、「する」を付けて動詞として活用される外来語が多いこと、また韓国語においては、類義語との関係によって外来語の使用頻度が比較的に低いことが、日韓の言語使用における相違の特徴として指摘される。

4 章 日韓外来語の量的推移

4.1 日韓外来語の量的推移をとらえる観点

3 章では、現代の日本語と韓国語の外来語の量的特徴を詳細に分析し、ランク付けや類型化を実施して、意味分野に基づく相違を明らかにした。Chang(2016)や岸本ら(2022)の研究にも見られるように、日本語における外来語の使用量が韓国語に比べて多いという事実が指摘されており、現代における日韓外来語の使用率の比較分析により、韓国語に比べて約 1.3 倍の高さが確認された。これらの分析結果に基づき、現代の外来語の出現率の差異を理解するため、どのような過程を経て形成されたのか、またどのような種類の日韓相違が存在するのかを把握する必要がある。

そこで、4 章では、戦後から現代にかけての外来語の量的推移に注目し、その変動を詳細に分析することとする。さらに、先行研究で報告された外来語の使用と社会的背景との関連データを用い、これらのデータとの相互比較を通じて、日本語と韓国語における外来語の変遷を考察する。

4.2 外来語の出現率の通時的な比較

4.2.1 韓国語における通時的な量的推移

本節では、1945 年から 2015 年の韓国語における外来語の量的推移を示すため、構築した韓国新聞コーパスの結果を紹介する。2.2 節の表 1 で紹介した金（2011）のデータ表示方法に従い、2 章で述べた韓国新聞コーパスの 1945 年から 2015 年までの全体文字数や抽出した外来語の延べ語数と異なり語数、これらのデータを用いて「1 万字当たりの外来語の出現率(延べ語数/総文字数$\times 10^4$)」を求めを示す。

表 18　韓国新聞データによる各年のデータと出現率

年代	全体文字数	延べ語数	異なり語数	出現率
1945 年	309,622	238	58	7.69
1955 年	838,885	1,620	233	19.31
1965 年	756,526	4,567	530	60.37
1975 年	1,324,824	6,896	472	52.02
1985 年	1,313,442	8,218	544	62.58
1995 年	2,689,943	28,521	1,352	106.02
2005 年	2,285,273	26,400	1,117	115.34
2015 年	2,627,260	34,578	1,601	131.61
合計	12,145,775			

表 15 に示されている出現率をグラフで図示すると以下のようである。

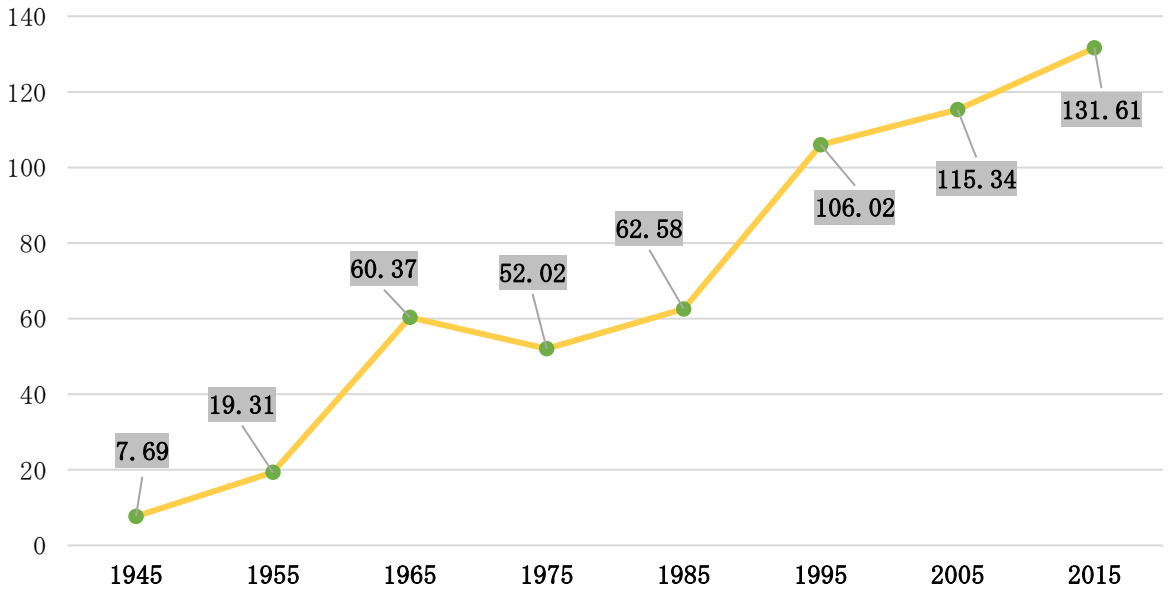


図 14　韓国の新聞データによる 1 万字当たりの外来語の出現率の推移

図 14 から、出現率の推移は、1945 年は非常に低いが、その後 1965 年まで急増したのち、1985 年まで停滞し、1995 年で再び急増し、さらに 2015 年まで緩やかに増加することをを示している。

外来語は、外国の物品と共に輸入され、定着した言葉である(Yang, 2014)。外国文化や外国語が現代においても多く輸入されていることから、外来語は外部の影響を強く受ける語であると言える。特に韓国語の外来語の変遷は、時期による国際関係や文化交流の影響を反映している可能性があるが、今まで外来語の量的推移とその背景を説明した研究が報告されていないため、既存の研究や図 14 の量的な推移との関連を考察し、その背景を検討する。

4.2.2　韓国語における通時的量的推移の背景説明

外来語の増減に関するその時期の事情を、韓国語史の参考文献を基に要約して記述する。以下の引用文の日本語翻訳は、筆者によるものである。

19 世紀末期以降から韓国語には西洋由来の外来語が多く輸入されるが、まだ、韓国語として定着しておらず、初期の段階ではハングルで外国語を表記するよりは、漢字を用いて音訳するケースが多かった（Min, 1998）。戦後である 1950 年から 1953 年までの「韓国戦争」が終わった韓国には、ヨーロッパからの外国語や英語がより多く輸入され、増えるようになったと言われている（Kang, 1985）。一方、戦後の韓国では本格的な「国語醇化」が始まる。「韓国語浄化」という方針の醇化政策は、その当時、韓

国で使われている日本語を醇化することから始まった。その後、1962 年に「ハングル専用特別審議会」が設置され、1970 年代に入り、政府の方針として言語の純化が積極的に進められた。1976 年、大統領の指示に従った国語醇化運動は新しい方向へと転換、既存の政府、公的場面、言論出版だけではなく、生活用語、学術、法律、スポーツ、俗語など、醇化の範囲がより拡大していく。1984 年、韓国国立国語研究院（現.国立国語院）が設置された後はその範囲がさらに広くなる(Choi,2003)。

こうした背景を考慮すると、1945 年の出現率の低さは、本稿の対象となっているハングル表記の音訳語の制約や、戦後直後の社会的状況、公的な文書が主体となっていた新聞の性質などが影響している可能性がある。1 次急増期とされる 1965 年は、韓国戦争後の社会の安定と経済成長の影響で、外来語の使用が増加したと思われる。1965 年から 1985 年までの停滞期には、前述した国語政策が影響を及ぼした可能性がある。言語政策は戦後直後から継続しており、政府の積極的な取り組みにより、公的な場やメディアにおける言語使用が制約されていたため、新聞における外来語の使用も停滞していたと考えられる。

2 次急増期とされる 1995 年は、1988 年の「ソウルオリンピック」開催を皮切りに、韓国の国際化が加速され、1989 年の「海外旅行の自由化措置」や 1998 年の「日本文化開放」政策の実施など、文化・経済の双方での開放が進んだ結果、外来語の導入が増えた可能性がある。特に、この時期には日本経由での外来語の導入も活発となっており、情報化と国際化の進行とともに、外来語の増加は加速していったと考えられる。

4.2.3　先行研究による日本語の外来語の量的推移

本節では、日本語の通時的量的推移を確認する。日本語における外来語の量的推移の検討には、金（2011）のデータを基に、1950 年から 2000 年までの 6 つの年次を対象とする。2 章で既に金（2011）のデータについて詳しく議論したため、この部分は省略する。但し、全体文字数について、1950 年にはページ数が非常に少ない（原則として 1 日 2 ページ）ことと、1960 年も若干少なめである。この二つの年を除けば、1970 年から 2000 年までの各年次における全体文字数はおおよそ 200 万字で、6 つの年次の合計は 10,133,178 字となる。

表 19　金(2011)のよる日本語の各年のデータとそれを基に計算した出現率

年代	全体文字数	延べ語数	異なり語数	出現率
1950 年	530,678	3,930	996	74.06
1960 年	1,161,251	15,738	2,043	135.53
1970 年	2,153,286	27,425	2,782	127.36

1980 年	2, 131, 901	27, 543	2, 699	129. 19
1991 年	1, 823, 274	21, 897	2, 545	120. 10
2000 年	2, 332, 788	39, 378	3, 286	168. 80
合計	10, 133, 178			

表 19 は、金(2011)で示しているデータから「1 万字当たりの外来語の出現率(延べ語数/総文字数×10^4)」を求めて示したものである。それを、グラフで図示すると以下のようである。

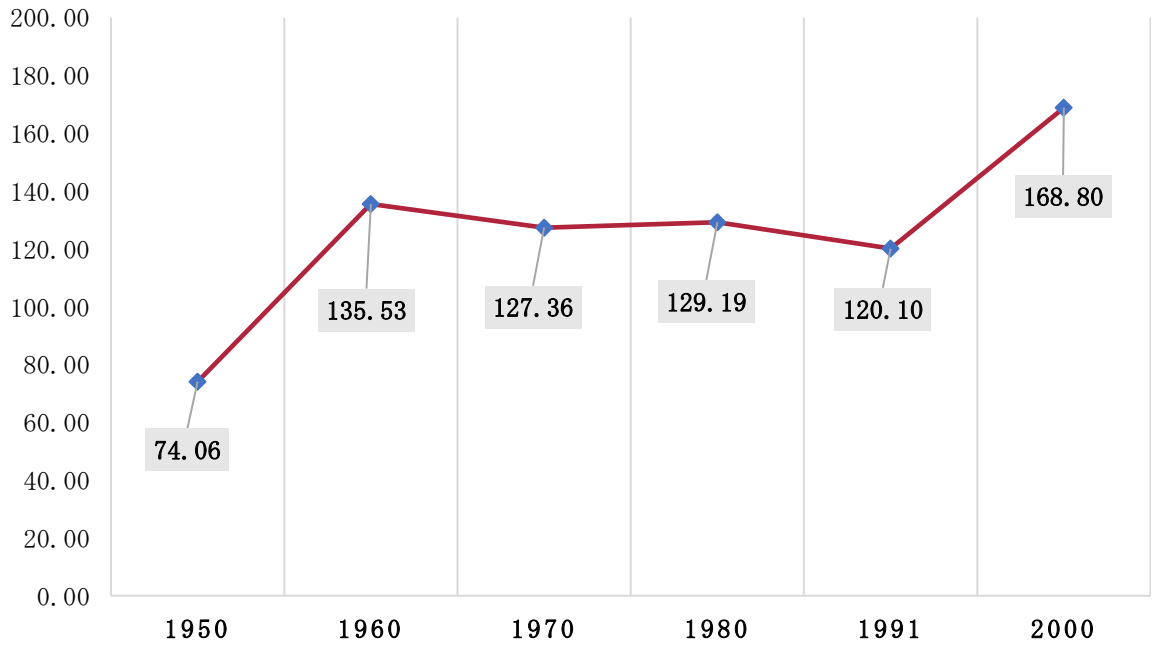


図 15　金（2011）のデータによる 1 万字当たりの外来語の出現率の推移

図 15 から、1950 年の外来語の出現率は 74. 06 であり、1960 年までには急激に増加している。この増加傾向は 1960 年まで続くが、1970 年から 1991 年の間は出現率の増加はほぼ停滞する。しかし、1991 年から 2000 年までの期間には、出現率は再び上昇し、2000 年には 168. 80 に達する。要するに、日本語における外来語の使用頻度は、1950 年から 1960 年、及び 1991 年から 2000 年の 2 つの時期に顕著に増加していることが明らかである。

この量的推移に関しては、橋本(2010)の研究でも同様の結果が得られている。この研究では、新聞社説を対象に量的分析を行っており、1950 年代後半からの急激な増加が始まり、1960 年代前半まではそのような傾向が続き、1970 年代半ばを境とし、その後は戦後前半期のような大きな増加は見られないと言う。この停滞の傾向は 1990 年代まで続き、2000 年代に入ると再び増加の兆しを示すと述べられている。

まとめると、新聞における日本語の外来語の推移は、戦後から 1960 年代初め、そして 1991 年から 2000 年の 2 つの時期に増加の傾向が確認される。一方、1960 年代から 1991 年までの間は出現率がほぼ停滞していると言える。では、2000 年以降の推移ついては、どう違うだろうか。3 章の現代の日本新聞データを用いて「1 万字当たりの外来語の出現率(延べ語数/総文字数×10^4)」を求めてグラフで示す。

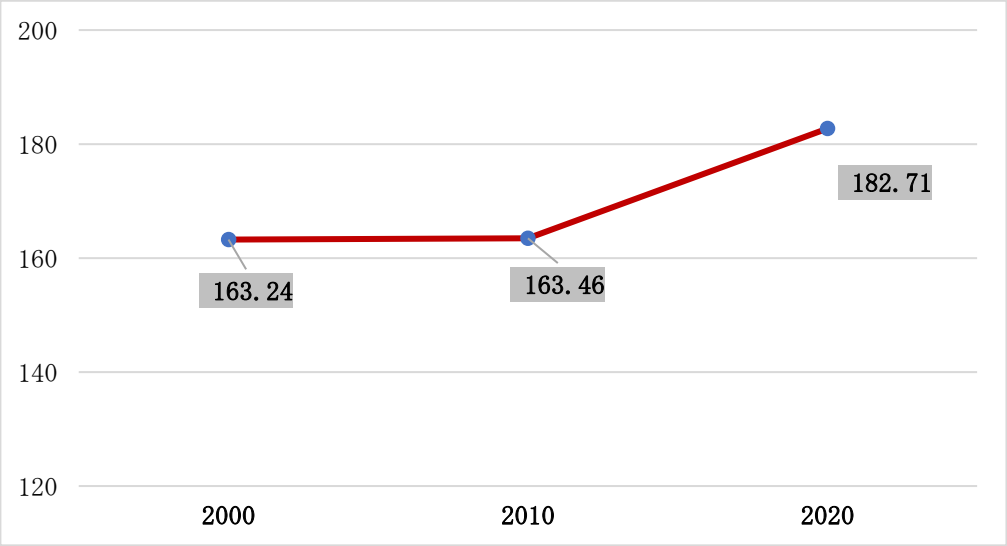


図 16　日本新聞データによる 2000 年以降の 1 万字当たりの外来語の出現率の推移

図 16 から、2000 年と 2010 年の出現率は、それぞれ 163.24 と 163.46 であり、2010 年から 2020 年にかけては、163.46 から 182.71 へと増加することが確認できた。日本語における戦後から 2020 年までの推移を次節で説明する。

4.2.4 日本語における通時的量的推移

4.2.2 で確認した金（2011）のデータと現代の日本語の推移を用いて、戦後から現在までの日本語における外来語の量的推移を確認してみよう。金（2011）のデータ(1950 年から 2000 年)と筆者が作成したデータ(2000 年から 2020 年)を用いて 1950 年から 2020 年までの日本語の外来語の量的推移を示すと以下のようである。

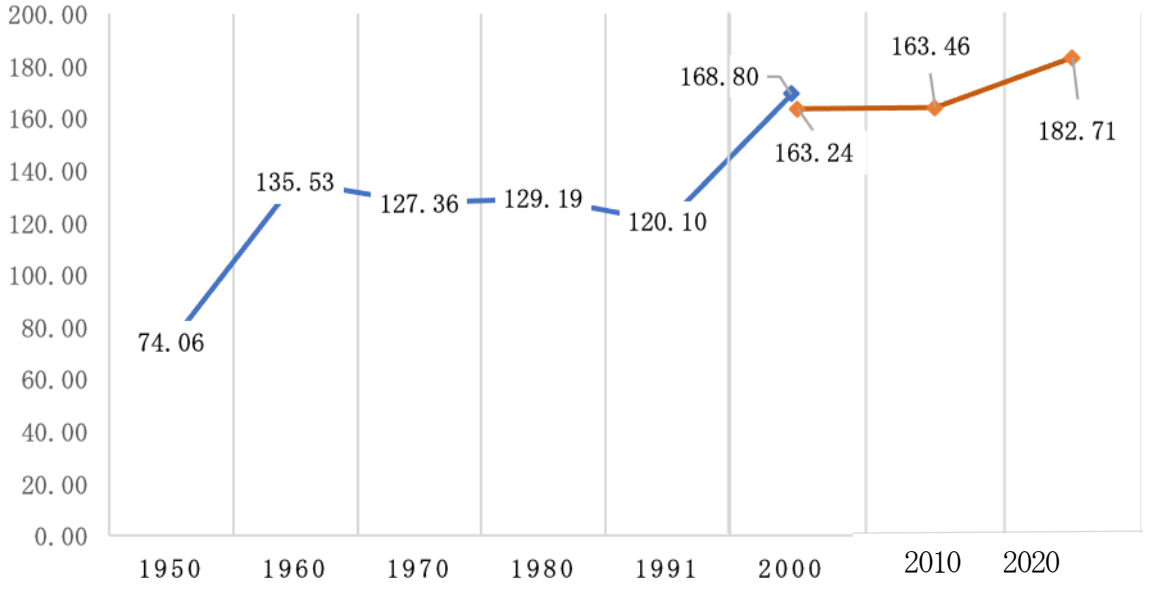


図 17　日本の新聞データによる 1 万字当たりの外来語の出現率の推移

先行研究と本研究のデータは同一条件で作成されていないため、誤差が存在する可能性は考えられる。しかしながら、推移の大まかな傾向を見ると、1950 年から 1960 年は「急増期」、1960 年から 1991 年までは「停滞期」、1991 年から 2000 年まで再び「急増期」、2000 年から 2010 年までは「停滞期」、そして 2010 年から 2020 年は「増加期」という特徴が見受けられる。特に 1991 年から 2000 年にかけての急増を経て、以後は比較的安定した推移を示していると言える。

4.3　日韓外来語の量的推移比較

4.2 節までの内容をまとめ、日本語と韓国語の外来語の戦後からの量的推移を比較して以下に示す。

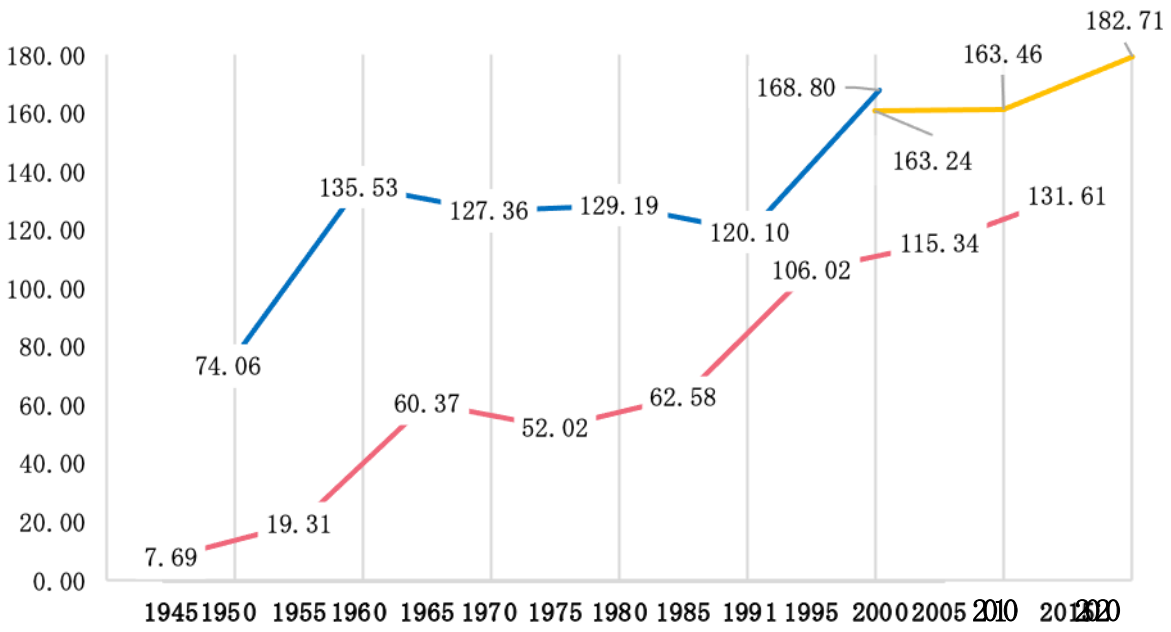


図 18　日韓の 1 万字当たりの外来語の出現率の推移比較

図 18 から、いくつかの注目点が浮かび上がる。金（2011）のデータと韓国新聞データ間に 5 年の差があるものの、それを考慮しつつ日韓のデータを年度に合わせて比較した結果、両国とも外来語の使用率は増加していることが確認される。

具体的には、1950 年の日本語の外来語出現率は 74.06 と、韓国語の戦後直後の 7.69 との間に著しい差がある。韓国語の出現率が 1945 年から 1965 年にかけて 7.69 から 60.37 へと急増する一方で、それでも日本語の 1960 年の出現率である 135.53 には及ばない。この点から、戦後初期の段階で日韓の外来語の出現率には大きな差異が存在していたことが窺える。更に、日本の 1950 年から 2020 年の出現率は 74.06 から 182.71 へ、韓国の 1945 年から 2005 年の出現率は 7.69 から 115.34 へと増加しており、日本語の外来語使用率は戦前から高かったのに対し、韓国語は戦後からその差を縮小し始めたと解釈できる。

また、日本語で 1950 年から 1960 年に 1 次の急増、1991 年から 2000 年に 2 次の急増が観察される傾向は、韓国語でも類似している。韓国では、1945 年から 1965 年、および 1985 年から 1995 年の間に急増しており、この急増の年代は日韓ともほぼ同じである。そして、日本の 1960 年から 1991 年と韓国の 1965 年から 1985 年の「停滞期」の推移も共通している点が見受けられる。しかし、3 章でも述べたように、2 次の急増が見られる時期において、日韓で相違が見られる。日本語の場合は、2000 年から 2010 年まで

再び停滞期を迎えてから 2010 年から 2020 年に増加する傾向であるが、韓国語の場合は、1995 年以降 2015 年まで引き続き増加する傾向である点である。

4.4　日韓の外来語受容の歴史的背景とその違い

日韓の外来語の量的推移を考察する上で、背景事情を明確に理解することは重要である。全般的な外来語に対する受容態度については、陣内(2012:18)によれば、日本では戦後ほぼ野放し状態が続き、21 世紀に入ってから外来語の検討を始めたが、基本的に英語化に対する抵抗はない。一方、韓国は民族意識が強く、言語醇化運動もみられることから、日本ほど単純借用は行わない風土があるとされる。次に、韓国語の外来語受容時期に関しては、甲午改革（1894 年）以降に西洋外来語の受容が始まったことが指摘される。これは、日本の西洋外来語受容が 16 世紀半ばの南蛮貿易を通じてポルトガル語から始まったことと対照的で、日韓間には 300 年以上の受容時期の違いが存在する(Yang, 2014)。

この時期の違いが日韓の外来語使用率の差にどのように影響を与えたかを考察すると、戦前の日韓では外来語の輸入が増加していた。しかし、戦中の日本では敵性語排斥の姿勢を強め、西洋由来の外来語の使用が制限されていたことが確認される。それにもかかわらず、1950 年の日本語における外来語の出現率は韓国語に比べ非常に高く、戦後には外来語の使用が急増する傾向が見られた。このような受容時期の差が日韓外来語の出現率の差に影響を与えた可能性が推察される。

また、図 18 から確認できる停滞期に関しては、日韓それぞれの国や社会の動向が大きく影響している。特に韓国では、政府によるメディアや言論への言語政策が外来語使用の抑制に寄与しているとされる。対照的に日本では、外来語の多用に対する社会的懸念が増大し、1960 年代には「外来語の戒め文言」が新聞用語集に盛り込まれるようになった。1970 年代から 1980 年代にかけての日本の外来語使用の背景として、橋本(2010)の研究を参考にすると、1975 年頃には外来語に対する人々の関心が下火になり、流行現象が一段落したと言われている。この時期に、フランスや韓国が外来語規制の言語政策を開始し、これが日本でも外来語使用の制約を生んだ可能性が高い。そして、1990 年以降、インターネットの普及や国際化、情報化の進行を背景に、再び外来語の使用が増加してきたと言える。2000 年以降の外来語の推移について、NHK の調査(2022)では以下のように説明している。

> 2000 年ごろを境として，増加を続けつつも，その全体的な増加のスピードがそれ以前よりも弱まったという見方が複数出ている（塩田,2022）。…(中略)また、「外来語はすでに一定程度日本語の中に入り込んでおり（あるいは「飽和」していて），もはや，かつてのように「（無条件に）かっこいい」ものではなく，「ふつうのことば」として位置づけるのが妥当な時代にさしかかっていて，中でも一部の外来語は「在来語」的な存在になりつつあると言える。

韓国語の場合、日本語より出現率は低いものの、1995 年から引き続き「増加期」である。この背景には、韓国語は、外来語の輸入時期が日本語より遅く、グローバル化や情報化の始まりであると言われる 1995 年後半から新しいものや概念を表す語の出現が多くなったため、既に「飽和」状況とも見なした日本語とは、その推移が異なると考えられる。無論、それにも関わらず、韓国語の外来語の出現率は日本語に追い付くことはできない。この点については、通時的な観点から日韓の外来語の特徴に焦点を当てた分析を行う必要がある。

以上、日本と韓国における外来語の使用には顕著な差異が観察されるが、その理由は一様ではない。外来語受容の時期の違いはもちろんのこと、歴史的背景における戦争や政策の影響、さらに言語に対する社会的態度や価値観の相違が一定の役割を果たしていると考えられる。これらの言語的差異の深い理解は、言語政策や教育を考える上での有益な洞察を提供し、それぞれの国において外来語をどのように取り入れていくかについての方向性を探る一助となり得る。

4.5 まとめ

本章では、戦後から現代にかけての外来語の量的推移を詳細に分析して、日韓外来語の量的推移には明確な時系列のパターンを確認した。また、今まで報告された韓国語の先行研究をまとめ、量的推移と照らし合わせることで、韓国語の外来語における背景を整理することができた。

日本では、戦前から外来語が比較的多く使用されており、戦後から現代に至るまでその使用率は時を経るごとに安定した増加を示している。一方、韓国では戦後から外来語の使用が急増し、経済発展とともに使用率が高まっていったが、日本語に比べるとその増加率はやや遅れており、現代に入っても日本に追い付くことはできないという特徴が確認できた。また、両国では、20 世紀後半では、外来語の急増時期と停滞時期が類似していたが、現代に入ると、韓国語は増加し続ける一方、日本語は一時期とどまってから再び増加するという特徴が明らかになった。

このような量的推移の特徴は、日韓間の国際的な政治経済状況や国語政策、人々の認識といった様々な背景が一定の影響を与えていることを説明して、背景だけではなく、外来語がどのように進化してきたかを時系列で比較した。

5 章　増加傾向から見た日韓外来語の特徴

5.1　本章の目的

5 章では、20 世紀後半、日本語では 1950 年から 2000 年、韓国語では 1945 年から 1995 年の各六つの年次を通じて日本語と韓国語の外来語使用の特徴に焦点をあてた分析を展開する。この章の主な目的は、通時的な観点から日本語と韓国語における外来語の意味分野を詳細に把握し、20 世紀後半における両言語の外来語の特徴を明らかにすることにある。さらに、出現率の計算と増加傾向係数の算出を通じて、日韓の外来語の増加のパターンを分析し、その相違点を明確にすることを目指す。

5.2 増加傾向係数の算出

本節では、通時的な観点から日本語と韓国語の外来語の相違や特徴を明らかにするための分析方法を紹介する。通時的な分析では増加傾向係数を採用するが、その理由を以下に示す。

増加傾向係数は、時間の経過に伴う外来語の使用率の増加を定量的に評価する数値的手法である。これにより、特定の期間における外来語の増加率や、その増加が一貫しているかどうかなどの情報を得ることが可能である。また、日韓における外来語の増加を比較する際、増加傾向係数の算出は有効である。この係数を用いることで、両国における外来語の増加の度合いを数値的に評価することができる。さらに、この数値を基に、日本語と韓国語における外来語の取り入れ方や変化の傾向の相違を具体的に把握することができると考えられる。

国立国語研究所(1987)では、特徴的な単語を取り上げる方法の一つとして増加傾向を算出している。また、金(2011)においても、基本語化になっていると考えられる外来語を選定するため、増加傾向係数を採用して分析を進めた。このように、韓国語において特徴的な外来語を取り上げ日本語と比較するため、先行研究の方法に沿って、増加傾向係数を算出する。

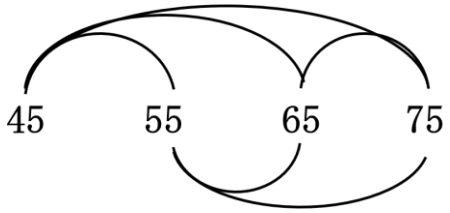


図 19　増加傾向係数の算出方法(国立国語研究所, 1987)

増加傾向係数の算出方法を説明する。初めに、選定した外来語の出現率を算出し、時間の経過に伴って比較する。日本語においては、1950 年から 2000 年までのデータを、韓国語では 1945 年から 1995 年までの 6 つの異なる年のデータを比較する。新しい年の出現率が古い年の出現率より高い場合は「+1

点」、低い場合は「-1 点」として点数を付ける。韓国語の外来語を用いて、その方法を説明すると以下のようである。

表 20　韓国語の「프로그램(プログラム)」の各年の出現率

韓国語	1945	1955	1965	1975	1985	1995
프로그램 (プログラム)	19.38	9.54	75.34	54.35	119.53	120.82

例として、韓国語の「프로그램(プログラム)」を用いて説明すると、1945 年を基準に、1955 年の出現率が 9.54 で低いため[-1 点]、1965 年から 1995 年までの出現率は 1945 年より高いため、各年[+1 点]、合計[＋4 点]を得る。同様に、1955 年を基準に 1965 年から 1995 年までは合計[＋4 点]、1965 年を基準にすると 1975 年は低いため[-1 点]、1985 年と 1995 年は高いため、合計[＋2 点]となる。1995 年までの計算結果に基づき、最終的な合計点数で外来語の増減を示す。合計点数は六つの年次に基づくため、「-15」から「+15」の範囲になり、この点数から外来語が時間と共に増加しているか、減少しているかを判断する。なお、「프로그램(プログラム)」の増加傾向係数は[11]であり、これは「増加」の区分に該当する。

区分付けの方法は、金(2011)の研究に基づき、「増加・やや増加・変化なし・やや減少・減少」の 5 つの区分に分ける。この分析では、通年度数（各年の出現度数の合計）が 30 以上の外来語（平均して各年 5 回以上出現する語）に焦点を当てる。

区分１（増加）	増加傾向係数が	＋15～＋８
区分２（やや増加）	同	＋７～＋３
区分３（変化なし）	同	＋２～－２
区分４（やや減少）	同	－３～－７
区分５（減少）	同	－８～－15

図 20　金(2011)による増加傾向係数と区分

増加傾向係数を算出して、韓国語の六つの年次の増加傾向を日本語と比較した表とグラフを以下に示す。日本語のデータは、金(2011)を利用した。

表 21　増加傾向の区分による日韓の外来語語数

増加傾向	金(2011)の語数	韓国語の語数
増加（+15～+8）	214	147
やや増加（+7～+3）	210	116
変化無し（+2～−2）	123	34
やや減少（−3～−7）	100	7
減少（−8～−15）	35	2
合計	**682**	**306**

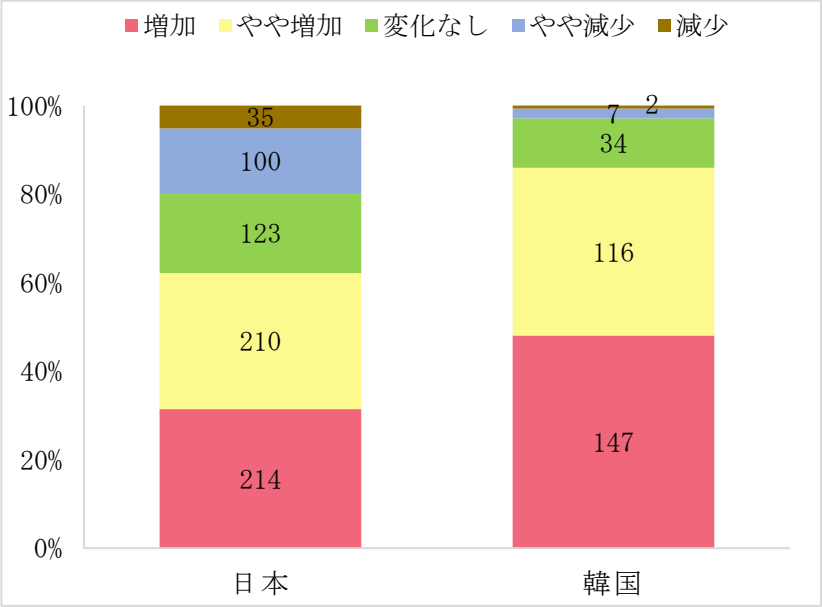


図 21　日本語(金, 2011)と韓国語の 20 世紀後半の増加傾向の語数

4 章での分析結果によれば、韓国語の外来語の使用は戦後から急増する傾向にある。特に 1945 年には出現する外来語の数が非常に限られており、1965 年の 1 次急増期から多数の外来語が出現し始めた。その結果、306 語のうち 263 語が増加傾向（増加・やや増加）を示していることが分かる。一方、日本語においては、増加・やや増加を示す外来語が全体の 60%程度であるものの、変化無しや減少・やや減少の傾向を示す外来語も少なくないことが確認できる。

5.3　外来語の増加傾向とその意味分野

現代で確認できた抽象的な外来語の使用といった特徴が 20 世紀後半においても確認できるのか、なお、増加傾向の各区分にどのような意味分野の外来語が含まれており、それにはどういった日韓相違があるのかを把握するため、出現する外来語の意味分野を『分類語彙表』を用いて把握する。意味分野は、

3 章と同様、「1.1 抽象的関係」と「1.3 人間活動」は抽象的な意味分野、「1.2 人間主体」「1.4 生産物」「1.5 自然物」は具体物として意味分野で見なす。

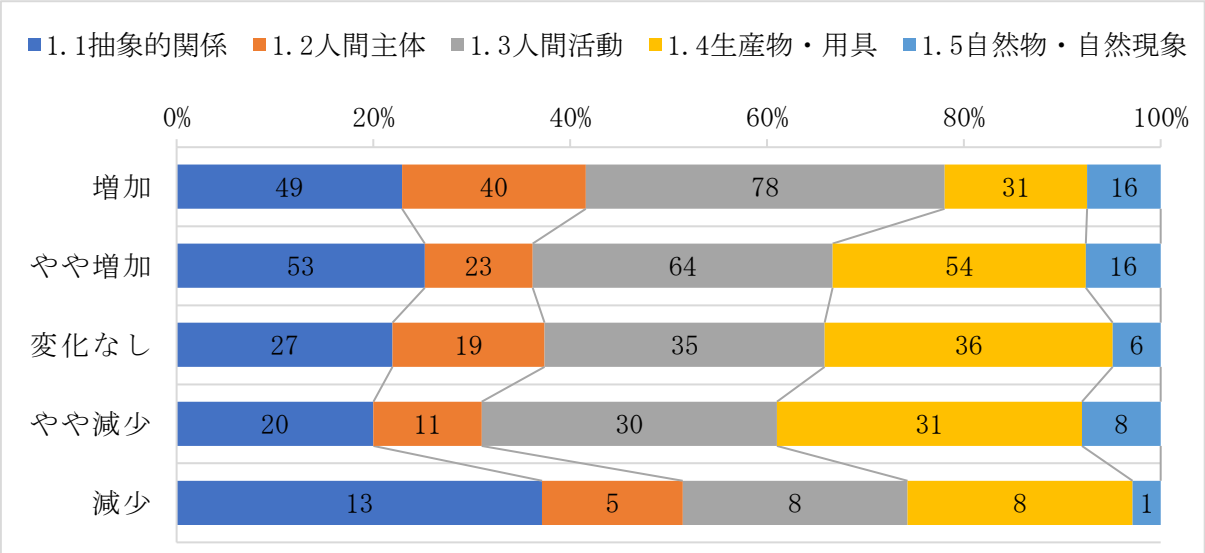


図 22　金(2011)による「外来語の増減と意味分野」(p.17)

まず、金(2011)では、日本語の意味分野について、次のように説明している。

> 語数の少ない区分 5（減少）を除いて、おおむね、増加傾向の大きい区分ほど、「1.3 人間活動」や「1.1 抽象的関係」といった抽象的な意味分野の語が多く、「1.4 生産物・用具」という具体物の意味分野の語が少ない。すなわち、20 世紀後半の新聞で増加している外来語には、抽象的な意味を表すものの方が、具体的な意味を表すものより多いという傾向が見られるのである。
>
> ところで、宮島達夫（1980)が雑誌 90 種の上位 7,000 語について調べた結果では、外来語は（分類語彙表の）「1.4 生産物・用具」に最も多い。すなわち、外来語には具体的な意味を表す名詞が多いのであり、このことは、外来語についてのなかば常識になっているといえる。ところが、上の結果は、こうした外来語の常識をくつがえすものといってよい。20 世紀後半の新聞では、抽象的な意味を表す外来語の方が、具体的な意味を表すそれよりも、増えている可能性があるのである。（p.17-18)

このように、現代の日本語で特に多く見られる「1.1」「1.3」という抽象的な意味分野の外来語の使用は、現代特有のものではない。20 世紀後半の分析でもこの現象は確認でき、戦後の日本語では、抽象的な意味を持つ外来語が広く用いられていたことが示される。

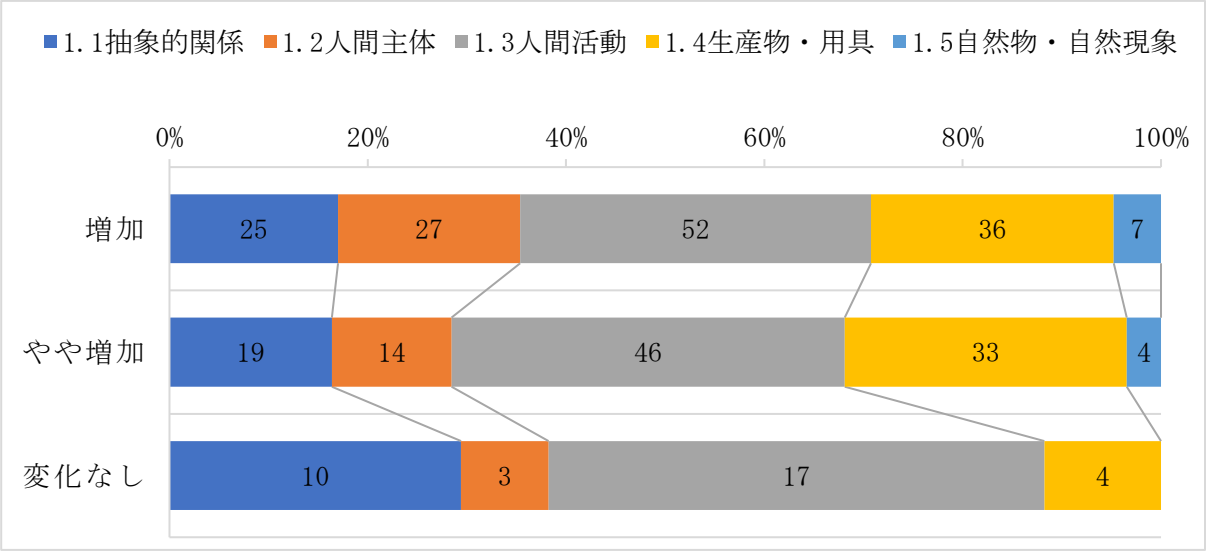


図 23　韓国語の外来語の増減と意味分野

次に、韓国語の意味分野を確認する。金(2011)との比較のため、同じ方法でグラフを作成した。「やや減少」と「減少」は、その数が非常に少ないため、除いてから示した。韓国語の場合は、増加傾向が大きい区分で、「1.3人間活動」の抽象的な意味分野が最も多く、次は「1.4生産物」の具体物の意味分野が多いことが分かる。特に、増加の区分では、「1.1抽象的関係」より「1.2人間主体」の具体物の意味分野が多い。韓国語の 1945 年から 1995 年までの新聞で増加している外来語は、日本語と同じく抽象的な意味分野が多いものの、「1.3人間活動」に偏っており、「1.1抽象的関係」より具体物の意味分野の語が多いという傾向が確認できる。現代の韓国語において、抽象的な意味分野が最も多く、その中でも「1.3」の意味分野が特に多いことを確認したが、その特徴は、20 世紀後半の韓国語においても同じく確認できる。

まとめると、日韓とも戦後から現代に至るまで、抽象的な意味分野の外来語の使用が増加していることは同じであるが、日本語はより多様な分野の外来語の使用が多い一方、韓国語は、人間活動に関わる抽象的な外来語の使用が特徴的であると言える。

増加傾向係数を算出した 20 世紀後半における韓国語の外来語の分類番号の語彙表を附録に示す（[語彙表 3] pp, 113-115）。

5.4 増加傾向からみた日韓外来語の比較分析

5.3 までの分析を通して、全体の外来語に対する特徴を分析した。その結果、抽象的な意味分野において、日韓で相違が見られることを確認した。5 章では、日韓外来語の増減を確認し、その際に増減の差に伴う注目すべき点を検討することで外来語の特徴を把握する章であるため、増加傾向係数を算出し

た外来語の中、「日本：増加－韓国：変化無し」「韓国：増加－日本：減少(やや減少)」「韓国:増加－日本：変化無し」の三つの点に焦点をあて、該当する語を見てきたい。

5.4.1　日本：増加－韓国：変化無し

「日本：増加－韓国：変化無し」の語を、「外来語(分類番号)」で示すと、「ケース(1.10)」「ミス(1.34)」「リスト(1.31)」がある。これらの語の「100 万字当たりの外来語の出現率(出現度数/総文字数×10^6)」を計算して、戦後から 2000 年までの推移を示すと以下のようである。日本語の出現率の分析には、金(2011)のデータを利用する。ただし、金(2011)のデータでは具体的な用例を確認することができないため、『昭和・平成書き言葉コーパス』（以下、SHC）を使用して用例の確認を行うこととした。

表 22 「日本：増加－韓国：変化無し」語の出現率

	日本語(金,2011)	1950	1960	1970	1980	1991	2000
	韓国語	1945	1955	1965	1975	1985	1995
1	ケース	1.88	26.70	44.58	36.12	54.30	48.44
	케이스	0.00	4.77	29.08	4.53	6.09	1.86
2	ミス	0	6.89	29.26	15.95	12.61	39.01
	미스	0.00	0.00	47.59	1.51	2.28	0.00
3	リスト	5.65	6.03	13.00	5.51	52.10	10.72
	리스트	6.46	0.00	3.97	9.06	8.37	3.35

「ケース(1.10)」は、3 章でも触れたものであるが、現代の日本語においては高頻度であるが、韓国語においては出現しない類型に相当する語である。「事例」「例」を意味する「ケース」は、日本語においては、既に新聞用語の中で基本語の地位を確保したと見なせる語であるが(金,2011)、韓国語においてはそれとは異なる特徴がある可能性がある。外来語である「ケース」ではなく、類義語の「事例」の使用を優先する傾向があると推測できるが、これについては、6 章で詳しく論じる。

「ミス(1.34)」は、『分類語彙表』において「成功・失敗」といった行為を示す語であり、「失策」「過ち」など「mistake」の略語として使用される語である。

(7) 正確が自慢のＮＨＫらしくないミスだった。【70P 読売 1957_52016】

(8) 編集者や記者だつて人間だから、ミスや思い違いもあるのは当然だが…【70M 中公 1957_11006】

(9) 名人の肩書をもつ人だが、しばしばミスのある課題を出す。【70M 中公 1957_11006】

SHC のデータによると、日本語においては、1957 年から「ミス」の用例が確認される。表 21 の出現率をみると 1980 年と 1991 年に少し減少する傾向ではあるが、2000 年になると再び急増する傾向であり、増加傾向係数からも日本語の「ミス」は、増加傾向係数[9]で[増加]の区分に該当する語である点で、ある程度安定して使用されていることがうかがえる。

(10) 그 權威를 의심할 정도의 형편없는 미스[miss]가 게임마다 두드러지게 나타나고 있어…(その權威を疑うほどのお粗末なミスが改任ごとに顕著に現れており…)【スポーツ_651201】

(11) 전체적인 聯關이 잘되지 않아 엉뚱한 미스[miss]를 내는 일이 있어서는 안 되겠다는 것이다(全体の連関がうまくいかず、間違ったミスを出すことがあってはならないということである。)【経済_651202】

(12) 연합출제에서조차 출제미스[miss]나 정답표의 누설사건등 쓰린 경험이 있는 만큼…(連合出題でさえ、出題ミスや解答表の漏洩事件など苦い経験があるだけに…)【社会_651207】

一方、韓国語における「미스(ミス)」は、1965 年に使用が始まり、出現率が 47.59 に急増していることが確認できる。既に挙げた用例から、日本語と同様に「mistake」の略語として「미스(ミス)」が用いられていることが明らかである。とはいえ、このような使用例は、1975 年以降は各年に 1,2 例しか見られず、1995 年には出現しなくなっている。この変動には、類義語の「실수(失手)」の存在が考えられる。『高麗大韓国語大辞典』では、「미스(ミス)」の類義語として「실수(失手)」が提示されており、その意味として「부주의로 잘못을 저지름. 또는 그 잘못.(不注意で間違いを犯す。またはその過失)」と説明している。韓国語の新聞を分析すると、1945 年から 1975 年までは、平均 3.84 の出現率を示していた「실수(失手)」が、1985 年になると 14.47、1995 年にも 8.55 で、その使用が「미스(ミス)」に比べ多いことが確認された。このことから、「미스(ミス)」は 1965 年に急増したものの、類義語「실수(失手)」との関係により、その普及が制限されてしまったとうかがえる。

「リスト」の場合も、「ケース」「ミス」のように、類義語との関係が予想される語である。「合格者のリスト」「候補者のリスト」「日本側代表のリスト」のような、人に関わるリストの場合、「명단(名單ー日本語では名簿)」という類義語を用いる傾向があるため、この「日本：増加ー韓国：変化無し」の 3 語は、「類義語との関係」により、日本語は増加するものの、韓国語は変化無しに想定されたと考えられる。

5.4.2　韓国：増加－日本：減少(やや減少)と変化無し

この項では、韓国では増加するものの、日本語では減少(やや減少)する「シーズン(1.16)」「オリンピック(1.35)」「スキー(1.33)」「キック(1.33)」の四つの語について考察する。

表 23 「韓国：増加－日本：減少(やや減少)」の語の出現率

	韓国語	1945	1955	1965	1975	1985	1995	日本
	日本語(金, 2011)	1950	1960	1970	1980	1991	2000	増加傾向
1	시즌	0.00	0.00	10.57	27.17	28.93	92.94	やや減少
	シーズン	30.15	74.92	38.55	27.67	6.03	31.29	
2	올림픽	0.00	9.54	33.05	113.98	132.48	118.96	やや減少
	オリンピック	15.08	160.17	50.62	118.20	12.07	23.58	
3	스키	0.00	16.69	46.26	22.64	33.50	123.05	やや減少
	スキー	41.46	62.86	29.26	17.82	4.94	44.15	
4	킥	0.00	0.00	1.32	0.00	19.80	5.58	減少
	キック	3.77	9.47	7.43	3.28	0.00	2.57	

これらの単語は、日本語においても出現率が高いものの、年ごとの変動が大きく、減少またはやや減少として測定されたと測定されている。これらの単語の中で、「シーズン」を除けば、すべてスポーツ関連の語である。日本語の「シーズン」に関連する SHC の用例を調べると、「観光シーズン」「読書シーズン」「結婚シーズン」「就職シーズン」などの一般的な用例に加えて、「スキーシーズン」「野球シーズン」といったスポーツ関連の用例も確認される。一方、韓国語においては、「観光シーズン」「読書シーズン」「結婚シーズン」などの用例も存在するが、大半の用例が「野球シーズン」や「シーズン開催」「今回のシーズンの競技」のようなスポーツ関連の「シーズン」である。

表 23 の単語群に関しては、日本語と同様に使用されている語であるが、韓国の新聞においてはスポーツ関連の記事や言及が増えていることが考えられる。そのため、韓国語において、これらの単語が増加傾向として算出されたと推測される。さらに、このようなスポーツ関連の単語は次の分類でも見受けられる。

表 24 「韓国:増加ー日本：変化無し」の語の出現率

	韓国語	1945	1955	1965	1975	1985	1995
	日本語 (金, 2011)	1950	1960	1970	1980	1991	2000
1	슛	0.00	0.00	15.86	12.83	16.75	56.88
	シュート	1.88	43.06	18.58	20.17	4.94	16.72
2	붐	0.00	2.38	11.90	21.13	25.12	14.13
	ブーム	0.00	45.64	34.37	10.79	20.84	15.86
3	스카우트	0.00	0.00	0.00	0.00	11.42	17.47
	スカウト	0.00	4.31	7.43	2.81	2.19	4.29
4	골	0.00	0.00	3.97	0.00	73.09	70.63
	ゴール	1.88	21.53	38.08	15.95	0.00	33.87
5	홈	0.00	0.00	14.54	5.28	4.57	37.92
	ホーム	3.77	12.92	8.82	24.39	2.19	6.43

「シュート(1.33)」「ブーム(1.33)」「スカウト(1.36)」「ゴール(1.33)」「ホーム(1.17)」という単語群の中で、「ブーム(1.33)」を除けば、全てがスポーツ関連の単語となる。「スカウト(1.36)」は「抜擢」という意味で、「ホーム(1.17)」は野球における「塁」を指すものである。

表 24 に基づくと、日本語では 1950 年から 1970 年頃にかけて多くの単語が早い段階である程度の出現率を示しているのに対して、韓国語では 1975 年から 1995 年頃にその出現率が増加していることが明らかである。特に韓国語における「슛(シュート)」、「붐(ブーム)」、「홈(ホーム)」の出現率は、1975 年以降顕著に増加している。中でも「シュート」と「ホーム」は 1985 年以降に大きく出現率が増加しており、この時期に韓国語での使用が拡大したと推測される。「スカウト」について、日本語では 1970 年代以前から安定した出現率を示しているが、韓国語では 1985 年までの出現は確認されず、その後の 10 年間で出現率が上昇している。これらの特徴は、韓国の新聞において、スポーツ関連の記事や言及が増えていた可能性によるものであり、韓国において、日韓で意味が異なるか、使用される用例に特徴があるなどの相違は見当たらなかった。

本節における「韓国：増加ー日本：減少(やや減少)と変化無し」と 5.4.1 節の「日本：増加ー韓国：変化無し」の分析結果では、第 3 章で見られた特徴が見受けられる。第 3 章では、日本語における外来語の特徴として、名詞用法と動詞用法の兼用、日常的な場面で一般的に使用される抽象的な意味分野の外来語の多用が見られた。これに対し、韓国語は類義語の使用を優先し、頻度が低くなる傾向にあるこ

と、多様な品詞の兼用が少ないこと、特定のテーマに限定された用語の使用が多いという特徴が指摘されている。

「日本：増加－韓国：変化無し」というグループに関しては、韓国語において、1945 年と 1955 年には外来語の出現が見られず、1965 年にはじめて使用が見られるという外来語の受容の遅さや類義語の使用が優先されるため、その後は出現率が減ることにより「変化なし」として測定されたと考えられる。一方で、「韓国：増加－日本：減少(やや減少)と変化無し」という場合には、むしろ、日本語の出現率が韓国語より高い年があるため、日本語における何らかの特徴というよりも、韓国新聞において特にスポーツに関連する外来語の出現が多く、段々と新聞での出現頻度が高まり、増加として測定されたとうかがえる。

5.5 まとめ

第 5 章では、20 世紀後半における韓国語の外来語の出現率と増加傾向係数を算出し、金(2011)の研究成果と比較分析を行った。本章では、日韓外来語の増加のパターンを分析し、その相違を明らかにするために、20 世紀後半における外来語の増加傾向係数を用いて増減の差が見られる三つの分類の分析を通して、それぞれの特徴を確認した。

分析の結果、20 世紀後半の日韓の新聞において外来語の使用は、共に抽象的な意味分野での増加が認められた。日本語においては、抽象的な意味を表す外来語の方が、具体的な意味を表すものより多いという傾向が見られる。一方、韓国語では、抽象的な意味分野の中でも「人間活動」を表す語が特に多いことや「1.1 抽象的関係」より「1.4 生産物・用具」の具体物の出現が多いという特徴が確認された。

また、増加パターンを基準に、三つのグループに分けて 12 語を分析した結果、増加傾向係数の日韓比較分析からは、外来語の特徴を把握することはできなかったが、現代の分析と類似する傾向が見受けられた。「日本：増加－韓国：変化無し」というパターンでは、韓国語の外来語受容の遅れと類義語の優先使用という特徴が浮かび上がる。その一方で、「韓国：増加－日本：減少(やや減少)・変化無し」というパターンは、特定の分野における韓国語の外来語の増加が主要因であり、日本語の外来語使用に目立った特徴は見られないという結果が得られた。

6 章　類義語と品詞の観点から見た日韓外来語の特徴

6.1　本章の目的

6 章の目的は、3 章と 5 章で明らかになった現代の日韓外来語の相違と変遷を、類義語との関係と品詞特徴の 2 点に焦点を当てて深堀りし、各特徴ごとに語彙の変遷過程を詳細に分析・考察することである。これにより、日韓の外来語の特徴とその進化のパターンをより具体的に理解することを目指す。

3 章では、日韓間で外来語の使用頻度に相違が見られる類型の分析を行い、日本語においては動詞性を持つ外来語が多く見られ、「する」を付けて動詞として活用される外来語が多いこと、また、韓国語においては、類義語との関係によって外来語の使用が比較的に低いことを確認した。また、5 章では、増加パターンを基準に、12 語を分析した結果、韓国語の類義語の優先使用という特徴を把握した。

そこで、本章では、①類義語との関係、②品詞の特徴に焦点をあて、詳細に分析することで日韓の外来語の特徴とその進化のパターンを明らかにする。

6.2 類義語との関係

本節では類義語と外来語との関係について考察する。この関係性には二つの特徴が存在する。第 3 章で述べたように、一つ目の特徴は、韓国語において「ケース」「スペース」「リード」「ムード」といった外来語が使用されているが、類義語を優先する傾向により、これらは低頻度の外来語に分類される点である。二つ目の特徴は、「サッカー」「バスケットボール」「コンビニ」「リストラ」「プレッシャー」といった用語が韓国語で外来語として受容されず、類義語の使用が継続されているため、韓国語で出現しない外来語である点である。これらの点について、以下で詳しく取り上げる。

6.2.1　韓国語で低頻度の外来語の場合

外来語が韓国語で使用されているものの、類義語を優先する傾向がある「ケース」「スペース」「リード」「ムード」について検討する。ここで、「ケース」「スペース」「リード」は 3 章の JH-KL（日本語－高頻度、韓国語－低頻度）の類型に分類され、「ムード」は JO-KN（日本語－有り、韓国語－無し）類型に属する。特に、「ケース」は金(2011)の研究で日本語で基本語化していると指摘されており、「スペース」については、黄(2023)でその類義語との比較分析を行い、類義語との関係性に関する特徴を明らかにしたため、これらの研究を基に、次項で「ケース」と「スペース」を中心に分析を進める。

以下に、韓国新聞における各語の出現度数と出現率を示す。全体の推移を把握する際には、1 万字当たりの出現率を算出してが、個別の語における出現率は、「100 万字当たりの外来語の出現率(出現度数/総文字数×10^6)」を求めてを示した。

表 25　韓国語における各語の出現度数と出現率

	韓国語	1945	1955	1965	1975	1985	1995	2005	2015
1	케이스(ケース)	0	4	22	6	8	5	5	3
	出現率	0.00	4.77	29.08	4.53	6.09	1.86	2.19	1.14
2	스페이스(スペース)	0	0	1	1	0	1	18	0
	出現率	0.00	0.00	1.32	0.75	0.00	0.37	7.88	0.00
3	리드(リード)	0	7	18	0	0	4	5	7
	出現率	0.00	8.34	23.79	0.00	0.00	1.49	2.19	2.66
4	무드(ムード)	0	0	15	14	11	2	0	0
	出現率	0.00	0.00	19.83	10.57	8.37	0.74	0.00	0.00

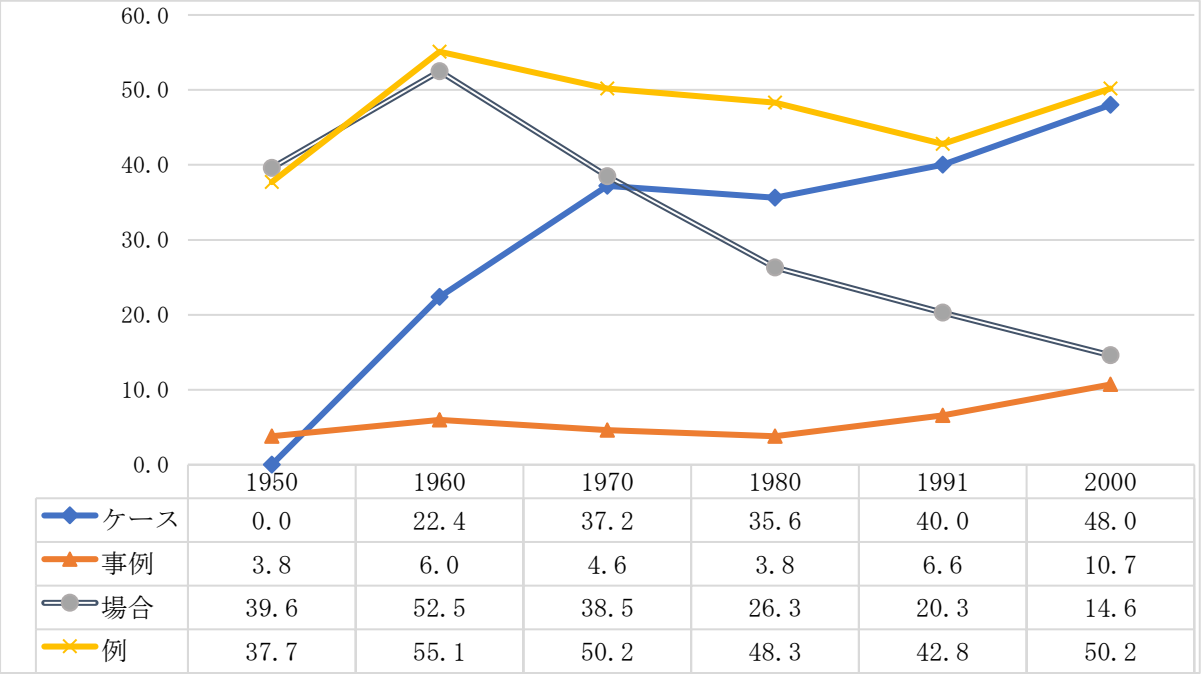
表 26　日本語における各語の出現度数と出現率

	日本語	金（2011）						独自コーパス		
		1950	1960	1970	1980	1991	2000	2000	2010	2020
1	ケース	1	31	96	77	99	113	206	160	153
	出現率	1.88	26.70	44.58	36.12	54.30	48.44	53.79	54.40	62.11
2	スペース	0	1	10	15	16	38	78	43	49
	出現率	0	0.86	4.64	7.04	8.78	16.29	20.37	14.62	19.89
3	リード	2	33	15	38	14	51	74	48	36
	出現率	3.77	28.42	6.97	17.82	7.68	21.86	19.32	16.32	14.61
4	ムード	0	14	58	57	26	40	61	31	12
	出現率	0	12.06	26.94	26.74	14.26	17.15	15.93	10.54	4.87

6.2.2　ケース

6.2.2.1　日本語

まず、事例・例を意味する「ケース」を見ていきたい。金(2011)の研究によれば、日本語における「ケース」の使用は 1950 年から確認できる。特に 1960 年に使用が急増した後、多少の減少や増加を繰り返しながらも、全体としては高頻度で使用され続けていることが明らかとなる。また、類義語として、「事例」「例」「場合」を取り上げ比較を通して、新聞の中での「ケース」の使用が増加していることを指摘したが、その内容を示すと以下のようである。



	1950	1960	1970	1980	1991	2000
ケース	0.0	22.4	37.2	35.6	40.0	48.0
事例	3.8	6.0	4.6	3.8	6.6	10.7
場合	39.6	52.5	38.5	26.3	20.3	14.6
例	37.7	55.1	50.2	48.3	42.8	50.2

図 24　金(2011)のデータによる「ケース」とその類義語の推移(p. 108)

図 24 を見ると、外来語の「ケース」の使用が戦後から急激に増加していることが分かる。この増加率は、類義語である「場合」や「事例」を上回っている。金(2011)の研究によれば、「ケース」とその類義語との関係性について用法や形式に焦点を当てた分析を行った。その結果、「ケース」の連体修飾節構造としての使用が増加し、他の類義語と比較しても、連体修飾節構造での使用が最も多いことが確認された。これにより、「ケース」は新聞語彙の中で基本語としての地位を確立していると言う。

> 「ケース」が、20 世紀末の新聞文章において、連体修飾節構造における客観的同格連体名詞という形式（用法）において最も多用されていることを確認した上で、より具体的には、「（すでに起こった）良くないコトガラ（＝ケース）が多い／有る）」という表現に、類義語である「事例」「例」「場合」よりも明らかに多く用いられている、ということを見出した。(金, 2011、p. 106)

6.2.2.2　韓国語

一方、韓国語においては、日本語の「ケース」とは異なる傾向を見せる。まず、用例から確認すると、1955 年に法律に関わる事例や事件を示す用例から使用され始める。

(13)　요즘 하나의 테스트 케이스[case]로서 그 귀결이 주목되어 오던 세칭 抱川按手祈禱事件…（昨今、一つのテストケースとしてその帰結が注目されていた抱川按手祈禱事件…）【社会_551203】

(14) 非單 이 케이스[case]뿐만아니라 乙未한해에는 高級將校나 그 家族들의 不美로운 所行이 … (非単このケースだけでなく、乙未年には高級将校やその家族たちの不美しい所行が…) 【政治_551229】

1965年になると、このような法律関連の用例を含め、スポーツや文化(芸術)、政治や経済といった様々なテーマでの使用が確認でき、出現率も増加することが分かる。

(15) 나는 작가가 매우 매력적으로 다듬어진 필치로 그린 그와 같은 케이스[case]자체를 탓하려는 것이 아니다 (私は、作家が非常に魅力的に洗練された筆致で描いた、そのようなケース自体を責めるつもりはない。) 【文化_651211】

(16) 한편 초청케이스[case]로는 6년 4월에 20일간의 체재로 자유중국 남자배구팀… (一方、招待ケースとしては、6年4月に20日間の滞在で、自由中国男子バレーボールチーム…) 【スポーツ_651214】

(17) 製乗用自動車1백대를 부속품 導入케이스[case]로 해서 그나마 2백50%의 관세를 물지 않고도… (製乗用自動車1百台を付属品導入ケースとして、それこそ2百50%の関税をかけずに…) 【経済_651209】

しかし、1965年以降は出現率が低くなり、現代に入ると、ほとんど使わない語になる。また、1975年と1985年には、「モデルケース」「示範ケース」「政治資金として使用された初ケース」など「N+ケース」の形で多く使用され、日本語のような連体修飾節構造の用例も確認できるが、非常に少ない。

表27　東亜日報における「케이스(ケース)」の前項目共起情報

年度	用例 ［韓国語(日本語訳)］
1955	테스트(テスト)、모델(モデル)、이(この)、이와 같은(このような)
1965	첫(初)、모델(モデル)、부속품 도입(付属品導入)、초청(招待)、자동(自動)、200만원(200万ウォン)、드문(珍しい)、그와 같은(そのような)
1975	개별(個別)、하나의(一つの)、극소수의(極少数の)、표결에 붙인(表決に付けた)、반영한(繁栄した)
1985	첫(初)、모델(モデル)、시범(示範)、초청(招待)、대표적인(代表的な)、공존하는(共存する)、손을 든(手を挙げた)、보여준(見せた)
1995	첫(初)、시작한(始めた)、고려한(考慮した)、중용된(中庸した)
2005	첫(初)、모델(モデル)、시범(示範)
2015	최악의(最悪の)、육성한(育成した)

用例の数は少ないが、1945 年から 2015 年にかけての用例を検討すると、「事例」や「実例」としての「実際に起こった/起こる例」という意味での使用が確認できる。また、当初は複合語形式が主流であったが、1975 年から連体修飾節構造での使用も見られるようになっている。

(18) 섬유가 불황에 직면하면서 손을 든 케이스[case]다（繊維が不況に直面して降伏したケースだ）【経済_851223】

(19) 가장 빨리 정상급 전문경영인이 된 첫 케이스[case]로 재계에서 회자되고 있다 …(最も早くトップクラスの専門経営者になった最初のケースとして財界で話題になっている　)【経済_951207】

(20) 채권이 정치자금으로 쓰인 첫 케이스[case]라고 말했다.（債券が政治資金に使われた初ケースだと言う）【社会_051216】

しかし、出現率に基づく分析の結果、「事例」や「実例」としての「ケース」の使用は増えず、「ケース」を連体修飾節を受ける形で使用する例があるとしても、その用法が多用されているとは言い難い。この現象の背後には類義語の勢力があると推測できる。

韓国語の『標準国語大辞典』においては、「케이스(ケース)」は「어느 상황이나 사례(ある状況や事例)」として定義されている。また、『基本類義語辞典』では、「케이스(ケース)」の類義語として「사건(事件)」「사례(事例)」「상황(状況)」「실례(実例)」が挙げられている。「사건(事件)」は、金(2011)でも説明しているが、主に法律上の出来事や社会的に重大な出来事を意味するため、「ある状況や事例」という抽象的な意味よりも具体的な出来事を指し示すと考えられる。また、「상황(状況)」の場合は、日常的な状況から限られた事の状況までカバーできる広範囲の語であるため、新聞記事中で頻繁に使用される可能性があることや「실례(実例)」は出現頻度が極めて少ない。そこで、この研究では「사례(事例)」を「케이스(ケース)」類義語とみなし、それらの出現度数や出現率を確認した。出現率は、「100 万字当たりの外来語の出現率(出現度数/総文字数$\times 10^6$)」を求めてを示した。

表 28　韓国語における「케이스(ケース)」とその類義語の出現度数と出現率

	韓国語	1945	1955	1965	1975	1985	1995	2005	2015
1	ケース	0	4	22	6	8	5	5	3
	出現率	0.00	4.77	29.08	4.53	6.09	1.86	2.19	1.14
2	사례(事例)	0	0	1	32	51	106	163	198
	出現率	0.00	0.00	1.32	24.15	38.83	39.41	71.33	75.36

表 28 の出現率をグラフで示し、その変動を比較すると以下のようである。

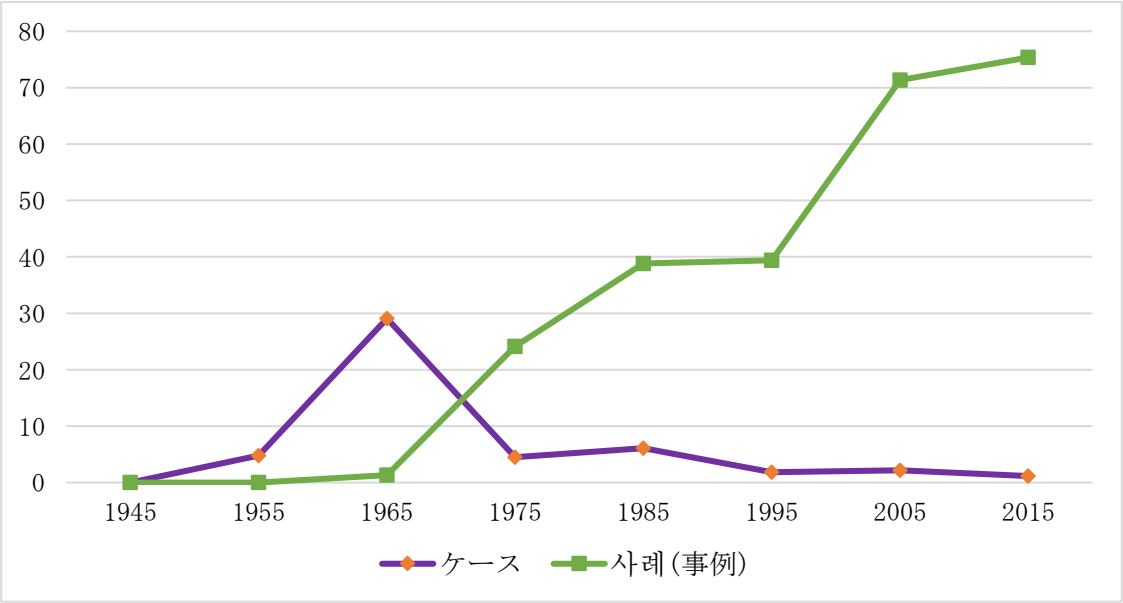


図 25「케이스(ケース)」とその類義語の出現率の推移

図 25 から、「케이스(ケース)」は、1965 年には増加しているものの、その後はほとんど使用されない語であることが分かる。

(21) 일부 재벌의 탈세 및 변칙 운영 등에 대한 구체적사례[sa-rye]는 一切 밝히지 않은 채…(一部の財閥の脱税や変則運営などに対する具体的な事例は一切明らかにされないまま…) 【経済_751210】

(22) 외야펜스에 머리를 부딪고 실신, 입원했던 사례[sa-rye]가 있다. (外野フェンスに頭をぶつけて失神、入院した事例がある) 【政治_751216】

(23) 일반投資者들에게 실망을 안겨주는 사례[sa-rye]가 속출했다. (一般投資家に失望を与える事例が相次いだ) 【経済_751226】

(24) 제한지역의 개발권을 둘러싼 중앙과 지방간 갈등의 대표적사례[sa-rye]가 될 것으로 지적되고 있다. (制限区域の開発権をめぐる中央と地方間の葛藤の代表的な事例になると指摘されている。) 【社会_951205】

(25) 洪할머니는 이러한 허가기준확대의 첫 사례[sa-rye]로 영주귀국허가를 받게된것이다. (このような許可基準拡大の初事例として、永住帰国の許可を受けることになっ。) 【政治_951208】

(26) 한 접시 뷔페의 모범사례[sa-rye]는 서울 송파구의 자생환경 운동모임인… (一皿ビュッフェの模範事例は、ソウル松坡区の自生環境運動グループである…) 【社会_951216】

(27) 상당히 진척된 상태에서 유네스코의 권유로 이를 중단한 사례[sa-rye]가 있다. (かなり進んだ状態で、ユネスコの勧告でこれを中止した事例がある。) 【社会_951217】

(28) 비용과 성과를 가늠해 볼 시범 사례[sa-rye]나 성공 사례[sa-rye]도 없는 고(高)위험 실험이다. (費用と成果を測る示範事例も成功事例もない高リスクの実験である) 【オピニオン_051228】

(29) 특히 첨단과학 분야나 유적을 발굴하는 고고학 분야에서 이 같은 사례[sa-rye]가 두드러졌다. (特に先端科学分野や遺跡を発掘する考古学分野でこのような事例が目立つ) 【総合_051217】

「사례(事例) : sa-rye」という用語の用例を調査した結果、「ケース」における「示範ケース」や「初ケース」といった用例は、韓国語でそれぞれ「시범사례(示範事例)」「첫 사례(初事例)」として確認される。

上記の用例を詳しく見ると、「事例」は「模範」や「成功」「具体的」「代表的」といった様々な語と共起することが確認できる。例えば、用例(26)では「模範」と、用例(28)では「成功」と共起している。また、用例(21)では「具体的」、用例(24)では「代表的」と共起する事例が示されている。さらに、上述の用例では示してないが、「失敗」「実践」「論争」「契約」「適用」といった多様な語との共起も確認される。金(2011)によれば、このような複合語形式に関しては、日本語でも「ケース」よりも「事例」や「例」との共起が特徴的であるとされる。このことから、日本語と韓国語における複合語形式での「事例」の使用には類似点があると考えられる。

しかしながら、用例(22)での「入院した」や(27)の「中止した」のような連体修飾節構造の形式は、日本語においては、類義語より外来語の「ケース」の勢力が優勢であるが(金, 2011)、韓国語においては、「케이스(ケース)」よりも類義語の「사례(事例)」が優勢であることが分かる。

まとめると、日本語の「ケース」は、類義語が存在するにもかかわらず、独自の地位を築き、その使用頻度を増している一方、韓国語の「케이스(ケース)」は、1965 年に一時的な使用増加が見られたものの、類義語との用法や形式における役割分担が固定化せず、結果として日本語とは対照的に低頻度の語としての位置を確保していると考えられる。

6.2.3 スペース

本節では、「スペース」を取り上げ、辞典の代表的な意味から類義語を確認して新聞における出現頻度を把握する。日本語の『日本国語大辞典』では「(1)空間。(2)特に、大きさを問題にした時の空間、平面。(3)印刷組版での空間。(4)地球の大気圏外の宇宙」と説明している。代表的な意味として「空間」

で定義することができる。また、韓国語の『高麗韓国語大辞典』では「어떤 장소에서 비어 있는 곳이나 자리. 또는 사용하지 않고 남은 공간. (ある場所で空いている場所や席。または使わずに残った空間)」として定義されている。この代表的な意味である『空間』を類義語として捉え、分析を進める。

6.2.3.1 日本語

表 29 金(2011)と現代日本新聞データからみる出現度数と出現率

日本語	金 (2011)						筆者		
	1950	1960	1970	1980	1991	2000	2000	2010	2020
スペース	0	1	10	15	16	38	78	43	49
出現率	0	0.86	4.64	7.04	8.78	16.29	20.37	14.62	19.89

日本語において「スペース」は、1960 年にその使用が確認され、その後、段々と増加していると言える。まず、「スペース」とその類義語である「空間」の用例を『昭和平成書き言葉コーパス』と現代のデータを利用して確認する。まず、SHC のデータから「スペース」と「空間」の出現度数を確認して SHC の収録語数を利用し、「100 万語当たりの頻度 (PMW) 」を算出する。100 万字語たりの頻度は、出現度数/総語数$\times 10^6$で算出した。

表 30 SHC の新聞と雑誌のデータからみる「スペース」とその類義語の出現度数と PMW

日本語	SHC(新聞・雑誌)								
	1949	1957	1965	1973	1981	1989	1997	2005	2013
スペース	0	2	7	16	11	28	17	30	33
空間	13	55	48	46	54	94	82	88	108
スペース	0.00	0.62	3.03	5.92	3.65	9.14	6.04	10.86	11.34
空間	11.45	16.99	20.81	17.01	17.91	30.69	29.13	31.86	37.12

SHC での「スペース」は、1957 年に「ソ連大衆の欲求に大きな地位とスペース」「大衆の生活は貧困だ。變り得る大きなスペース」のように、物理的な空間ではなく「欲求・地位・貧困」など「大衆の心の中」という心理的な 「スペース」の用例からその使用が始まる。

(30) クロセットを作るのなら、それ程スペースの節約にもならないし…【70M 文春 1965_01049】

(31) 新空港七〇〇万坪とするならば、横田だけではスペースが足りないということになる【70M 文春 1965_03029】

(32) 長方型をとっている。#特殊な地形上にあるわが国の交通は、道路スペースのとりようがないということからも…【70M 文春 1965_03029】

その後、1965 年になると、物理的な「スペース」の用例が多くなり、用例(30)から(32)のように、現代で見られる用例が出始める。1965 年以降は「空間」を意味する「スペース」の用例が徐々に増加していく。

(33) 施設の場所や展示スペースに制約されずに済むのがこうした方法の利点【80P 読売 1997_13005】

(34) 東京や大阪、兵庫は住居スペースが狭いうえに、賃貸住宅の家賃が高いことから下位になった。【80P 読売 1997_52126】

(35) 貯蔵施設内のドラム缶を整理し直し、貯蔵スペースを確保する【80P 読売 1997_92144】

(36) 「訪問客が室外にあふれる」「資料を置くスペースがない」などの苦情が出ていた。【2面_000105】

(37) 普通車なら苦労させられる駐車スペースでも、頭から一発で止められる。例えば歩道の端を少し細工する程度で、スペース効率のいい路上の横並び駐車も可能になる。【総合_000225】

(38) そんなユニークなスペースを東京・青山にオープンした。【特集_100925】

(39) しかし、収容施設のスペースや空調設備の有無などはまちまちだ。【家庭_101005】

(40) 感染リスクが比較的高いと考えられるトイレや休憩スペースについては…【政治_200505】

上述の用例によれば、単独形式の「スペース」は「駐車」「休憩」「置く」といった語と共起していることが確認される。これらは、具体的な場所を指すようにみえるが、現代において「スペース」と「空間」がどのような語と共起しているのかを確認し、その特徴を把握することとする。まず、現代の日本新聞データにおける「スペース」の前項目の共起語を確認した結果、以下のような傾向が見られる。

表 31　毎日新聞における 「スペース」の前項目の共起語情報

共起語（出現度数）
ワーキング(6)，駐車(5),フリー(4),限られる(4),展示(3)，収納(3)，置く(3),サイバー(2),アート(2)，陳列(2)，休憩(2),ファミリー(2)，専用(2),乗せる(2)，裏(2)，紙面(2),オープン(2),フォト(1)，会場(1)，分別管理(1)，喫茶(1)，業務(1)，おむつ替え(1)，ＣＤ用(1)，発熱者(1),避難所(1),避難者(1)，収容施設(1)，空き(1),共有(1),事務所(1),共用(1),居住(1),洗車(1),車１台(1),空車(1),パスを回す(1)，シュートする(1)，独特(1)，多目的(1)，残り(1)，不思議(1),ユニーク(1),広い(1)

表 31 から、「スペース」の共起語には ,「ワーキング・駐車・限られる・分別管理・業務・事務所・洗車」などの［活動や管理］や「フリー・収納・置く・アート・陳列・ファミリー・乗せる・紙面・フォト・おむつ替え・ＣＤ用」の［物品やその物品を保管］、「発熱者・避難所・避難者・収容施設」の［特殊な状況や緊急事態における人々の利用・行動］、「展示・会場・喫茶・オープン・多目的・広い」の［具体性を持つ空間の生成や提供の行為］を示す語が見られ、複合語形式や単独形式で頻繁に使用されていることが明らかである。一方、既存語である「空間」は戦後から頻繁に使用されており、特に外来語である「スペース」より出現度数が多いことから、何らかの特徴があると考えられるが、現代の日本新聞データにおける「空間」の前項目の共起語を確認して以下に示す。

表 32　毎日新聞における「空間」の前項目の共起語情報

共起語（出現度数）
仮想(11),宇宙(8),室内(5),大(4),歩行(4),公共(3),密閉(3),サイバー(3),象徴(3),生活(3),ネット(2),居住(2),共有(2),私的(2),静かな(2),ゆったりした(2),物語(2),計りしれない(1),果てしない(1),構成した(1),内省的な(1),多様な(1),累積した(1),夢(1),美しい(1),事実という(1),散策(1),上演(1),圧巻の(1),演技(1),芸術的(1),音楽(1),異(1),自然(1),静寂(1),住(1),集中できる(1),3 階(1)，４畳半ほど(1),キッチン(1),スケルトン(1),居室(1),軍事(1),内部(1),立体(1),半屋外(1),歩行者(1),小さな(1),小屋裏(1),収容(1),市場(1),駅(1),二界面(1),展示(1),浄水場(1),土間(1),縦方向(1),インテリア(1),このような(1),スキのない(1),つながる(1),バーチャルな(1),はりつめた(1),プライベートな(1),あふれる(1),濃密な(1),ある(1),清潔な(1),豊かな(1),同じ(1),快適な(2),楽しい(2),いい(1),強い(1),開放感のある(1),新たな(1),身近な(1),快適(1),閉じた(2),狭い(1),余った(1)

表 32 から、内容をみると「スペース」でも見られた［活動や管理］［物品やその物品を保管］［特殊な状況や緊急事態における人々の利用・行動］［具体性を持つ空間の生成や提供の行為］を示す共起語が確認できる。しかし、表 31 の「スペース」の共起語では見られなかった「快適な」「豊かな」「象徴」「仮想」「清潔な」「濃密な」といった概念的な表現がより多く見られ、また、「宇宙」「自然」「夢」「内部」といった語のように「スペース」よりも広範な場所を「空間」を用いて指していると考えられる。また、「スペース」の共起語は名詞が多く見られるが、「空間」では、その用法において多様な形容詞や副詞と共起する傾向がある。特に、「静かな」「ゆったりした」「計りしれない」「果てしない」といった形容詞は、空間の質感や感覚的な特徴を表現する。また、「構成した」「累積した」「スキのない」「つながる」のような動詞や形容動詞は、空間がどのように作られ、経験されるかを示す。そして、「清潔な」「豊かな」「快適な」「楽しい」「強い」「開放感のある」「新たな」「身近な」「小さな」といった語彙は、空間の具体的な特性や使い勝手を示す。これらの共起語は、「空間」という語が持つ多面的な意味や使用法を反映し、空間がどのように人々の感覚や活動に影響を与えるかを示唆する。

まとめると、日本語において、「空間」が一般に使用されていたが、「スペース」という外来語の導入後、「空間」が有していた意味の一部を「スペース」が表現することができ、外来語としての地位を確立したと考えられる。共起語の観点から見ると、「空間」の意味領域における「活動や管理」「物品やその物品を保管」「特殊な状況や緊急事態における人々の利用・行動」「具体性を持つ空間の生成や提供」という領域の使用を、外来語である「スペース」が兼用していると考えられる。

6.2.3.2　韓国語

この項では、戦後から現代に至るまでの韓国語における「스페이스(スペース)」の変遷過程を確認する。まず、量的推移を確認するため、「100 万字当たりの外来語の出現率(出現度数/総文字数×10^6)」を計算して出現率を算出して、以下に示す。

表 33　韓国語の「스페이스（スペース）」の 1945 年から 2015 年までの推移

스페이스	1945	1955	1965	1975	1985	1995	2005	2015
出現度数	0	0	1	1	0	5	11	0
出現率	0	0	1.32	0.75	0	1.86	4.81	0

韓国語の場合は、1965 年と 1975 年に各 1 例が確認されるものの、それ以外の用例はほとんど見られず、2000 年以前の出現はまれであると言えよう。

(41) 이 적은 스페이스[space]를 통해 조그만 목탁을 울려온… (この少ないスペースを通して小さな木鐸を鳴らしてきた…) 【社会_651230】

(42) 아마 活動予算도 제일 많은 것으로 아나 스페이스[space]탓인지 도서같은 것이 그 연수만큼은 구비 돼있지 못하다. (多分、活動予算も多いと考えられるが、スペースのせいか図書のようなものが、その経歴ほど用意されていない) 【社会_751213】

1975 年以降、「空間」を意味する上述のような用例は確認されなくなる。1995 年には「오픈 스페이스(オープンスペース)」と「사이버 스페이스(サイバースペース)」の用例が見られ、2005 年には新しい世代を代表する表現として「마이 스페이스(マイスペース)」が登場する。これらの用例は全て複合語形式であり、コンピュータやネットワークの普及とともに新たに生まれた概念としての「사이버 스페이스 (サイバースペース) 」や「마이 스페이스 (マイスペース) 」、都市計画や不動産の文脈で使用される「오픈 스페이스 (オープンスペース) 」が目立つ。これらの「スペース」は、「空間」や「場所」を指すものであるが、原語の「open space」や「my space」をハングルに転写した形での使用が主であり、単独形式での出現やほかの語と共起して空間を指す例は確認されない。この傾向は、既存の「공간(空間) : koŋgan」の意味を「스페이스(スペース)」が単体で担うのが困難であったことを示唆していると解釈できる。その結果、現代の新聞において「空間」の意味での「스페이스(スペース)」使用例はほぼ確認されないと言える。

表 34 韓国語における「스페이스(スペース)」と「공간(空間)」の出現度数と出現率

韓国語	1945	1955	1965	1975	1985	1995	2005	2015
스페이스 (スペース)	0	0	1	1	0	5	11	0
出現率	0	0	1.32	0.75	0	1.86	4.81	0
공간(空間)	0	0	2	8	38	132	168	205
出現率	0.00	0.00	2.64	6.04	28.93	49.07	73.51	78.03

一方、類義語である「공간(空間) : koŋgan」の使用状況を見ると、1965 年から継続して使用されており、「스페이스(スペース)」と比較すると使用頻度が極めて高いことが明らかである。

表 35　東亜日報における「공간(空間)」の前項目のコロケーション情報

韓国語用例-日本語訳（出現度数）
休息(14),解放(10),展示(8),室内(8),文化(7),代案(7),都市(6),避難(6),緑地(6),商業(4), 時(4),仮想(4),広い(4),狭い(3),遊び(3), 密閉された(3),韓国的(2),創作(2),疎通(2),保管する(2),韓屋(2),住居(2),宇宙(2),収納(2), 快適な(2),つなぐ(2),開かれた(2),もらった(2),わずかな(2),私の(2),書式(2),患者たちの(1),青い(1),フラット(1),探検の(1),展示館(1),作業(1),映画の(1),実験(1),市民(1),水景(1),洗濯機(1),西洋式(1),生活(1),ベランダ(1),美術(1),ドミトリー型(1),グビン(1),公演(1),リビングルーム(1),中央(1),4 坪(1),執務(1),体験(1),提供(1),勉強できる(1),講義(1),生産(1),拡張された(1),静かな(1),一部(1),隣接(1),遠近法(1),外部(1),歪んだ(1),こじんまりとした(1),新行儀の(1),空き(1),秘密の(1),合わせた(1),後部座席(1),走る(1),目が覚めた(1),溢れる(1),内部(1),内緒の(1),ロマンチック(1),基本(1),曲がりくねった(1), レース(1),のような(1),癒し(1),優れた(1),確認できる(1),解消する(1),特別な(1),定着(1),再編成される(1),認識(1),唯一(1),神聖な(1),小説の(1),想像力の(1),利用できる(1),複合(1),魅力的な(1),心を植え付ける(1),有意義な(1),独立した(1),異なる時間帯の(1),功績(1),3 次元的(1),サイバー(1),言語(2),テーマ(1) ,音楽(1)

表 35 は、韓国新聞における「공간(空間)」の検索結果を日本語に訳して示したものである。韓国語の新聞では、「스페이스(スペース)」が場所を指す単独形式として使用されるのは 1965 年と 1975 年のみであり、それ以外の期間では主に複合語形式で限定的に用例が見られる。それに対して、表 34 から「공간(空間)」は「展示」「休息」「収納」「4 坪」などの［具体性を持つ空間の生成や提供の行為］の複合語形式の共起語や「独立した」「利用できる」「魅力的な」「有意義な」といった連体修飾節構造形式での使用など、多岐にわたり使用されていることが分かる。

したがって、韓国語における「스페이스(スペース)」は、「오픈 스페이스(オープンスペース)」や「마이 스페이스(マイスペース)」のような特定の文脈での複合語形式に限定されていることが分かる。「공간(空間)」は日本語と同様に多様な文脈で使用されているが、「스페이스(スペース)」は一時期使用されたものの、「공간(空間)」の意味領域を分担することができず、類義語の存在により、広く受け入れられることはできなかったと考えられる。

6.2.3.3　「スペース」の日韓分析

まとめると、日本語における「スペース」は類義語である「空間」の意味の一部を担当する役割を果たし、外来語として日本語に定着し、安定して使用されていると言える。一方、韓国語においては、一時期は用例が確認できるものの、その使用率が増えていくことはできず、「공간(空間)」との意味用法

における役割分担も確立されておらず、外来語としてその勢力を確保することはできなかった。そのため、現代においては、特定の文脈における複合語形式のみに限定して使用される傾向が確認された。

以上、日本語では頻繁に使用される語に対して、韓国語においてはその使用頻度が極めて低い語の用例を確認した。日本語においては、類義語の意味用法の一部を担当して、外来語として勢力を増やしていく特徴が確認された。一方で、韓国語の特徴として、外来語が導入されたとしてもその使用頻度が高まることは少ない。例えば「케이스(ケース)」や「스페이스(スペース)」は、1965 年から 1975 年の間に日本語の用例と同様の方法で使用されていた。しかし、1985 年以降、これらの語彙の使用は減少し、「스페이스(スペース)」のような語は単語としてではなく、複合語の一部として特定の表現を示す形で使用されることが多くなった。このような特徴が、日韓の外来語の使用率に影響を与えていると考えられる。

6.2.4 韓国語で出現無しの外来語の場合

この項の語は、3 章の「J〇-KN」の通年度数順の上位 100 語の中「ボランティア」「トイレ」「リストラ」「ビール」「プレゼント」「プレッシャー」「アドバイス」「チャーター」「エリア」「リサイクル」など、日本語において高頻度の語であるが、韓国語においては見当たらない語である。

表 36　日本語-外来語・韓国語-類義語

順	日本語	韓国語＜漢字表記＞
1	ボランティア	자원봉사(자)＜自願奉仕者＞
2	トイレ	화장실＜化粧室＞
3	リストラ	구조조정＜構造調整＞
4	ビール	맥주＜麥酒＞
5	プレゼント	선물＜膳物＞
6	プレッシャー	압박/중압＜壓迫/重壓＞
7	アドバイス	조언＜助言＞
8	チャーター	전세＜傳貰＞
9	エリア	구역/지역＜區域/地域＞
10	リサイクル	재활용＜再活用＞

表 36 は、韓国語において新聞用例から確認できない語でありながら、韓国語の『標準国語大辞典』(1999)と『高麗大韓国語大辞典』(2009)に収録されていないため、類義語の使用を優先としていると推測される語である。

表 37　金(2011)と現代日本新聞データからみる出現度数

日本語	金(2011)-20 世紀後半						独自コーパス-現代		
	1950	1960	1970	1980	1991	2000	2000	2010	2020
ボランティア	0	0	3	7	29	117	251	54	63
トイレ	0	1	10	11	22	71	108	35	52
リストラ	0	0	0	0	0	67	97	16	2
ビール	1	36	29	39	34	39	58	40	16
プレゼント	0	4	15	18	10	40	94	64	31
プレッシャー	0	0	0	5	3	24	28	32	27
アドバイス	0	0	9	16	17	30	46	27	26
チャーター	0	1	4	3	14	37	42	7	12
エリア	0	0	1	2	7	29	44	36	37
リサイクル	0	0	0	0	25	44	76	8	5

表 37 は、戦後から現在にかけての各語の出現度数を示している。「リストラ」「プレッシャー」「エリア」「リサイクル」は現代に入ってからの出現頻度が高まる傾向にあり、残りの語は早い時期から日本語として用いられていたことが伺える。

「リストラ」に関して、辞典の記述や『分類語彙表』を参照し、同じ項目に属する語を基に類義語として「人員整理」「整理解雇」「人減らし」が考えられる。これら 3 つの語の使用頻度を SHC および日本新聞データをもとに確認すると、次のような結果が得られる。

表 38　SHC の新聞と雑誌のデータからみる各語の出現度数と PMW

日本語	SHC(新聞・雑誌のみ)								
	1949	1957	1965	1973	1981	1989	1997	2005	2013
リストラ	0	0	0	0	0	0	71	71	35
人員整理	27	4	3	2	11	3	4	5	3
整理解雇	0	0	0	0	0	0	0	0	2
人減らし	0	0	0	0	0	0	0	1	1
リストラ	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	25.22	25.70	12.03
人員整理	23.78	1.24	1.30	0.74	3.65	0.98	1.42	1.81	1.03
整理解雇	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.69
人減らし	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.36	0.34

表 38 のように、「リストラ」の類義語である「人員整理」「整理解雇」「人減らし」の中、「人員整理」に関しては、1949 年からの用例が確認できたが、段々少なくなる傾向を見せる。「整理解雇」「人減らし」の場合、SHC では見当たらず、現代において 2 例出現しているものの、その頻度は非常に少ないことが分かる。

一方、韓国語では、「リストラ:restructuring」という語彙自体がほとんど使用されていないのに対し、「구조조정(構造調整)」や「정리해고(整理解雇)」といった類義語が一般的に使用されていることが確認される。新聞用例によれば、「구조조정(構造調整)」は 1985 年から 2015 年までの間に 308 例が、「정리해고(整理解雇)」は 2015 年に 19 例が確認される。このデータから、韓国語では外来語「リストラ」よりも類義語「구조조정(構造調整)」や「정리해고(整理解雇)」の使用が優先されていることが伺える。

このような特徴は、「トイレ」からも確認できる。日本語において「トイレ」は、1970 年から使用頻度が高くなる語である。上記と同じ方法で「トイレ」の類義語として「化粧室」「お手洗い」「便所」が考えられる。これらの語の出現頻度を確認すると以下のようである。

表 39　SHC の新聞と雑誌のデータからみる各語の出現度数と PMW

日本語	SHC(新聞・雑誌のみ)								
	1949	1957	1965	1973	1981	1989	1997	2005	2013
トイレ	0	1	41	37	64	63	65	89	100
便所	17	46	59	44	19	17	16	44	7
お手洗い	0	1	0	0	1	0	1	3	0
化粧室	0	1	0	1	1	2	0	1	0
トイレ	0.00	0.31	17.77	13.68	21.22	20.57	23.09	32.22	34.37
便所	14.97	14.21	25.57	16.27	6.30	5.55	5.68	15.93	2.41
お手洗い	0.00	0.31	0.00	0.00	0.33	0.00	0.36	1.09	0.00
化粧室	0.00	0.31	0.00	0.37	0.33	0.65	0.00	0.36	0.00

日本語においては、戦後直後に「便所」という語の使用頻度が高かったが、1965 年から外来語である「トイレ」の出現頻度が高くなり、1981 年以降は「便所」の頻度が徐々に減少してきた。2005 年に 44 例出現するのは、データの中で「和式便所」という用例が多く出現したためであり、それ以降の出現は確認されない。また、「お手洗い」や「化粧室」といった語は年間を通して確認されるが、その頻度は非常に少ない。特に現代では、これらの語の使用例は見当たらない。この傾向から、日本語において「便所」の使用が減少し、「トイレ」への言い換えが生じた可能性が考えられる。

表 40　韓国新聞データからみる「화장실(化粧室)や변소(便所)」の出現度数と出現率

韓国語	1945	1955	1965	1975	1985	1995	2005	2015
화장실(化粧室)	0	1	0	0	2	26	27	40
出現率	0.00	1.19	0.00	0.00	1.52	9.67	11.81	15.22
변소(便所)	1	3	2	14	0	1	0	1
出現率	3.23	3.58	2.64	10.57	0.00	0.37	0.00	0.38

一方、韓国語においては、「トイレ」といった外来語の使用は見当たらず、同じ類義語の中での勢力が変化していく傾向が確認できる。

まとめると、日本語は、類義語の「便所」から外来語の「トイレ」へ、韓国語は、類義語の「便所」から類義語の「化粧室」へという特徴が確認できる。日本語においては、類義語の勢力を奪い、外来語が成長していくパターンが確認できる反面、韓国語においては、外来語は受容せず、類義語同士で競争すると言う特徴が見られると言える。

また、3 章で確認したスポーツ用語の中、「サッカー」の使用状況を見ていきたい。『日本国語大辞典』によれば、日本語において「蹴球」は収録語であり、[フットボールのこと。ア式蹴球（サッカー）・ラ式蹴球（ラグビーフットボール）などがあるが、一般的にはア式蹴球を指す]という意味が示されている。これにもかかわらず、現代の日本新聞では「蹴球」という語の出現は確認されない。

表 41　金(2011)と現代日本新聞データからみる「サッカー」の出現度数と出現率

日本語	金(2011)						独自コーパス		
	1950	1960	1970	1980	1991	2000	2000	2010	2020
サッカー	2	19	63	43	14	320	386	534	359
出現率	3.77	16.36	29.26	20.17	7.68	137.17	100.79	181.55	145.73

『昭和平成書き言葉コーパス(以下、SHC)』の用例によれば、1965 年の雑誌で「蹴球」の使用例は 1 例のみ確認されただけで、「サッカー」に関しては、金(2011)のデータと筆者の調査によると、1950 年から 1960 年にある程度の使用頻度が見られ、特に現代に入るとその使用が増加したことが分かる。これらのデータを基に、日本語において外来語である「サッカー」が一般的に定着して使用されていることが確認される。

表 42　韓国新聞データからみる「축구(蹴球)」の出現度数と出現率

韓国語	1945	1955	1965	1975	1985	1995	2005	2015
축구(蹴球)	2	11	46	121	163	234	363	235
出現率	6.46	13.11	60.80	91.33	124.10	86.99	158.84	89.45

一方、韓国語における状況は異なる。「サッカー」を韓国語に転写すると「사커」となるが、これは辞典にも新聞の用例にも見当たらない。しかしながら、類義語としての「축구(蹴球)」は1945年以降も一貫して使用されていることが確認される。日本語においては「蹴球」という語も存在し、雑誌で1例の使用が確認されるものの、外来語である「サッカー」のみその使用が拡大している。この事実から、日本語は、外来語と類義語との間で意味分担が生じたり、言い換えが生じ外来語の頻度が高くなる場合が多い一方、韓国語は外来語を受け入れない可能性や外来語よりも類義語を重視する傾向が強いと言える。

6.3　品詞の特徴

本節では品詞の特徴に焦点を当てて分析を行う。林(2021)の研究によれば、日本語の外来語が複数の品詞で使用される傾向があることが示されている。3 章の分析では、現代の外来語の中で「チェック」「ミス(mistake)」「マーク」「コメント」「アピール」「スタート」「カット」「カバー」「タッチ」などの語が名詞として使用される一方で、具体的な行動を表す意味を持つことも確認された。これらの語は、韓国語においては低頻度であり、日本語では名詞用法と「外来語+する」という動詞用法の両方で使用されている。3 章で触れられなかった語であるが、日韓とも高頻度語彙と使用される語である「イメージ」においても、日本語は複数の品詞を使用する反面、韓国語は名詞用法のみを使用するという特徴が確認できた。

そこで、本節では、日韓とも高頻度の語である「イメージ」と日韓で頻度の差が見られる「アピール」「スタート」に注目して、品詞の観点から分析を進める。本研究では、分析対象として、『分類語彙表』の体の類に該当する名詞の外来語を採用している。日韓比較分析では、日本語の「する」と共起する「する動詞」としての用例と、韓国語の場合は、Noh(2012)によれば、韓国語においては外来語と「하다(HADA)」が結合し、動詞や形容詞として使用されることが指摘されている点で、「外来語+하다(hada)」と共起する「하다(hada)動詞」としての用例を収集し、名詞用法と動詞用法といった品詞使用の違いを中心に分析を進める。また、品詞の分析においては、現代の用例を通じてその特徴を把握する。

表 43　金(2011)と現代日本新聞データからみる各語の出現度数と出現率

日本語	金（2011）						独自コーパス		
	1950	1960	1970	1980	1991	2000	2000	2010	2020
イメージ	0	2	52	53	51	121	206	128	106
出現率	0	1.72	24.15	24.86	27.97	51.87	53.79	43.52	43.03
アピール	0	13	7	23	42	72	97	85	81
出現率	0	11.19	3.25	10.79	23.04	30.86	25.33	28.90	32.88
スタート	5	54	92	113	86	157	269	165	103
出現率	9.42	46.50	42.73	53.00	47.17	67.30	70.24	56.10	41.81

日本語では、「イメージ」「アピール」「スタート」といった語は頻繁に使用される。20 世紀後半から増加傾向にあることが確認され、現代では a ランクに位置する語であることから、日本語において、戦後から現代に至るまで高頻度で使用される語であることが分かる。

表 44　韓国新聞データからみる各語の出現度数と出現率

韓国語	1945	1955	1965	1975	1985	1995	2005	2015
이미지(イメージ)	0	0	1	16	26	191	156	145
出現率	0.00	0.00	1.32	12.08	19.80	71.01	68.26	55.19
어필(アピール)	0	0	2	0	0	4	2	4
出現率	0.00	0.00	2.64	0.00	0.00	1.49	0.88	1.52
스타트(スタート)	0	0	6	0	0	1	1	21
出現率	0.00	0.00	7.93	0.00	0.00	0.37	0.44	7.99

韓国語において「이미지(イメージ)」の使用頻度は次第に高まっているが、「어필(アピール)」や「스타트(スタート)」のような語の使用頻度は非常に低い。特に「어필(アピール)」や「스타트(スタート)」は韓国語で単一品詞として使用されることが多く、類義語との関係にまたがる特徴を持つ。これに対し、日本語ではこれらの語が名詞としても動詞としても使用され、高頻度で登場する。この特徴に基づき、本節では「イメージ」「 アピール」「スタート」に焦点を当てる。

6.3.1 「アピール」と「アピールする」

表 45 新聞データからみる日韓における「アピール」と「アピールする」の出現度数

日本語	2000	2010	2020
アピール	25	21	26
アピール+する	72	64	55
合計	97	85	81
出現率	25.33	28.90	32.88
韓国語	**1995**	**2005**	**2015**
어필(アピール)			
어필(アピール)+HADA	4	2	4
合計	4	2	4
出現率	1.49	0.88	1.52

日本語における「アピール」の用法を考察すると、「アピール+する」という形で用いられることが多い。基本的な意味を把握するため、『デジタル大辞泉』を用いて日本語の辞典における「アピール」の意味を確認した。辞典の記述によると、「1.人々や世論などに広く訴えること。また、その訴え。2.人々に受け入れられること。また、人を引きつける魅力。」として収録されている。

(43) 地方自治体によって異なるものなのだ、ということを強烈に国民にアピールしたことです【文化_000325】

(44) 行政の無駄や天下りの実態を洗い出すことで改革姿勢をアピールする狙いだ【特別_000125】

(45) 夏（以降の主要大会）に向けて順調なところを見せられたとアピールした 【運動_100605】

(46) 鳩山首相は「民主党らしさ」のアピールに政権浮揚を託そうとしている【政治_100325】

(47) 米国の指導力のアピールを狙ったとみられる【国際_100325】

用例(43)から(45)までは動詞用法、(46)(47)は名詞用法として使用されたものである。新聞における日本語の「アピール」は、名詞的用法や動詞的用法の両方で、人々や世論に訴えるという意味で使用されることが確認される。辞典の記述や用例をみると、名詞的用法としての「アピール」は、[訴え]そのものを表現することができるが、「アピール」という行為が、特定のメッセージや価値を強調し、他者に伝えるという動的な性質を内在しているため、動詞的用法としての「アピールする」の例がより多い

と考えらら る。新聞というメディアの文脈では、そういった公的な場面で政府や組織の主張や政策を強調するために、「アピールする」という動詞的用法が頻繁に採用される可能性がある。

一方、韓国語における「어필(アピール)」は、新聞の中における使用頻度は非常に少ないが、使用されている用法をみると、韓国語では、全ての用例が「어필(アピール)하다(HADA)」の動詞的用法として使用されている特徴がある。

(49) 특히 청소년들**에게** 크게 어필[appeal]하면서 꾸준히 순위권에 오르고 있다(特に青少年**に**大きくアピールし、着実にランキングにランクインしている)【文化_951231】

(50) 드라마 이상의 무언가를 대중**에게** 어필[appeal]했다는 평을 얻었다.(ドラマ以上の何かを大衆**に**アピールしたという評価を得た) 【文化_051228】

(51) 친환경 이미지를 소비자**에게** 어필[appeal]할 수 있는 장점이 있다(環境にやさしいイメージを消費者**に**アピールできるメリットがある)【経済_151223】

(52) 국내 뮤지컬 시장에서 관객**에게** 어필[appeal]할 수 있는(国内ミュージカル市場で観客**に**アピールできるような)【文化_151229】

韓国語における「アピール」に関する用例を考察すると、日本語でも多く見られる「～에게 어필하다(～にアピールする)」という文型が基本であることが分かる。この用法は政府や組織といった公的な場面よりも、ドラマやミュージカルといった文化的な分野での使用が目立つ。

『標準国語大辞典』や『高麗大韓国語大辞典』における意味の記述を参照すると、[흥미를 불러일으키거나 마음을 끎(興味を引いたり心を動かす)]という定義が示されている。新聞で見られる[흥미를 불러일으키거나 마음을 끎(興味を引いたり心を動かす)]という意味は、[引く・動かす]という[行為]を指しているため、このような動詞的性格により、韓国語の中では「어필(アピール)하다(HADA)」のみが使用されると考えられる。

日韓とも使用されている意味に動詞的性格があるにもかかわらず、日本語では名詞と動詞の両方として使用されることが多く、韓国語では、そもそも使用頻度が非常に少なく出現する全ての用例が動詞の形で使用されるという特徴が確認できた。

6.3.2 「スタート」と「スタートする」

表 46 新聞データからみる日韓における「スタート」と「スタートする」の出現度数

日本語	2000	2010	2020
スタート	166	107	66
スタート+する	103	58	37
合計	269	165	103
出現率	70.24	56.10	41.81
韓国語	**1995**	**2005**	**2015**
스타트(スタート)	1	1	19
스타트(スタート)+HADA			2
合計	1	1	21
出現率	0.37	0.44	7.99

日本語における「スタート」の使用用法を考察すると、主に「スタート」の名詞的用法の使用が多いが、「スタートする」といった動詞的用法の使用も多いことが確認できる。前節と同様に『デジタル大辞泉』を用いて日本語の辞典の記述を見ると、「1. 新しく始まること。また、始めること。出発。発足。2.出発点。スタートライン」として収録されている。また、田中ほか（2014）でも、スタートは「始まり」「開始」「発足」「出発」「発走」の意味として使用されていると説明している。

(53) ２１世紀へ向け新たに発展するスタートの年にしたい。【3 面_000105】

(54) 決勝ではスタートから抜け出し、中盤から独走【運動_100225】

(55) 大学時代の友人に連絡を取り合って、救援活動をスタートした【特集_000205】

(56) 日本テレビの「ワンモア・チャンネル」として今年１２月１日スタートする。【総合_000205】

(57) ２６日にスタートする国内聖火リレーは感染症対策を徹底するとした【社会_200305】

用例(53)(54)は名詞用法、(55)から(57)までは動詞用法で使用された用例である。これらの用例をみると、新しいプロジェクトや活動が開始される際の初期の時点を示したりスポーツ関連の記事でレースや試合の開始時点、または開始されることを示すなど、総合・社会・運動・政治などの多様な場面において「スタート」がよく使用されていることが確認できる。日本語において、[特定の事象や行為が開

始される初期の状態や時点]を示す名詞的用法や[何らかの活動や行為が開始されること]を指す動詞的用法の両方が、新聞の中で多く出現していることが確認できる。

一方、韓国語における「스타트(スタート)」は、新聞の中における使用頻度は非常に少ないが、使用されている用法をみると、ほとんどの用例が「스타트(スタート)」の名詞的用法として使用され、2015年に2例のみ「스타트(スタート)하다(HADA)」の動詞的用法として使用されていることが分かる。

(58) 스타트[start]를 끊으려는 순간(スタートを切ろうとした瞬間)【文化_951205】

(59) 남자 자유형 1500m 결승전에서 스타트[start]부터 줄곧 선두로 나섰다(男子フリースタイル1500m決勝でスタートからずっと先頭に立つ)【スポーツ_051227】

(60) 남자 봅슬레이 2인승 경기에서 힘차게 스타트[start]하고 있다(男子ボブスレー2人乗りで力強くスタートしている)【スポーツ_151207】

(61) 떨어지는 순간 제일 먼저 스타트[start]해야 첫 바퀴에 1등을 노릴 수 있었기 때문이다 (落ちた瞬間に一番最初にスタートしなければ、1周目に1位を狙えなかったからである)【スポーツ_151222】

韓国語の「스타트(スタート」の使用に関する用例分析から、使用されるテーマに特徴が確認される。意味の面では日本語と類似しているが、韓国語ではスポーツでの使用が多いことや特定の場面に限られていることが明らかである。例えば、1995年や2005年の2例、2015年の6例は全てスポーツ関連のテーマからの出現であり、用例(60)の出典は文化面であるが、内容はスポーツ記事である。さらに、2015年の用例21例の中で、スポーツ関連の記事では動詞的用法が2例、名詞的用法が4例を占める一方で、残りの 15 例は「スタート業」という複合語の中で使用されていた。「スタート業」は「起業したばかりの会社」を意味し「開始」の意味を内包するが、複合語形式での使用であるため、他の用例と同一視はできない。

この分析から、韓国語における「スタート」の使用は日本語に比べて限定的であり、特にスポーツ関連の記事でのみ使用されるという特徴があることが分かる。

6.3.3 「イメージ」と「イメージする」

6.3.3.1 日本語

本節では、日韓とも 20 世紀後半から現代にかけ高頻度として使用されている「イメージ」とその動詞用法である「イメージする」を考察する。考察の際には、現代の用例から分析を行う。

表 47　現代日本新聞データにおける「イメージ」「イメージする」の出現度数

日本語	独自コーパス		
	2000	2010	2020
イメージ	196	108	96
イメージする	10	20	10
合計	206	128	106
出現率	53.79	43.52	43.03

表 47 は、「イメージ」と「イメージ」の後項目に「する」が共起する用例を数えて示したものである。基本的に、日本語において「イメージ」は、名詞として使用される場合が多いが、「イメージする」という動詞用法も少ないわけではない。

(62)　パサついておいしくないというイメージが強く、日本ではあまり好まれないようです【家庭_000405】

(63)　予算委員会でこうした議論がされること自体、イメージがよいとは思われないと嘆いてみせた【社会_000225】

(64)　相撲協会は、解雇という対外的にイメージの悪い処分ではなく…【運動_100205】

(65)　今後の展開次第ではブランドイメージが低下する懸念もある【運動_100205】

まず、名詞用法をみると、田中ほか（2014）によると、「イメージ」の最も多く使用される意味は「印象」「既成概念」であり、ほかに「姿」「構想」「映像」「画像」「全体像」があると説明している。新聞用例を検討すると、名詞の「イメージ」は「印象」や「既成概念」の意味として一般に使用されていることが分かる。

(66)　「IT, IT」と盛んに言う森喜朗首相のイメージする「モデル国家」なのか、と思ったりする【社会_000925】

(67)　「僕が１５歳だった時と、今の状況、このドラマがイメージするものがすごく近いと感じたので、これなら撮れるかなと思った」と言う【芸能_001225】

(68)　木の葉をイメージした腰巻きをつけた衣装のデザインなどが…【運動_100125】

(69)　動物や植物をイメージして描いた生命感あふれる近作を中心に、初期の作品も展示【芸能_100825】

(70)　夏の米ハワイをイメージしマウイ島のハナ村にちなんで名付けた施設名を、そのままチーム名にした。【社会_201025】

次に、「イメージする」の動詞用法を見ると、単に「思い描く」や「連想する」として理解されるだけでなく、具体的な結果や状況を伴って使われることが多く見られる。新聞用例から最も多く見られるのは[イメージした後の具体的な結果や状態]を示す用法である。

表 48　現代日本新聞データにおける「イメージ+する」の語句例

日本語	2000	2010	2020
イメージ+する	2	2	3
～をイメージする	**5**	**17**	**7**
～からイメージする	1	1	0
～がイメージする	1	0	0
～のイメージする	1	0	0

表 48 は、現代における日本新聞データからの用例を分類したものである。ここからも分かるように、新聞用例においては、「～をイメージする」という文型が特に多く確認される。田中ほか（2014）の研究によると、「イメージ」に続く「する」という動詞の場合、最も頻繁に使用される意味は「思い浮かべる」「思い描く」「連想する」「想像する」である。特に、「～を/からイメージする」という文型は、「イメージ」の元来の「思い描く」や「連想する」といった意味から発展し、「～を思い描いて表現する」という意味として捉えられると述べられている。

これを踏まえると、日本語における「イメージする」という動詞用法の基本的なニュアンスは、「思い描く」「連想する」であるが、「～をイメージする＋結果・状況」という形式では、その後の具体的な結果や状況を示しており、この場合の意味は「～を思い描いて表現した結果」として理解される。このように、日本語における「イメージ」は、基本的には名詞用法として使用されるが、「イメージする」の動詞用法に「思い描いて表現した結果」という意味用法を付与して、両方使用されていることが分かる。

6.2.3.2　韓国語

韓国語において「이미지(イメージ)」は、戦後から現代まで徐々に増加して高頻度として使用される語である。新聞用例からみると、基本的に全ての出現用例が名詞として使用されていることが分かる。

表 49　韓国新聞データにおける「이미지(イメージ)」の出現度数

韓国語	1995	2005	2015
이미지(イメージ)	191	156	145
이미지(イメージ)+HADA			
合計	191	156	145
出現率	71.01	68.26	55.19

その中で、「이미지(イメージ)HADA」の形ではないが、動詞用法として使用されていると考えられる用例として、1995 年に 2 例や 2015 年に 1 例のみ確認できる。まず、名詞用法としての「이미지(イメージ)」の用例をみると以下のようである。

(71)　디자인에 자신 있는 차라는 이미지[image]를 심어주려 애썼다" 고말했다(デザインに自信のある車というイメージを植え付けようと努力した」と語った)【総合_051201】

(72)　마케팅이 브랜드 이미지[image]뿐 아니라 영업 실적에도 큰 영향을 끼치는 것(マーケティングがブランドイメージだけでなく、営業成績にも大きな影響を与えること)【総合_051201】

(73)　제니스 사를 인수했지만 이미지[image]를 개선하기에는 역부족이었다(ゼニス社を買収したが、イメージを改善するには力不足だった)【総合　051206】

(74)　성장동력 사업이 점차 구체화되면서 앞으로 그룹의 이미지[image]도 점차 바뀔 것으로 예상된다.（成長エンジン事業が徐々に具体化され、今後、グループのイメージも徐々に変化すると予想される)【経済_151204】

韓国語における「이미지(イメージ)」の用例を検討すると、日本語と同様に「印象」や「既成概念」の意味で使用されていることが確認される。一方、韓国語の「イメージ」の動詞用法に関しては、日本語の「イメージ」の動詞用法との違いが見られる。韓国新聞データから「이미지(イメージ)하다(HADA)」の用例を探索すると、韓国語でこの動詞用法は確認されない。少数であるが、類似の形式として「이미지(イメージ)+화(化)+하다(HADA)」が存在する。Jung(2013)の説明によれば、接尾辞「-화(化)」は、ある現象や状態への変化を示すものであると述べている。この点から、韓国語では「イメージ」という外来語は「하다(HADA)」と単純に結合して動詞を形成するのではなく、接尾辞「-화(化)」を介して現象や状態の変化の意味を持つ動詞形式を形成する傾向があると考えられる。

(75) 윤향란씨 개인전 보고 토기 등 이미지[image]화 “친근감” : 우리나라 작가들의 경우 그들이 비록 서양미술의 …작들은 주로 항아리나 토기 등 잊혀져가는 옛물건들**을** 심상적 **이미지**[image]화**했다**(ユン・ヒャンラン氏の個展を見て、土器などのイメージ化 「 親しみやすさ」 : 韓国の作家の場合、たとえ彼らが西洋美術の...作品は、主に壺や土器など、忘れられつつある古いもの**を**心象的**イメージ化した**)【文化_951216】

(76) 그림을 보고 사람들이 전율하는 것은 그것이 특정한 사태**를** **이미지**[image]화**한** 것이 아니라 인간 삶의 바닥을 정직하게 드러내주기 때문입니다(絵画を見て人々が震えるのは、それが特定の事態**をイメージ化した**ものではなく、人間の人生の底を正直に明らかにしてくれるからです)【文化_151214】

用例(75)と(76)を見ると、韓国語の「이미지(イメージ)+화(化)+하다(HADA)」の表現は[物や事象を特定の方法で心象的に表現または再現する]という意味合いで使用されていることが明らかである。具体的に、(75)の例においては、壺や土器といった忘れられつつある古いものを心象的に表現している。一方、(76)の例では、特定の事態を表現するのではなく、人間の生の真実を正直に表現する文脈で使われている。このように、韓国語の「이미지(イメージ)+화(化)+하다(HADA)」は、日本語の「～をイメージする＋結果・状況」という構文と意味的に一致し、日本語で確認された意味である「～を思い描いて表現した結果」として理解できる。まとめると、日本語における「イメージ」は、主に名詞用法として使用されるが、動詞用法として「イメージする」も確認できる。 特に新聞の文脈においては、「イメージする」が「～を思い描いて表現した結果」という意味で頻繁に用いられる。これに対して、韓国語の「이미지(イメージ)」は名詞用法のみであり、単独で「하다(HADA)」と結合して動詞的に活用することは困難である。動詞的性質を持たせる場合は、「화(化)」などの接尾辞を用いるが、新聞の用例ではこのような動詞用法の使用は稀である。

この節では、「アピール」「スタート」「イメージ」を取り上げ、日韓における外来語の品詞特徴を考察した。「アピール」「スタート」は日本語では高頻度語であり、動詞用法と名詞用法の両方で使用されるが、韓国語ではこれらの語が低頻度であり、単一品詞として使用される特徴がある。「イメージ」については、日韓ともに高頻度語彙であるが、日本語では複数品詞、韓国語では単一品詞が使用される。また、6.3 節の始まりのところで取り上げた「체크（チェック）」や「터치（タッチ）」でもこの傾向が確認できる。日本語では複数品詞が使用されるのに対し、韓国語では「체크（チェック）」では「하다(HADA)」の動詞用法、「터치（タッチ）」では名詞用法が優先されると言える。

このことから、韓国語においては使用頻度が増加しても品詞や用法が拡張するのは難しく 、一つの外来語に一つの品詞が付与される傾向が強い。これに対して、日本語では一つの外来語に複数の品詞が付与されるのが比較的自由である特徴が確認される。

6.4 まとめ

6 章では、3 章および 5 章で観察された日韓の外来語の特徴を類義語との関連性と品詞の特徴の二つの観点で分析し、戦後から現代に至る推移と用例を具体的に検証した。

この分析により、日本語においては、外来語が類義語と意味の分担をしながらも、外来語としての地位を保持し、言語内で定着していく過程が確認された。対照的に韓国語では、外来語が一時的に使用される場合があるものの、結局は類義語が優先され、その使用が類義語へと回帰する傾向が見られた。さらに、品詞に関して、日韓の外来語使用には顕著な差異が存在する。韓国語の外来語は限定された意味や文脈で使用されることが多く、動詞化することは困難であり、主に一つの品詞形態で使用される。それに対して日本語では、外来語がより広い意味で用いられ、動詞化を含む複数の品詞に渡ってその使用が可能であることが明らかになった。

7章　終章

本章では、各章で明確にした結果を整理して、7.2節で考察を行い、7.3節で研究課題と展望について述べる。

7.1　各章のまとめ

本研究は、日本語と韓国語の新聞コーパスに基づく計量的な分析を行うことで、両言語間の外来語の量的変遷とその差異を解明し、新聞で見られる外来語の意味用法の比較分析を行い、日韓外来語の言語特徴を考察することを目的とし、研究を進めた。

第2章では、「データベースの作成」の課題の達成のため、韓国の『東亜日報』と日本の『CD毎日新聞データ集』を用いて韓国新聞コーパスや日本新聞コーパスを作成した。まず、韓国新聞コーパスは、1945年12月から10年刻みで2015年12月まで、全体文字数12,145,775字の大規模のコーパスである。また、2000年以降の日韓比較のため、先行研究の研究方法を参考にし、現代日本新聞データを作成した。現代日本新聞データは、2000年、2010年、2020年の三つの年次の分であり、各年5日と25日の見出しと記事全文を収めた、全体文字数は 9,234,795 字でのコーパスを作成した。次いで、外来語の比較分析のため、テキスト処理、単位設定、形態素解析、頻度集計や意味分野分類の方法などといった語彙調査の手順について述べた。

第 3 章では、現代日韓外来語の出現率を算出し、その頻度の差を解明した。 通年度数の高いものから上位 200 語を選定し、その意味分野の特徴を分析した結果、日本語と韓国語の外来語は抽象的な意味分野での使用が類似している一方で、使用コンテキストの多様性において日本語が韓国語に比べて幅広いこと、また韓国語では人間活動に関連する外来語の使用が顕著であることが明らかとなった。さらに、日韓間の外来語使用における類型の差異を分析し、日本語では動詞性を持つ外来語、特に「する」を伴う動詞形態の外来語が多用されているのに対し、韓国語では、類義語の使用を優先する特徴があるため、外来語の使用頻度に影響を与えているという点を指摘した。

第4章では戦後から現代にかけての日韓外来語の出現率を計測し、時系列分析を通じてその量的推移を解明した。日本では 1950 年代から外来語の使用率が高まり始め、一貫して増加傾向にあり、韓国では 1945 年には使用率が低かったが、戦後の急激な増加を経て、経済発展とともに外来語の使用が拡大していった。しかし、2015年の時点で韓国語の出現率は日本語を上回るに至っていない。両言語の外来語の増減には共通するパターンが見られるものの、現代に入ってからの動きは異なり、韓国語の外来語使用は一貫して増加傾向にあり、日本語では一時的な停滞期を経て再増加している。これらの動向は国

際的な政治経済情勢や国語政策、言語認識などの要因が影響している可能性を示唆している。さらに、外来語の時間的進化を時系列で比較し、言語特徴を明らかにすることの重要性を指摘した。

第5章では、20世紀後半の増加傾向係数を用いた分析を通じて、日韓両国の新聞における外来語の特徴を把握した。日本語では抽象的意味分野の外来語使用が増加しているのに対し、韓国語では「人間活動」関連の外来語が顕著であることが確認された。さらに、増加パターンを基準に、12語を分析することにより、韓国語では特定の分野における外来語の使用が特徴的であることや日本語の増加傾向にある外来語は、韓国語においては類義語の使用を優先する傾向があるため、変化無しのパターンに属する可能性があることを指摘した。

第6章では、日本語と韓国語の外来語に関する事例研究を行い、それぞれの言語で見られる使用の特徴と相違点を明確にした。分析は類義語との関係性と品詞の変化という二つの観点から進めた。日本語においては、外来語が類義語の意味の一部を担当して、言語体系内での地位を確立していることが見られた。これに対し、韓国語では外来語の使用より、類義語を優先する傾向にあることが示された。品詞においては、日本語の外来語には名詞と動詞の両用法が確認され、柔軟性が高いことが明らかになったのに対し、韓国語では外来語が単一の品詞としてのみ使用されることが多いという結果が得られた。

7.2　結論

この研究は、日本語と韓国語の新聞を通じて外来語の使用とその変遷を量的に分析し、言語間の使用頻度の差異と言語特徴を明らかにすることを目指し、以下のような結果を得た。

まず、量的差異について、1945 年から 2020 年の間の日韓新聞データを基に、外来語の出現率とその推移を比較した。韓国語の外来語は、日本語を追いかけながら増加しているが、現代の新聞では日本語の外来語の使用率が韓国語より 1.3 倍弱多いことが確認された。この量的差異の背景として、社会的背景としては、外来語の受容が日本よりも韓国で遅れている点、韓国の言語醇化運動の影響、および外来語に対する異なる社会的態度が挙げられる。

言語特徴においては、日本語の新聞では外来語が広い分野で使用され、抽象的な意味分野においても多様な用法が見られる。これに対して、韓国語では外来語の使用が人間活動に関連する限られた分野に集中している。さらに、日本語における外来語は、類義語の意味の一部を担い、その勢力を拡張していくが、韓国語では一時期外来語を使用するとしても、類義語に回帰する傾向が見られる。また、日本語では一つの外来語が名詞、動詞など複数の品詞で使用されるのに対して、韓国語では一つの外来語が単

一品詞としてのみ使用される傾向がある。このため、韓国語における外来語の使用は日本語に比べて拡張性が乏しく、より限定的であると言える。

日本語においては、抽象的な関係や人間活動に関連する外来語が広範囲にわたり使用されており、複数の品詞としての役割を果たす柔軟性がある。このような使用の自由度が、外来語が日本語内で高頻度で使用され、さらに増加する傾向にある理由の一部を説明している。対照的に、韓国語では外来語へのアプローチが比較的閉鎖的であり、外来語に割り当てられる役割が限定されているため、その使用率は日本語に比べ低い。今後もこの傾向が続くと考えられる。現代韓国語における外来語の増加傾向は確認できるが、上述のような日本語の外来語の受容時期の早さ、韓国語における国語醇化運動の積極的な展開などの社会的背景、そして日本語の外来語に見られる拡張性や使用の自由度などの言語特徴を考慮すると、日本語の外来語の使用率は今後も韓国語より高い位置を占めると予想される。

7.3 今後の課題と展望

本研究は、日本語と韓国語の新聞コーパスに基づく計量的な分析を行うことで、両言語間の外来語の量的変遷とその差異を解明し、新聞で見られる外来語の意味用法の比較分析を行い、日韓外来語の言語特徴を考察することを目的に、分析を進めた。量的分析や意味用法の比較分析から相違点を特定し、前節で述べた成果を得られたが、日韓外来語を理解するため、今後の課題として以下のものが挙げられる。

I. 20 世紀後半の日本の新聞コーパスを作成し、それを基にして日本語と韓国語の外来語の言語特徴の比較分析をさらに進める。また、戦後直後の日本語における外来語の出現率は戦前の使用状況と密接な関連があると考えられる。戦前期は韓国語に日本語の影響が強かったため、この時期の外来語使用の特徴も明らかになるであろう。したがって、戦前のデータも収集し、より長期にわたる日韓外来語の量的推移を解明する。これにより、戦前から現代にかけての両言語における外来語の動向と特徴の理解を深めることができる。

II. 4 章では、韓国語の外来語に関する先行研究を整理し、量的推移を踏まえて背景を簡単に説明したが、外来語使用に影響を与える要因は多岐にわたる。そのため、言語特徴のみならず、社会的背景すなわち言語外的要因も分析する必要がある。具体的には、国語政策の観点の違いや外来語に対する意識の差異を詳しく分析し、日韓での外来語の受容や定着の仕方、現代における外来語の処理方法など、社会全体の認識を比較分析することが今後の研究展望となる。この比較分析を通じて、日韓における外来語がどのように解釈され利用されるかが明確になり、さらに言語政策や社会的態度が言語使用に及ぼす影響を深く理解することができる。

III. 6 章では、類義語との関係に焦点を当て、日韓における外来語がどのように勢力を確保していくのかについて考察した。一般に、日本語では類義語との意味分担を行いながら外来語が拡張していくのに対し、韓国語では類義語と外来語の意味分担が希であるため、外来語が勢力を増やすことは難しいことが確認できた。しかし、類義語と外来語の意味分担が具体的にどのように行われているかについて詳細な分析を行うためには、現在の研究で取り上げた「ケース」や「スペース」などの外来語に加え、より多くの外来語を分析対象にすることが今後の課題として挙げられる。

IV. 6 章では、名詞に焦点を当て、「する」を付加することによる動詞化に限定して分析を行った。しかし、外来語は名詞にとどまらず、形容詞や動詞など、より多様な品詞にわたって存在する。これら各品詞が持つ意味用法や、日韓間での使用における相違点についての詳細な分析にはまだ手が付けられていない。今後の研究課題として、これらの外来語が各品詞においてどのような役割を果たし、どのような変遷を遂げているのか、また、言語間でどのような差異があるのかを明らかにすることが求められる。

謝辞

本博士論文を完成させるまでの長い旅路において、多くの方々からの暖かい励ましと力強い支えをいただきました。

明治大学大学院国際日本学研究科の指導教員田中牧郎先生には、心からの感謝を表します。田中先生からは、研究の方向性を見定める上での的確なアドバイスと、研究プロセス全体にわたる絶え間ないサポートを頂きました。田中先生の深い洞察と経験豊富な指導は、私の研究の質を大きく向上させるものでした。同じく，同研究科小森和子先生にも深く感謝いたします。小森先生の厳しい指摘は、私の研究の精度を高める上で非常に重要でした。また、小森先生の激励とサポートが、研究を続ける上での大きな励みとなりました。

また、同研究科の諸先生方には、常に温かい助言と支援を賜り、深く感謝しております。さらに、共に学び、研究した院生の皆さんにも心からの感謝を表します。皆さんとの議論は、私の学問的成長において重要な役割を果たしました。また、日々の交流を通じて得た励ましと友情は、この道のりを進む上での大きな力となりました。

啓明大学日本語日本学科の張元哉先生には、学士課程から私の学問の旅を導いていただき、心から感謝申し上げます。張先生は、修士課程の指導教員としても、研究者としての道を選ぶ上での重要な指針を提供してくださいました。また、日本への留学に際しても、先生の多大なる支援と励ましがあったからこそ、私は新たなステップを踏み出すことができました。張先生の献身的なサポートと慈悲深いアドバイスは、私の学術的旅路において不可欠なものでした。

この場を借りて、ご指導とご支援を賜りました皆様に心から感謝申し上げます。

最後に、そして何よりも、家族への深い感謝を表したいと思います。長い研究の道のりの中で、常に私を支え、励まし続けてくれた家族の存在は、計り知れないほど大きなものでした。家族の皆様には、この学術的挑戦に立ち向かう上での愛と理解、そして忍耐に対して、心からの感謝を申し上げます。皆様の支えがなければ、この重要な節目を迎えることはできませんでした。本当にありがとうございました。

参考文献

[学術雑誌論文]

裵 晋影(2015)「韓国語「外来語＋hada」形容詞の日本語での様相」『日本文化研究』54, 113-128.

Chang WonJae(2016)「한일 양국어의 한자어 및 외래어의 분류와 특징」『일본어문학』 73, 137-158.

陳 暁静(2014)「類義語としてのカタカナ語・漢語の意味的相違：「ケア」と「介護」の意味上の相違について」『立命館文学』637,1450-1438.

Choi JeaWoong・Lee DoGil(2014)「물결 21 코퍼스: 공개 웹 자원 및 활용 도구」『민족문화연구』64,3-23.

Choi Yongki(2003)「국어순화정책의 역사와 개관」『국어 순화 정책 연구 보고서』국립국어연구원, 3-30.

伝 康晴・小木曽 智信・小椋 秀樹・山田 篤・峯松 信明・内元 清貴・小磯 花絵(2007)「コーパス日本語学のための言語資源：形態素解析用電子化辞書の開発とその応用」『日本語科学』22,101-123.

鄧 牧(2013)「大正期における外来語の増加に関する計量的分析」『国立国語研究所論集』6,1-18.

Doh WonYoung・Cha JoonKyung(2019)「<고려대 한국어대사전>의 종합적 고찰」『민족문화연구』51, 1-54.

Hong JoungHa(2012)「신문 텍스트 유형의 통시적 변화. 한국어학」『한국어학』56,275-315.

黄 秀智(2023)「日韓における外来語と既存語の意味関係 -「スペース」と「空間」の通時的研究-」『国際日本学研究論集』18, 21-37.

林 廷修(2021)「日韓両言語における外来語の受容に関する対照研究」筑波大学博士(言語学)学位請求論文(博士論文).

Jeong JiHye(2013)「국어의 외래어 조어법과 의미변이 연구」조선대학교 대학원 국어국문학과 석사학위논문.

Jung HeeWon(2004)「외래어의 개념과 범위」『새국어생활』, 14(2),5-22.

Jung YeonChang・Lee SangDo・Kim InTaek・Kim Eunil・Jho GookHyung・Kim JaeYoon・Kim SooJung (2005)「영어가 한국어에 미친 언어 문화적 영향에 대한 통시적 연구」『새한영어영문학』47-1,185-225.

Kang Shinhang(1985)「근대화 이후의 외래어 유입 양상」『국어생활』2,국립국어연구원, 23-36.

金愛蘭(2008)「基本語化する外来語とその類義語：ヒトとヒトとの「トラブル」の場合」『待兼山論叢(日本学篇)』42, 19-36, 大阪大学大学院文学研究科.

_____(2011)「20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊 3.

_____(2019)「新聞における外来語「ルール」の叙述基本語化ー叙述型の拡張過程を探るー」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』38,362-378.

Kim Hansam(2016)「<모던조선외래어사전>의 계량적 분석」『반교어문연구』 42, 177-196.

Kim HyunJu・Kim HeungKyu (2013)「세종역사말뭉치’의 몇 가지 현안과 그 개선 방안」『우리어문연구』46, 85-114.

Kim SeJung(1998)「외래어의 개념과 변천사」『새국어생활』82,5-19.

岸本まりこ(2023)「新聞社説における外来語の意味分類に関する日韓対照研究 - 『分類語彙表(増補改訂版)』を基に-」『동북아 문화연구』 74, 181-198.

岸本まりこ・Son DongJu(2022)「日韓両言語における 高頻度外来語の使用実態に関する対照研究 - 9年間(2013年から2021年まで)の新聞社説を基に -」『인문사회과학연구』23(4),241-268.

久屋愛実(2013)「現代書き言葉における外来語の共時的分布 - 「ケース」を事例として」『国立国語研究所論集』6,45-65.

Lee EunJo(2023)「외래어+하다する’에 관한 한일 대조 연구 —원어가 같은 외래어를 중심으로—」『日本文化學報』96,387-405.

Lee MinJu(2018)「일제 검열에 대한 조선어 민간신문의 대응양상 연구」『한국어언론학보』62-1, 69-97.

Lee MinWoo(2021)「의미 변화의 양적 추정 - 말뭉치를 이용한 의미 변화 연구」『한국어 의미학』73,59-81.

Lee SangHyuk(2014)「근대 한국(조선)의 서양 외래어 유입과 그 역사적 맥락」 『언어와 정보사회』23, 159-187.

Lee YoungJae・Kang BumMo (2014) 「현대국어 역사 코퍼스를 이용한 언어 변화의 계량적 연구-가칭 동아일보 역사 코퍼스에 기초한 접속부사 사용 분석을 중심으로-」『한국어학』63, 267-303.

Min HyunSik(1998)「국어 외래어에 대한 연구」『한국어 의미학』2, 91-132.

Min KyungMo(2020)「다국어 병렬 말뭉치의 구축과 한국어교육 연구에의 활용」『한국학논집』78,187-220.

宮田公治・田中牧郎(2006)「外来語「リスク」とその類義語の意味比較 —既存の類義語を持つ外来語の存在理由—」『言語処理学会年次大会発表論文集』,600-603.

茂木俊伸(2015)「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析—「マークする」を例として—」『文学部論叢』106,83-95.

小木曽智信・近藤明日子・髙橋雄太・間淵洋子編(2024)「『昭和・平成書き言葉コーパス』の設計・構築・公開」『情報処理学会誌』65(2), 1-14.

佐藤琢三(2013)「外来語研究における意味分析：「ムード」と「雰囲気」の類義分析による事例研究」『学習院女子大学紀要』15, 学習院女子大学, 45-56.

森聡美(2016)「韓日両言語における英語動詞の借用に関する対照研究 ー使用頻度と意味拡張の観点からー」『일본문화연구』57, 23-41.

Noh MyungHee(2013)「外來語의 意味 轉移」『대동문화연구』 82, 493-524.

石暘暘(2018)「近現代における外来語「ポイント」の変遷」『言語科学論集』22, 13-25.

_____(2019)「近現代における外来語「イメージ」の変遷」『文芸研究:文芸・言語・思想』187, 28-14.

_____(2020)「近現代における外来語「モード」の受容過程」『国語学研究 59』341-356.

徐尚揆(2009)「韓国におけるコーパス研究と活用」『国文学:解釈と鑑賞』至文堂, 至文堂編 74 (1), 131-140.

Seo Sangkyu(2017)「한국어 빈도 조사와 말뭉치의 주석」『한글』316, 71-120.

塩田雄大(2022)「外来語増加に賛成が 6 割―2022 年「日本語のゆれに関する調査」から(1)―」『放送研究と調査』22-39.

So KangChun(2019)「4 차 산업혁명 시대와 우리말 연구의 미래」『국어국문학』189, 77-92.

Son HyeOk・Lee SuMi(2011)「영어+하다’류 외래어 형용사의 국어 내 정착 양상 연구 - 한자어, 고유어와의 유의 관계 분석을 중심으로-」『한국어 의미학』35, 145-187.

Song SeungHyun(2022)「한국어 외래어의 의미 변화 및 수용 양상- 구어 말뭉치를 바탕으로-」『언어사실과 관점』56, 183-211.

北澤尚・王潘琳(2021)「現代日本語の外来語サ変動詞のヴォイスについての記述的研究」『東京学芸大学紀要』人文社会科学系Ⅰ, 72, 9-61.

田中牧郎(2012)「「語彙レベル」から見た近代の語彙と現代の語彙―『太陽コーパス』と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて―」『第 2 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所、pp. 105-108.

鸞岡昭夫(1980)「高校教科書用語調査め言語単位について」『電子計算機による国語研究 』10, 20-51.

堤智昭・小木曽智信(2023)「複数の UniDic 辞書による形態素解析支援ツール『Web 茶まめ』の実装と運用」, 情報処理学会論文誌, Vol. 64, No. 3, pp. 749-757.

柏野和佳子・小椋秀樹・田中牧郎・加藤安彦(2000)「話し言葉コーパスにおける単位区切りと品詞付与の方法」『言語処理学会第6回年次大会発表論文集』99-102.

山田進(2012)「「ゲットする」と「タッチする」―外来語動詞の新用法―」『聖心女子大学論叢』119,147-170.

山崎誠(2018)「日本語コーパス紹介とその利用」日本語教育国際研究大会，講義資料3，4.

Yang MinHo(2009)「外来語の歴史と政策から見た日韓対照研究」『일본문화연구』30,71-94.

_____(2011)「외래어의 인지, 이해, 사용률에 관한 한일 대조 연구」『국제학논총』15,55-77.

_____(2013)「외래어 정착 과정에 관한 한일 대조연구-구글 검색엔진을 통하여-」『日本語文學』59,199-218.

吉田桃子・望月源(2003)「日本語流行歌中の外来語に関する調査」『言語処理学会年次大会発表論文集』9，493-496.

[単行本]

Cho NamHo(2002)『현대 국어 사용 빈도 조사 -한국어 학습용 어휘 선정을 위한 기초 조사-』국립국어연구원.

Choi YongKi(2003)『국어 순화 정책 연구 보고서』국립국어연구원.

_____(2003)『국어순화자료집합본(1991년부터 2002년까지)』국립국어연구원.

橋本和佳(2010)『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房.

星野祐子(2019)「大正期の『中央公論』『婦人公論』における抽象的な概念を表す外来語の使用」髙﨑みどり編『大正期『中央公論』『婦人公論』の外来語研究』冨山房インターナショナル.

石綿敏雄(2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版.

陣内正敬(2007)『外来語の社会言語学―日本語のグローカルな考え方』世界思想社.

陣内正敬・相澤正夫・田中牧郎(2012)『外来語研究の新展開』おうふう.

国立国語研究所(1962)『現代雑誌九十種の用語用字』秀英出版.

国立国語研究所(1970)『電子計算機による新聞の語彙調査』秀英出版.

国立国語研究所(1987)『雑誌用語の変遷』秀英出版.

国立国語研究所(1990)『日本語教育指導参考書16外來語の形成とその教育』大蔵省印刷局.

国立国語研究所(1997)『現代雑誌九十種の用語用字全語彙・表記[FD版]』三省堂.

国立国語研究所「外来語」委員会(2006)『外来語言い換え手引き―分かりやすく伝える』ぎょうせい.

国立国語院(2020)『2020년 국민의 언어의식 조사』네오블루.

茂木俊伸(2008)「国会会議録における行政分野の外来語」松田謙次郎［編］『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房.

小椋秀樹・小磯花絵・冨士池・優美宮内・佐夜香・小西光・原裕(2011)『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集第4版(下)」』.

高田博行・家入葉子・渋谷勝己(2015)『歴史社会言語学入門』大修館書店.

髙﨑みどり編(2019)『大正期『中央公論』『婦人公論』の外来語研究』冨山房インターナショナル.

【辞書】

標準国語大辞典,https://stdict.korean.go.kr/main/main.do(2024年1月22日確認)

日本国語大辞典, https://japanknowledge.com/library/aboutlib.html (2024年1月22日確認)

基本類義語辞典,https://natmal.com/views/dictionary/syn (2024年1月22日確認)

高麗大韓国語大辞典, https://ko.dict.naver.com/#/main (2024年1月22日確認)

【言語資源】

동아일보(東亜日報)紙面, https://www.donga.com/news/Pdf (2024年1月22日確認)

Kiwi：지능형 한국어 형태소 분석기(Korean Intelligent Word Identifier), https://bab2min.github.io/kiwipiepy/v0.8.0/kr(2024年1月22日確認)

国立国語研究所(2015)『web茶まめ』https://chamame.ninjal.ac.jp/ (2024年1月22日確認)

国立国語研究所(2004)『分類語彙表増補改訂版データベース』(ver.1.0)https://github.com/masayu-a/WLSP (2024年1月22日確認)

꼬꼬마 세종 말뭉치 활용 시스템, http://kkma.snu.ac.kr/ (2024年1月22日確認)

毎日新聞社『CD-毎日新聞データ集2000』

毎日新聞社『CD-毎日新聞データ集2010』

毎日新聞社『CD-毎日新聞データ集2020』

小木曽智信・近藤明日子・髙橋雄太・田中牧郎・間淵洋子編(2023)『昭和・平成書き言葉コーパス』(バージョン2023.5, 中納言バージョン2.7.2)https://clrd.ninjal.ac.jp/SHC/ (2024年1月22日確認)

田中恵子・中山惠利子(2014)「イメージ」「カタカナ語を教えるために：カタカナ語(外来語)の教師用参考書」(ウェブ版)http://katakanago.web.fc2.com/ (2024年1月22日確認)

［語彙表 1］現代日韓外来語―上位 200 語リスト

部門	中項目		日本語
1.1	1.10	事柄	ケース, データ, ファイル
	1.11	類	トップ, レベル, モデル, ランキング, タイプ, スタイル, パー
	1.12	存在	デビュー, スペース
	1.13	様相	インターネット, ネット, システム, リスク, ベスト, トラブル, バランス
	1.14	力	パワー
	1.15	作用	スタート, オープン, フリー, アップ, タイム, コース, ヒット, オフ, リード, プラス, ジャンプ, パス, マイナス
	1.16	時間	シーズン, チャンス
	1.17	空間	センター, ポイント, ライン, サイト, ページ, ホーム, ゴール, ボックス, ネットワーク
	1.18	形	ミニ
	1.19	量	メートル, キロ, グループ, ドル, センチ, シリーズ, セット, デジタル, トン, ゼロ, ユーロ, スピード, ポイント, グラム, ワン, ペース, ミリ, ラウンド
1.2	1.20	人間	マン
	1.22	仲間	ライバル
	1.23	人物	プロ, ボランティア, スター, ベテラン
	1.24	成員	メンバー, メーカー, ファン, コーチ, スタッフ, リーダー
	1.26	社会	ホテル, ホール, クラブ, バンク, ワールド, スーパー, キャンプ, スタジアム, バー
	1.27	機関	リーグ, チーム, オリンピック, パラリンピック, クラス, グループ
1.3	1.30	心	テーマ, イメージ, イスラム, プロジェクト, ルール, トレーニング, チェック, ストレス, プラン
	1.31	言語	メディア, ニュース, メール, サミット, マーク, コメント, メッセージ, タイトル, ブランド, プログラム, キャンペーン, リスト, アンケート
	1.32	芸術	ドラマ, デザイン, アート, ジャズ
	1.33	生活	サッカー, スポーツ, ゴルフ, プレー, ゲーム, ボール, ツアー, レース, ラグビー, マラソン, スキー, エース, テニス, ストレート, スケート, バスケットボール, シングルス, ボクシング
	1.34	行為	ミス
	1.35	交わり	カップ, イベント, テロ, デモ, インタビュー, コンサート, シード, シンポジウム, コンクール, トーナメント
	1.36	待遇	ケア, アピール, リコール
	1.37	経済	コスト, プレゼント
	1.38	事業	サービス, ソフト, ビジネス, ライブ, アプリ
1.4	1.40	物品	チケット
	1.41	資材	ガス, キー, ガラス
	1.42	衣料	マスク
	1.43	食料	ワクチン, ハム, パン
	1.44	住居	ビル, ドーム, ハウス, マンション, トイレ
	1.45	道具	メダル, カード, ミサイル, ピアノ

	1.46	機械	テレビ, バス, パソコン, ビデオ, カメラ, ラジオ, コンピューター, ファクス, ナビ, トラック, エンジン, タクシー, メジャー, カー
	1.47	土地利用	ダム
1.5	1.50	自然	コロナ, エネルギ, ホワイト, ブルー
	1.55	動物	ウイルス, ペット
	1.57	生命	インフルエンザ

部門	中項目		韓国語(日本語訳)
1.1	1.10	事柄	데이터(データ)
	1.11	類	모델(モデル), 스타일(スタイル), 랭킹(ランキング), 장르(ジャンル), 톱(トップ), 인프라(インフラ)
	1.12	存在	데뷔(デビュー)
	1.13	様相	인터넷(インターネット), 시스템(システム), 베스트(ベスト), 콘텐츠(コンテンツ), 캐릭터(キャラクター)
	1.15	作用	리바운드(リバウンド), 오픈(オープン), 코스(コース), 오프(オフ), 히트(ヒット)
	1.16	時間	시즌(シーズン), 크리스마스(クリスマス), 골든(ゴールデン)
	1.17	空間	골(ゴール), 라인(ライン), 홈(ホーム), 사이트(サイト), 코너(コーナー), 웹(ウェブ), 포털(ポータル)
	1.18	形	미니(ミニ)
	1.19	量	달러(ドル), 포인트(ポイント), 채널(チャンネル), 세트(セット), 디지털(デジタル), 시리즈(シリーズ), 라운드(ラウンド), 쿼터(クォーター), 원(ワン), 피크(ピーク)
1.2	1.20	人間	맨(マン)
	1.22	仲間	파트너(パートナー)
	1.23	人物	프로(プロ), 스타(スター)
	1.24	成員	팬(ファン), 챔피언(チャンピオン), 코치(コーチ), 멤버(メンバー), 디자이너(デザイナー), 탤런트(タレント), 리더(リーダー), 플레이어(プレーヤー), 브로커(ブローカー), 갤러리(ギャラリー)
	1.25	公私	타운(タウン), 캠퍼스(キャンパス)
	1.26	社会	호텔(ホテル), 월드(ワールド), 클럽(クラブ), 홀(ホール), 슈퍼(スーパー), 스쿨(スクール), 카페(カフェ), 마트(マート), 벤처(ベンチャー), 캐피탈(キャピタル), 아카데미(アカデミー), 소셜(ソーシャル)
	1.27	機関	팀(チーム), 그룹(グループ), 센터(センター), 리그(リーグ), 올림픽(オリンピック), 파티(パーティー)
1.3	1.30	心	이미지(イメージ), 이슬람(イスラム), 로(ロー), 프로젝트(プロジェクト), 이슈(イシュー), 바이오(バイオ), 아이디어(アイデア), 세미나(セミナー), 스트레스(ストレス), 사이버(サイバー), 테마(テーマ), 가톨릭(カトリック), 비전(ビジョン), 옵션(オプション), 디스플레이(ディスプレー)

	1.31	言語	뉴스(ニュース), 프로그램(プログラム), 브랜드(ブランド), 페이지(ページ), 미디어(メディア), 메시지(メッセージ), 코드(コード), 칼럼(コラム), 캠페인(キャンペーン), 네트워크(ネットワーク), 메일(メール), 텔레콤(テレコム), 멀티미디어(マルチメディア), 모바일(モバイル), 타이틀(タイトル), 개그(ギャグ), 콜(コール), 셀러(セラー), 브리핑(ブリーフィング), 그래픽(グラフィック), 워드(ワード)
	1.32	芸術	드라마(ドラマ), 디자인(デザイン), 뮤지컬(ミュージカル), 클래식(クラシック), 오페라(オペラ), 팝(ポップ), 다큐멘터리(ドキュメンタリー), 아트(アート), 시나리오(シナリオ), 코미디(コメディー), 애니메이션(アニメーション)
	1.33	生活	스포츠(スポーツ), 골프(ゴルフ), 스키(スキー), 패션(ファッション), 게임(ゲーム), 슛(シュート), 볼(ボール), 캠프(キャンプ), 투어(ツアー), 플레이(プレー), 발레(バレエ), 마라톤(マラソン), 샷(ショット), 하키(ホッケー), 테니스(テニス), 댄스(ダンス), 아르바이트(アルバイト) , 어시스트(アシスト)
	1.34	行為	리더십(リーダーシップ)
	1.35	交わり	컵(カップ), 테러(テロ), 인터뷰(インタビュー), 포럼(フォーラム), 콘서트(コンサート), 이벤트(イベント), 쿠데타(クーデター), 컨설팅(コンサルティング)
	1.37	経済	펀드(ファンド), 쇼핑(ショッピング), 페이(ペイ)
	1.38	事業	서비스(サービス), 마케팅(マーケティング), 쇼(ショー), 소프트웨어(ソフトウェア), 비즈니스(ビジネス), 테크(テック)
1.4	1.40	物品	티켓(チケット)
	1.41	資材	가스(ガス), 케이블(ケーブル), 테이프(テープ), 키(キー)
	1.42	衣料	코트(コート)
	1.43	食料	커피(コーヒー)
	1.44	住居	아파트(アパート), 빌딩(ビル), 룸(ルーム), 타워(タワー), 하우스(ハウス)
	1.45	道具	카드(カード), 메달(メダル), 앨범(アルバム), 피아노(ピアノ), 미사일(ミサイル), 컨테이너(コンテナ)
	1.46	機械	버스(バス), 컴퓨터(コンピューター), 택시(タクシー), 폰(フォン), 비디오(ビデオ), 메이저(メジャー), 엔진(エンジン), 라디오(ラジオ), 카메라(カメラ), 로봇(ロボット), 롬(ロム), 헬리콥터(ヘリコプター)
	1.47	土地利用	터널(トンネル)
1.5	1.50	自然	에너지(エネルギ), 아이스(アイス)
	1.51	物質	플라스틱(プラスチック), 비닐(ビニール)
	1.55	動物	바이러스(ウイルス)
	1.57	生命	에이즈(エイズ)

［語彙表 2］現代日韓外来語―類型別語彙リスト

部門	中項目		JH-KH 類型－日本語(韓国語訳)
1.1	1.10	事柄	データ(데이터), ファイル(파일)
	1.11	類	トップ(탑), モデル(모델), ランキング(랭킹), スタイル(스타일), インフラ(인프라), ジャンル(장르)
	1.12	存在	デビュー(데뷔)
	1.13	様相	インターネット(인터넷), システム(시스템), リスク(리스크), ベスト(베스트), キャラクター(캐릭터)
	1.14	力	パワー(파워)
	1.15	作用	オープン(오픈), コース(코스), ヒット(히트), オフ(오프), チャンネル(채널)
	1.16	時間	シーズン(시즌), クリスマス(크리스마스), デイ(데이), ゴールデン(골든)
	1.17	空間	ポイント(포인트), ライン(라인), サイト(사이트), ホーム(홈), ゴール(골), コーナー(코너), ウェブ(웹), リゾート(리조트)
	1.18	形	ミニ(미니), チェック(체크)
	1.19	量	グループ(그룹), ドル(달러), カップ(컵), シリーズ(시리즈), デジタル(디지털), ユーロ(유로), スピード(스피드), ポイント(포인트), ワン(원), ラウンド(라운드), ピーク(피크), ショート(쇼트), セット(세트), バレル(배럴), カップル(커플)
1.2	1.20	人間	マン(맨), ジュニア(주니어)
	1.22	仲間	パートナー(파트너)
	1.23	人物	プロ(프로), スター(스타), アマチュア(아마추어)
	1.24	成員	メンバー(멤버), ファン(팬), コーチ(코치), リーダー(리더), マネジャー(매니저), ギャラリー(갤러리), ガイド(가이드), タレント(탤런트), デザイナー(디자이너), プレーヤー(플레이어)
	1.25	公私	タウン(타운), キャンパス(캠퍼스)
	1.26	社会	ホテル(호텔), ホール(홀), バンク(뱅크), ワールド(월드), スーパー(슈퍼), ベンチャー(벤처), スクール(스쿨), レストラン(레스토랑), アカデミー(아카데미), カフェ(카페), オフィス(사무실)
	1.27	機関	リーグ(리그), チーム(팀), センター(센터), オリンピック(올림픽), パーティー(파티), バンド(밴드)
1.3	1.30	心	テーマ(테마), イメージ(이미지), イスラム(이슬람), テロ(테러), プロジェクト(프로젝트), ルール(룰), アンダー(언더), ストレス(스트레스), アイデア(아이디어), セミナー(세미나), テスト(테스트), ストーリー(스토리), ガイドライン(가이드라인), カトリック(가톨릭), ビジョン(비전), リサーチ(리서치), バイオ(바이오)
	1.31	言語	メディア(미디어), ニュース(뉴스), ページ(페이지), ビル(빌딩), メール(메일), マーク(마크), メッセージ(메시지), タイトル(타이틀), ブランド(브랜드), プログラム(프로그램), キャンペーン(캠페인), リスト(리스트), コミュニケー

			ション(커뮤니케이션), ブック(북), ノート(노트), メニュー(메뉴), ビザ(비자), ワード(워드), コラム(칼럼), コール(콜)
	1.32	芸術	ドラマ(드라마), デザイン(디자인), アート(아트), ジャズ(재즈), クラシック(클래식), カラー(컬러), オペラ(오페라), ロック(록), ドキュメンタリー(다큐멘터리), ミュージック(뮤직), ミュージカル(뮤지컬), シナリオ(시나리오), オーケストラ(오케스트라)
	1.33	生活	スポーツ(스포츠), ゴルフ(골프), プレー(플레이), ゲーム(게임), ツアー(투어), マラソン(마라톤), スキー(스키), テニス(테니스), スケート(스케이트), ブーム(붐), シュート(슛), ボール(볼), アルバイト(아르바이트), ホッケー(하키), ダンス(댄스), ファッション(패션), バレエ(발레), ショット(샷), アウト(아웃)
	1.34	行為	リーダーシップ(리더십)
	1.35	交わり	イベント(이벤트), インタビュー(인터뷰), コンサート(콘서트), コンクール(콩쿠르), フォーラム(포럼)
	1.37	経済	ファンド(펀드), セール(세일), ショッピング(쇼핑)
	1.38	事業	サービス(서비스), ビジネス(비즈니스), ショー(쇼)
1.4	1.40	物品	チケット(티켓)
	1.41	資材	ガス(가스), キー(키), テープ(테이프), ケーブル(케이블), パイプ(파이프), タイヤ(타이어)
	1.42	衣料	シャツ(셔츠), ユニホーム(유니폼)
	1.43	食料	ワイン(와인), コーヒー(커피)
	1.44	住居	ハウス(하우스), アパート(아파트), ベンチ(벤치), テーブル(테이블), ルーム(룸)
	1.45	道具	メダル(메달), カード(카드), ミサイル(미사일), ピアノ(피아노), アルバム(앨범)
	1.46	機械	バス(버스), ビデオ(비디오), カメラ(카메라), ラジオ(라디오), コンピューター(컴퓨터), トラック(트럭), エンジン(엔진), タクシー(택시), メジャー(메이저), カー(카), ホン(폰), ロボット(로봇), ロケット(로켓)
	1.47	土地利用	パーク(파크), トンネル(터널), タンク(탱크), ランド(랜드), プラザ(플라자)
1.5	1.50	自然	エネルギ(에너지), ブルー(블루), ブラック(블랙)
	1.51	物質	ガス(가스), ダイヤモンド(다이아몬드), プラスチック(플라스틱)
	1.55	動物	ウイルス(바이러스)

部門	中項目		JH-KL 類型－日本語(韓国語訳)
1.1	1.10	事柄	カバー(커버)
	1.12	存在	カット(커트)
	1.15	作用	スタート(스타트), アップ(업), リード(리드), プラス(플러스), ダウン(다운), タッチ(터치), パック(팩)
	1.16	時間	ライフ(라이프), シート(시트), スケジュール(일정)

	1.17	空間	ネットワーク(네트워크), スペース(스페이스), サイド(사이드), ページ(페이지), ゾーン(존)
	1.18	形	ピース(피스)
	1.19	量	マイクロ(마이크로), コンビ(콤비), クラスター(클러스터), ロング(롱), コレクション(컬렉션), レコード(레코드)
1.2	1.21	家族	ファミリー(패밀리)
	1.23	人物	ベテラン(베테랑), アマ(아마)
	1.24	成員	プロデューサー(프로듀서), アーティスト(아티스트), ヘッド(헤드), デスク(데스크), スポンサー(스폰서)
	1.26	社会	キャンプ(캠프)
	1.27	機関	パラリンピック(패럴림픽)
1.3	1.30	心	プラン(플랜), エコ(에코), ドラフト(드래프트), アレルギー(알레르기)
	1.31	言語	コメント(코멘트), ポルノ(포르노)
	1.32	芸術	シネマ(시네마), オリジナル(오리지널), パフォーマンス(퍼포먼스)
	1.33	生活	フィギュア(피겨)
	1.34	行為	ミス(미스), コム(컴)
	1.35	交わり	シード(시드), トーナメント(토너먼트), コンテスト(콘테스트)
	1.36	待遇	グランプリ(그랑프리)
	1.38	事業	ソフト(소프트), ライブ(라이브)
	1.41	資材	ボタン(버튼)
	1.42	衣料	
	1.43	食料	アイス(아이스), ソース(소스)
	1.44	住居	シンク(싱크대)
	1.45	道具	ペン(펜), バッグ(백)
	1.46	機械	ナビ(내비게이션), モーター(모터)
	1.47	土地利用	ダム(댐), ロード(로드)
1.5	1.50	自然	ライト(라이트)
	1.56	身体	ホルモン(호르몬)
	1.57	生命	インフルエンザ(인플루엔자)

部門	中項目		KH-JL 類型－日本語(韓国語訳)
1.1	1.10	事柄	アシスト(어시스트), サンプル(샘플)
	1.15	作用	ダイエット(다이어트)
	1.17	空間	ポータル(포털)
	1.24	成員	ブローカー(브로커)
	1.26	社会	マート(마트), クラブ(클럽), リンク(링크), モール(몰), キャピタル(캐피탈)
1.3	1.30	心	ディスプレー(디스플레이)

	1.31	言語	ネットワーク(네트워크), モバイル(모바일), グラフィック(그래픽), ギャグ(개그)
	1.32	芸術	コメディー(코미디)
	1.33	生活	ドライブ(드라이브), エンターテインメント(엔터테인먼트), ミサ(미사)
	1.35	交わり	ガード(가드)
	1.38	事業	テック(테크), プラント(플랜트)
1.4	1.41	資材	ベルト(벨트), ツリー(트리), インテリア(인테리어)
	1.45	道具	ディスク(디스크)
	1.46	機械	チップ(칩), ロム(롬), メモリー(메모리)
	1.47	土地利用	トラック(트랙), ウェイ(웨이)

部門	中項目		JL-KL 類型－日本語(韓国語訳)
1.1	1.10	事柄	リアリティー(리얼리티)
	1.11	類	スタンダード(스탠다드) , ジレンマ(딜레마)
	1.16	時間	イブ(이브), イニシアチブ(이니셔티브)
	1.18	形	ロール(롤)
	1.19	量	マイル(마일), モジュール(모듈), ピン(핀)
1.2	1.20	人間	シルバー(실버), ガール(걸)
	1.23	人物	リーガー(리거), テロリスト(테러리스트), キラー(킬러)
	1.24	成員	ボス(보스), パイロット(파일럿), マスター(마스터), バイオリニスト(바이올리니스트)
	1.25	公私	スラム(슬램)
	1.26	社会	コミュニティー(커뮤니티)
1.3	1.30	心	マインド(마인드), レッスン(레슨), ファンタジー(판타지), オーディション(오디션), イデオロギー(이데올로기)
	1.31	言語	ナレーション(내레이션)
	1.32	芸術	フォト(사진), ソナタ(소나타), バラエティー(버라이어티), レビュー(리뷰), スケッチ(스케치), ブルース(블루스)
	1.33	生活	スノーボード(스노우보드), ボウリング(볼링), ハッピー(해피), クリック(클릭), ボブスレー(봅슬레이)
	1.34	行為	テクニック(테크닉)
	1.35	交わり	リサイタル(리사이틀)
	1.37	経済	セールス(세일즈)
	1.38	事業	バンキング(뱅킹)
1.4	1.41	資材	ラップ(랩)
	1.42	衣料	シルク(실크), ヘルメット(헬멧)

	1.43	食料	ティー(티), チキン(치킨), チョコレート(초콜릿), ハンバーガー(햄버거), ウイスキー(위스키)
	1.45	道具	ドラム(드럼), バスケット(바스켓)
	1.46	機械	ポンプ(펌프), プリンター(프린터), レンズ(렌즈), マシン(머신), センサー(센서), カヌー(카누), リフト(리프트)
1.5	1.53	生物	コレステロール(콜레스테롤)
	1.56	身体	ヘア(헤어)
	1.57	生命	アトピー(아토피)

部門	中項目		K有り-J無し類型－日本語(韓国語訳)
	1.11	類	シナジー(시너지), プライム(프라임)
	1.13	様相	パラダイム(패러다임)
	1.15	作用	イノベーション(이노베이션), スケーティング(스케이팅), ハッキング(해킹), アップグレード(업그레이드)
	1.16	時間	ビエンナーレ(비엔날레)
	1.19	量	クォーター(쿼터), インチ(인치), ナノ(나노), ハンディキャップ(핸디캡), マイレージ(마일리지)
1.2	1.21	家族	マム(맘)
	1.23	人物	ゴルファー(골퍼), マニア(마니아)
	1.24	成員	インターン(인턴), キュレーター(큐레이터), フォワード(포워드), バイヤー(바이어), シューター(슈터)
	1.26	社会	スーパーマーケット(슈퍼마켓), コンド(콘도)
	1.27	機関	コンソーシアム(컨소시엄), フォース(포스)
1.3	1.30	心	イシュー(이슈), オプション(옵션), エンジニアリング(엔지니어링), キャスティング(캐스팅), ポピュリズム(포퓰리즘), ウェル(웰), ビン(빙)
	1.31	言語	マルチメディア(멀티미디어), ブリーフィング(브리핑), モニターリング(모니터링), チャット(채팅), タスク(태스크), ロマンス(로맨스)
	1.32	芸術	アニメーション(애니메이션), キャロル(캐럴), ヒップ(힙), ホップ(합), コミック(코믹), メロ(멜로), キャプチャー(캡처)
	1.33	生活	キャンプ(캠프), トレッキング(트레킹), シューティング(슈팅), ブロック(블록), ウェアラブル(웨어러블), ブリッジ(브리지)
	1.35	交わり	カップ(컵), コンサルティング(컨설팅), コンベンション(컨벤션), デート(데이트), ユニバーシアード(유니버시아드), エキスポ(엑스포)
	1.37	経済	インセンティブ(인센티브), リベート(리베이트), コスピ(코스피), ロン(론), マージン(마진)
	1.38	事業	ソフトウェア(소프트웨어), アプリケーション(애플리케이션), リモデリング(리모델링), ストリーミング(스트리밍) , ハードウエア(하드웨어)
	1.41	資材	セメント(시멘트), グリップ(그립), ホイール(휠)
	1.42	衣料	グローブ(글러브), ブーツ(부츠)

	1.44	住居	ビュッフェ(뷔페), バルコニー(발코니), チェア(체어), オフィステル(오피스텔), ヴィラ(빌라)
	1.45	道具	ヴァイオリン(바이올린), コンドーム(콘돔), ポートフォリオ(포트폴리오), カップ(컵), ペイント(페인트), トロフィー(트로피)
	1.46	機械	ラム(램), スポットライト(스포트라이트), ボイラー(보일러), クレーン(크레인)
	1.47	土地利用	プラットホーム(플랫폼), バリー(밸리), ピラミッド(피라미드)
1.5	1.50	自然	アイス(아이스)
	1.51	物質	スモッグ(스모그), アルミ(알루미늄)
	1.52	天地	オーシャン(오션)
	1.54	直物	バクテリア(박테리아)
	1.57	生命	ヘルス(헬스)

部門	中項目		J有り-K無し類型－日本語(韓国語訳)
1.1	1.10	事柄	ケース(케이스)
	1.11	類	レベル(레벨), タイプ(타입), パー(파), ランク(랭크)
	1.13	様相	ネット(넷), トラブル(트러블), バランス(밸런스), リストラ(x), ムード(무드), メリット(메리트)
	1.15	作用	リレー(릴레이), ルート(루트), アクセス(액세스), バック(백)
	1.16	時間	セット(세트), チャンス(찬스), シーン(씬), ポスト(포스트)
	1.17	空間	エリア(에리어), マウンド(마운드), クロス(크로스)
	1.19	量	メートル(미터), キロ(킬로), センチ(센티미터), トン(톤), グラム(그램), ペース(페이스), ミリ(밀리), リットル(리터), スーパー(슈퍼), ナンバー(넘버), パート(파트), シェア(쉐어)
1.2	1.20	人間	ユース(x)
	1.22	仲間	ゲスト(게스트)
	1.23	人物	ボランティア(x), サポーター(서포터), サラリーマン(샐러리맨), メダリスト(메달리스트)
	1.24	成員	ジャーナリスト(저널리스트), スパイ(스파이), ユーザー(유저)
	1.26	社会	スタジアム(스타디움), バー(바), コンビニ(x)
	1.27	機関	クラブ(클럽), グループ(그룹)
1.3	1.30	心	デモ(데모), ニーズ(니즈), プレッシャー(x)
	1.31	言語	サミット(서밋), アンケート(앙케트), マニフェスト(매니페스트), マスコミ(매스컴)
	1.33	生活	サッカー(축구), ラグビー(럭비), ストレート(스트레이트), バスケットボール(x), シングルス(x), ゴロ(x), バレーボール(x), バーディー(버디), ボギー(x)
	1.36	交わり	アピール(어필), サポート(서포트), アドバイス(어드바이스)

	1.37	経済	コスト(코스트), プレゼント(선물), バブル(버블), ローン(론)
	1.38	事業	アプリ(어플리케이션), クローズ(클로즈), リサイクル(리사이클), ハイテク(하이테크)
1.4	1.41	資材	ガラス(x), ガソリン(가솔린)
	1.43	食料	ハム(햄), パン(빵), ビール(x)
	1.44	住居	ドーム(돔), マンション(맨션), トイレ(x), ドア(x), ステージ(스테이지), ワゴン(x) , アメリカン(아메리칸)
	1.45	道具	バット(배트)
	1.46	機械	パソコン(x), ファクス(팩스), バイク(오토바이), スマホ(스마트폰)
	1.47	土地利用	コース(코스)
1.5	1.50	自然	コロナ(코로나), ホワイト(화이트)
	1.55	動物	ペット(애완동물)
	1.57	生命	クローン(클론)

［語彙表 3］ 韓国語の増加傾向係数順の外来語リスト

韓国語の増加（増加傾向係数+15～+8）

係数	韓国語・日本語訳（分類番号/通年度数）
15	디자인・デザイン(1.32/113), 타이어・タイヤ(1.41/52)
14	아파트・アパート(1.44/810), 센터・センター(1.26/599), 월드・ワールド(1.26/419), 시즌・シーズン(1.16/332), 이미지・イメージ(1.30/234), 오픈・オープン(1.15/94), 뮤지컬・ミュージカル(1.32/83), 모델・モデル(1.24/44), 프로젝트・プロジェクト(1.30/42)
13	호텔・ホテル(1.26/904), 올림픽・オリンピック(1.35/678), 카드・カード(1.45/573), 모델・モデル(1.11/120), 데뷔・デビュー(1.12/114), 카메라・カメラ(1.46/86), 아카데미・アカデミー(1.26/76), 마이너스・マイナス(1.15/40)
12	그룹・グループ(1.27/(1226), 컴퓨터・コンピューター(1.46/617), 드라마・ドラマ(1.32/388), 컵・カップ(1.35/382), 시스템・システム(1.13/247), 슛・シュート(1.33/204), 리바운드・リバウンド(1.15/198), 비디오・ビデオ(1.46/182), 세미나・セミナー(1.30/144), 패션・ファッション(1.33/141), 베스트・ベスト(1.13/140), 스타일・スタイル(1.11/128), 코너・コーナー(1.17/115), 인터뷰・インタビュー(1.35/104), 플라스틱・プラスチック(1.51/103), 아이스・アイス 1.(510)2), 캠페인・キャンペーン(1.31/94), 테이프・テープ(1.41/87), 메이커・メーカー(1.24/79), 다큐멘터리・ドキュメンタリー(1.32/70), 셀러・セラー(1.40/66), 팝・ポップ(1.32/58), 데이터・データ(1.10/57), 아이디어・アイデア(1.30/56), 벨트・ベルト(1.41/53), 엘리베이터・エレベーター(1.46/41), 터널・トンネル(1.47/39), 빅・ビッグ(3.19/37), 에어컨・エアコン(1.46/34)
11	프로그램・プログラム(1.31/625), 버스・バス(1.46/598), 프로・プロ(1.23/545), 스키・スキー(1.33/454), 게임・ゲーム(1.33/327), 빌딩・ビル(1.44/261), 메시지・メッセージ(1.31/186), 볼・ボール(1.33/154), 붐・ブーム(1.33/110), 코트・コート(1.47/108), 마크・マーク(1.31/79), 셔츠・シャツ(1.42/49)
10	서비스・サービス(1.38/375), 골프・ゴルフ(1.33/240), 미디어・メディア(1.31/188), 세트・セット(1.19/169), 랭킹・ランキング(1.11/122), 미사일・ミサイル(1.45/115), 쇼핑・ショッピング(1.37/111), 쿼터・クォーター(1.19/111), 컬러・カラー(1.32/109), 라운드・ラウンド(1.19/80), 핸드볼・ハンドボール(1.33/69), 칼럼・コラム(1.31/68), 터미널・ターミナル(1.26/66), 디스크・ディスク(1.45/58), 로비・ロビー(1.44/57), 하우스・ハウス(1.44/52), 하이라이트・ハイライト(1.19/52), 비닐・ビニール(1.51/50), 레저・レジャー(1.33/43), 가드・ガード(1.35/38), 라이벌・ライバル(1.22/36), 트랙・トラック(1.46/34), 오토바이・オートバイ(1.46/31), 테이블・テーブル(1.44/30)
9	팀・チーム(1.27/2018), 리그・リーグ(1.27/401), 홀・ホール(1.26/218), 소프트웨어・ソフトウェア(1.38/166), 슈퍼・スーパー(1.26/160), 룸・ルーム(1.44/143), 멤버・メンバー(1.24/93), 탤런트・タレント(1.24/91), 발레・バレエ(1.33/75), 콘서트・コンサート(1.35/71), 시나리오・シナリオ(1.32/70), 바이러스・ウイルス(1.55/69), 미니・ミニ(1.18/66), 링크・リンク(1.26/64), 스카우트・スカウト(1.36/62), 커피・コーヒー(1.43/59), 코미디・コメディ(1.32/59), 디자이너・デザイナー(1.24/55), 뷔페・ビュッフェ(1.43/54), 드라이브・ドライブ(1.33/50), 모니터・モニター(1.24/50), 이벤트・イベント(1.35/49), 노트・ノート(1.45/46), 액션・アクション(1.33/46), 컨테이너・コンテナ

	(1.45/43), 디지털・デジタル(1.19/41), 어시스트・アシスト(1.24/40), 아트・アート(1.32/39), 코믹・コミック(1.32/38), 밴드・バンド(1.27/36), 가이드・ガイド(1.24/33), 오디오・オーディオ(1.46/32), 재킷・ジャケット(1.42/30)
8	골・ゴール(1.33/89), 스타・スター(1.23/267), 가스・ガス(1.41/251), 에너지・エネルギー(1.50/217), 타이틀・タイトル(1.31/176), 올・オール(3.19/170), 테니스・テニス(1.33/156), 그룹・グループ(1.22/136), 홈・ホーム(1.17/126), 주니어・ジュニア(1.20/102), 탱크・タンク(1.46/101), 앨범・アルバム(1.45/97), 캠프・キャンプ(1.33/94), 히트・ヒット(1.15/81), 엔진・エンジン(1.46/80), 리듬・リズム(1.19/60), 가스・ガス(1.51/53), 톱・トップ(1.11/51), 리셉션・レセプション(1.35/48), 알루미늄・アルミ(1.51/47), 서클・サクル(1.27/47), 캠퍼스・キャンパス(1.25/45), 레이더・レーダー(1.46/44), 킥・キック(1.33/42), 세일・セール(1.37/40), 테마・テーマ(1.30/38), 오케스트라・オーケストラ(1.32/37), 슈팅・シューティング(1.33/34), 보일러・ボイラー(1.46/34), 블로킹・ブロッキング(1.38/31)

韓国語のやや増加（増加傾向係数+7～+3）

係数	韓国語・日本語訳　(分類番号/通年度数)
7	스포츠・スポーツ(1.33/656), 클럽・クラブ(1.26/294), 쇼・ショー(1.38/213), 코치・コーチ(1.24/191), 코스・コース(1.15/128), 보너스・ボーナス(1.37/93), 덤핑・ダンピング(1.37/87), 심포지엄・シンポジウム(1.35/69), 캐럴・キャロル(1.32/68), 그래픽・グラフィック(1.31/68), 레이저・レーザー(1.45/57), 슈퍼마켓・スーパーマーケット(1.26/49), 토너먼트・トーナメント(1.35/48), 칩・チップ(1.46/45), 티켓・チケット(1.40/45), 액세서리・アクセサリー(1.42/44), 마케팅・マーケティング(1.38/44), 메이저・メジャー(1.46/39), 칵테일・カクテル(1.43/39), 플레이어・プレーヤー(1.24/38), 콩쿠르・コンクール(1.35/34), 벤치・ベンチ(1.44/31)
6	달러・ドル(1.19/(1874), 비타민・ビタミン(1.53/161), 챔피언・チャンピオン(1.24/158), 칼로리・カロリー(1.19/137), 메달・メダル(1.45/122), 플레이・プレー(1.33/81), 헬리콥터・ヘリコプター(1.46/65), 시리즈・シリーズ(1.19/58), 플라이・フライ(1.33/50), 필름・フィルム(1.46/41), 알코올・アルコール(1.43/40), 매스・メス(1.31/39), 테너・テナー(1.24/34), 오일・オイル(1.41/32), 바이올린・バイオリン・バイオリン1.(432)), 체인・チェーン(1.41/31), 이슈・イシュー1.(330)
5	인터넷・インターネット(1.13/346), 채널・チャンネル(1.15/231), 게릴라・ゲリラ(1.35/230), 슈퍼・スーパー(1.19/140), 케이블・ケーブル(1.41/135), 포인트・ポイント(1.17/119), 롬・ロム(1.30/115), 온・オン(2.38/109), 멀티미디어・マルチメディア(1.31/98), 이슬람・イスラム(1.30/91), 브랜드・ブランド(1.31/75), 갤러리・ギャラリー(1.44/73), 테스트・テスト(1.30/67), 투어・ツアー(1.33/64), 코드・コード(1.31/63), 스피드・スピード(1.19/61), 골든・ゴールデン 1.(157)), 포럼・フォーラム(1.35/56), 리베이트・リベート(1.37/53), 클래식・クラシック(3.33/49), 그립・グリップ(1.41/49), 산타・サンタ(1.20/44), 펀드・ファンド(1.37/42), 북・ブック(1.31/42), 엔지니어링・エンジニアリング(1.24/42), 카페・カフェ(1.26/41), 웹・ウェブ(1.17/41), 피라미드・ピラミッド(1.47/40), 안테나・アンテナ(1.46/40), 램・ラム(1.42/40), 장르・ジャンル(1.11/40), 에이즈・エイズ(1.57/39), 비즈니스・ビジネス(1.38/37), 소프라노・ソプラノ(1.24/37), 언더・アンダー(1.15/37), 타워・タワー(1.44/36), 인테리어・インテリア(1.41/34), 록・ロック(1.45/32), 팩스・ファックス

	(1.31/32), 리조트・リゾート(1.17/32), 샷・ショット(1.33/31), 채팅・チャット(1.31/30), 매스컴・マスコミ(1.31/30), 오피스・オフィス(1.26/30), 쿠데타・クーデター(1.35/211)
4	맨・マン(1.20/132), 텔레비전・テレビ(1.46/106), 복싱・ボクシング(1.33/100), 프리・フリー(3.36/96), 댐・ダム(1.47/87), 하키・ホッケー(1.33/86), 스케이트・スケート(1.33/63), 아나운서・アナウンサー(1.24/59), 칼슘・カルシウム(1.51/57), 로터리・ロータリー(1.47/57), 미들・ミドル(1.33/56), 고무・ゴム(1.41/55), 스케이팅・スケート(1.15/55), 팬・ファン(1.24/47), 파이프・パイプ(1.41/39), 매치・マッチ(1.33/37), 캘린더・カレンダー(1.31/35), 트레이닝・トレーニング(1.30/31), 테러・テロ(1.35/329)
3	택시・タクシー(1.46/273), 시멘트・セメント(1.41/116), 가톨릭・カトリック(1.30/89), 킬로・キロ(1.19/67), 다이아몬드・ダイヤモンド(1.51/52), 링・リング(1.41/52), 롱・ロング(1.19/43), 타임・タイム(1.15/42), 원・ワン(1.19/38), 텔레비젼・テレビ(1.46/37), 팬 ・ファン 1.(436)), 브리지・ブリッジ(1.33/36), 라이트・ライト(1.33/103)

韓国語の変化無し（増加傾向係数+2～−2）

係数	韓国語・日本語訳 （分類版語/通年度数）
2	이브・イブ(1.33/81), 토픽・トピック(1.30/68), 레슬링・レスリング(1.33/58), 아마추어・アマチュア(1.23/50), 제트・ジェット(1.15/46), 마일・マイル(1.19/44), 무드・ムード(1.13/42), 미스・ミス(1.34/41), 웰터・ウェルター(1.33/37), 마라톤・マラソン(1.33/152)
1	오페라・オペラ(1.32/119), 페이지・ページ(1.31/52), 산타클로스・サンタクロース(1.20/46), 케이스・ケース (1.10/145), 리스트・リスト(1.31/37), 잉크・インク(1.45/34), 스카웃・スカウト(1.36/34), 레코드・レコード(1.45/32), 메모・メモ(1.31/32), 톤・トン(1.19/119)
0	챔피온・チャンピオン(1.24/63), 파운드・ポンド(1.19/37), 키스・キス(1.33/31), 뉴스・ニュース(1.31/445)
−1	파티・パーティー(1.35/185), 피아노・ピアノ(1.45/141), 랑데부・ランデブー(1.35/96), 댄스・ダンス(1.33/61), 야드・ヤード(1.19/35), 로케트・ロケット(1.42/31), 이데올로기・イデオロギー(1.30/30), 데모・デモ(1.35/161)
−2	라인・ライン(1.17/114), 트리・ツリー(1.41/97)

韓国語のやや減少（増加傾向係数−3～−7）

係数	韓国語・日本語訳 （分類番号/通年度数）
−3	퍼센트・パーセント(1.19/36), 센치・センチ(1.19/32), 크리스마스・クリスマス(1.33/778)
−5	인플레・インフレ(1.37/148), 마이크・マイク(1.46/33), 라디오・ラジオ(1.46/225)
−7	커뮤니케이션・コミュニケーション(1.31/77)

韓国語の減少（増加傾向係数−8～−15）

係数	韓国語・日本語訳 （分類番号/通年度数）
−9	트럭・トラック(1.46/137)
−11	브로커・ブローカー(1.24/50)